

川柳塔

創刊大正十三年
通卷八一九号



白川協加盟

No. 819

特集・阪神大震災百句

八月号

川柳塔まつり

本社と地方同人との交流を活発にするイベントとして今年度から次の要項で実施いたします。

△前夜祭（懇親会）▽

とき 9月30日（土）午後6時から

ところ なにわ会館（近鉄上本町・地下鉄谷九）
会費 5000円（要申込・宿泊もあっせん）

△平成7年度同人総会▽

とき 10月1日（日）午前10時～正午

ところ 大阪市立労働会館（アピオ大阪）

（J・R・地下鉄森之宮）

議事 会計報告・会計監査報告・事業経過報告・

年間事業計画・役員人事・その他

△各賞表彰式▽

路郎賞・川柳塔賞・澎湖賞・茴香の花賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を同日午後1時から行う。

△記念句会▽

各賞表彰式につづいて記念句会（10月本社句会）を行
う。兼題・選者は本誌9月号で発表。

川柳塔社

『川柳塔わかやま』 300号記念大会

とき 8月6日（日）午前11時開場

ところ J A会館（J R和歌山駅前）

兼題と選者（各題2句・零時半締切）

「続 く」河内天笑選

「耐える」中村重治選

「ハンカチ」森中恵美子選

「山」田中好啓選

「歌」橘高薫風選

会費 1500円（軽食・記念品）

懇親宴 3500円（お申込下さい）

主催 川柳塔わかやま吟社

新刊

谷垣史好句集

谷垣史好著 橘高薫風序文
B6判・148頁 定価5000円

送料240円

史好川柳の珠玉 五百四十句を収録

編集・発行 川柳塔社

石曾根民郎先生

橘高 薫 風

写真のように浮かんで来た。

雨の松本にて

遠く来て信濃に山の無い日なり

路郎先生が、この旅愁に満ちた句を詠まれたのは昭和十一年のことだ。そして

路郎師と別れる

師の汽車よひとしほ秋を縫ふてゆけ

の句で師弟の情を深められた民郎先生。

古い『川柳雑誌』で勉強していた時代の

私に、これらの句は深い感動を与えた。

ところが、石曾根民郎処女句集『大空』

には次の句も掲載されている。

麻生路郎師御来松 二句

朝空に雨は無帽の師を迎へ

徳利ひとつ乾さば旅路は師にはるか

路郎師と浅間温泉一泊

ねざめては湯の香の窓へ師をさそひ

師は五十歳、弟子は二十八歳、その頃

の浅間温泉の宿は、鄙びたたたすまいであつたらう。右手に盃、左手に煙草の師

の姿が彷彿とする。朝の窓には常念岳が

今日のように、頂上辺り雪に粧われている

たであらうか。民謡浅間節の一節には

へ日本アルプス 浅間の宿じや

庭のけしきで ひとながめ

とある。十余年の歴史を持ち大飼の湯と

も呼ばれ、元禄の頃には善光寺詣りの旅

人あまた立ち寄る名どころとなつた湯

だ。

朝、屋上から見た残雪の常念とまほろ

ばの国宝松本城。そして川柳大会の舞台

の、長野大会相談役の席で身じろぎ一つ

されぬ、瘦身の見るとに清廉なたたず

まいの兄弟子、八十五歳の民郎先生が、

帰阪後も三重写しとなつて私の脳裏から

消えない。

去る六月十一日、長野県松本市文化会

館で第十九回全日本川柳大会が開催され

た。出席者五百六十名、印象まことに爽

やかであつた。

私にはこの大会の出席に大きなたのし

みがあつた。路郎門の大先輩、石曾根民

郎先生と久しぶりにお会い出来ることで

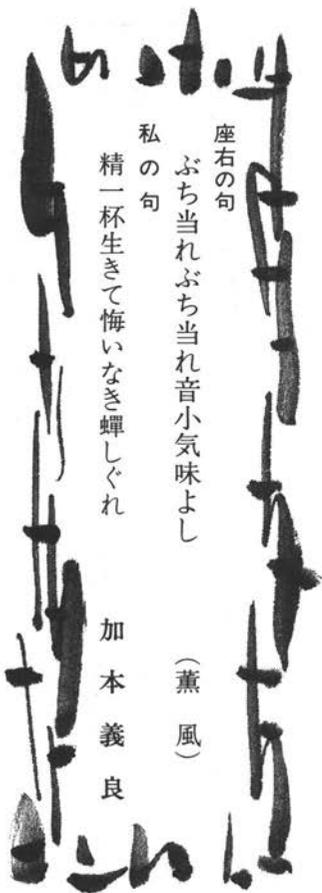
ある。それがかなつたのは、浅間温泉ウ

エステンホテルでの前夜祭の宴会場だつ

た。いち早くお姿を見付けて堅い握手を

交わす。無言の中にお互いの思い出が往

き交い、路郎先生の鮮明な像がモノクロ



川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 石曾根民郎先生	橋高薫風	：(1)
禁煙マーク	安藤寿美子	：(2)
川柳塔(同人吟)	橋高薫風選	：(4)
自選集	橘高薫風	：(44)
大空のころ(55)	東野大八	：(48)
川柳の群像 古屋夢村	高杉鬼遊選	：(54)
■古川柳 柳籠裏二篇研究(二十六丁)	小出智子	：(52)
水煙抄	西原艶子	：(81)
秀句鑑賞「同人吟」	小出智子選	：(78)
水煙抄	西出楓楽選	：(82)
澎湖抄	田中正坊	：(87)
茴香の花		
〈特集〉「阪神大震災百句」		
■川柳二ほれ話「川柳とユーモア」		

禁煙マーク

安藤 寿美子



督促状が来たのである。

昨年亡くなったつれ合いの府・市民税第四期分が収めてなかったのだ。彼は銀行口座振替にしていたし、口

座は解約してなかったで、私はうっかりしていたのだ。しかも、すっかり延滞料がついているではないか。

市役所へ行けばすこし喧嘩腰

市役所へ行けばすこし喧嘩腰

という句をつくったくらい、行きたくない所だったが、つれ合いの死後、謄本だ証明書だと何度か行っている間に、何故か別に嫌だと思わなくなっていたが、何しろこの件には生活がかかっているのだ。がんばって弁明のための書類を掻き集め、該当窓口へ行った。

「こうこういう事ですねんけど、延滞料かんにんしてもらえまへんやろか」。パンチ佐藤にどっか似たおにいちゃんは、ふむふむいって聞いてくれたのだが、パソコンに向かってなにやらやって「ほんなら延滞料はよろしいよって税金だけ収めていってください」と納

「雷」	稲葉冬葉選	……	(88)
一路集「外国」	鈴木公弘選	……	(88)
「過ぎる」	榎本吐来選	……	(89)
初歩教室「痛い」	吉岡美房	……	(90)
各地柳壇(佳句地十選/高瀬霜石)	藤井一二三	……	(92)
■句会だより 堺川柳会	小出智子	……	(105)
■句集紹介 田中透太「風のあと」	田中正坊	……	(106)
■句集紹介 「谷垣史好句集」	山本義子	……	(107)
瀬戸まさよ「冬木立」	亀岡哲子	……	(108)
七月本社句会	橘高薫風	……	(114)
全日本川柳長野大会に参加して	波多野五楽庵	……	(115)
柳界展望	……	……	(117)
西森花村さんの思い出	……	……	(118)
嗚呼 村田善保先生	……	……	(119)
八月各地句会案内	……	……	(120)
■編集後記	……	……	(121)

座右の句

真っ直に生きて煌めくもの拾う

私の句

覚悟するまでの苦しい夜が明ける

(太茂津)

塩谷 佐代子

付書を作り替えてくれた。わーうれし、やったやった。すぐ喧嘩腰になる私が、今は亡き西尾葉先生のご薫陶のごとく、和顔愛語で接したおかげか。

税金を払ってふと見ると、パンチ佐藤氏のデスクの上に大きな禁煙マークが立ててあるではないか。私はナットクした。近頃市役所へ来ても、入った途端に感じるむっとしたいやな臭いがないのである。和顔愛語のもとには煙草の臭いがないからであって、私の人格が向上したわけではなかったのだ。それにしても禁煙のおかげで、和顔愛語のおかげで、延滞料をかんんして貰えたとしたら、ありがたいことではないか。念のため、私はかえりに受付で聞いて見た。そしたら、新館は全館禁煙、旧館は分煙、来庁者はロビーでお吸いくださいとのことであった。私の行ったのは旧館だったけれど、ノースモーキングの効果はてきめんであった。窓口と市民が、があがあいついていらざる喧嘩をしないですむとしたら、窓口の事務がスムーズにはかどるとしたら、役所の空気をきれいにする、禁煙はまことに結構な事ではないか。

かんべんしてもらった延滞料で、本を二冊たこ焼きとアイスもなかを買って、私はハッピーであった。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

島根県 小 砂 白 汀

青森県 田 中 叶

永遠に心が疼くエノラ・ゲイ
ほろ苦い露が買われて梅雨に入る
流れ星パフォーマンズの空しさよ
訪販とこんにやく問答してあそび
弁護士の弁護うけあう者がなし
苛められまた苛められ角がとれ

竹原市 小 島 蘭 幸

父の日が来るぞ来るぞと飲んで
結婚記念日 今年もダイヤ贈れない
遊び疲れて眠る四十七歳である
ポケットになにもない日が続くなり
退屈はしない地獄もサティアンも
ジャンケンポンいつも三対一になる

関の声聞こえる男子トイレまで
定年を思うトイレで何人か
東京にいたことがある眼に負ける
よく笑うおんなど二人きりになる
就職をしないキノコが一パック
音声を変えモザイクの少女達

弘前市 高 瀬 霜 石

すれ違う人とは今日もすれ違う
不純物たっぷり混ざる僕の数珠
気がつけば家で寝ているブーメラ
選挙には行くが政治家信じない
ちよつとした差ですひと好きひと嫌い
弱者にはとつても長い赤信号

黒石市 千葉風樹

朝の陽へ今日を信じて切るキャベツ
分校に咲いて真実なる桜

また吠えねばならぬ 飼犬に朝が来る

ああなんと軽い命だアスファルト

とりあえずこよみを剥いで思案する

案内状という決闘状が来る

米子市 政岡日枝子

ハニワの上に雪も積もり花も積もり

声高に話す土偶はにせ者だ

魂は土に残してきた土偶

眸の奥に埴輪踏まれた痛みもつ

老いてゆく土偶に似たり父の貌

火の匂い花の匂いのする土偶

宇部市 平田実男

本番になると小さく見える的

子の嫁に女を感じハツとする

同級の訃報 晩酌ほろ苦い

襟正せねばならぬ宗教そこかしこ

アルバムを繰る自叙伝を読むように

所得税かけてた頃をなつかしむ

八尾市 宮西弥生

もらい泣きの涙ではない花の雨

眉ひいて昨日のことは忘れよう

決心がつくまでドアを開かない

まるいまるい心を下さいお星さま

食卓に三度出て来る雨つづき

人間国宝 壺に流れる息づかい

米子市 野坂なみ

日の丸よ赤い創口いつ癒える

魚には川の喘ぎがよく見える

まっ赤な花も一輪ほしいお仏壇

仏像をほとけになつて彫っている

一本足の芸もそろそろ限界に

七言絶句 中の一字が消えている

和歌山市 木本朱夏

テトラポットのひとつはきつと亡母だろう

花買ってアヴェマリア聴く穴の底

レモン真つ二つ憎しみが迸る

夏萩の経帷子に似てさむし

いつも赦し許し濁つてゆくばかり

枯葦に見え隠れする亡父の背

豊中市 安藤寿美子

ペアカップ夫婦湯呑とはちがう

テイペア作る形見のマフラーで

じっと手の老人斑を見えています

フレームで生命を終る螢です

話飛ぶ芝居や螢や写経やと

新聞の来ぬ朝カラス鳴いている

吹田市 栗谷春子

この寒さ旅のころもはととのえど

人間のえらさどこにも遺跡あり

好きなき好きなきこととして許される

颯爽と歩くいいことあった今日

わだかまりひとつ解けたぞ爪の色

土佐堀にうなぎの舟がさむざむと

茨木市 堀良江

艶やかに今年最後の豆御飯

得手不得手あって世の中うまくいき

私の名ひとり歩きをして困る

新茶なら立つ茶柱もなおさらに

雨近し植田に沈む雲の波

梅漬けて今年も既に年半ば

倉吉市 野中御前

お元気でまた逢いましょうお月さま

腹立ちも逢えばにっこりしてしまふ

餅を焼く一つは怒り破裂した

白い歯をいっばい見せてりんご咲く

本物に一番近い偽物だ

致死量に近い暴言飲まされる

例年のよう朝顔の杖立てる

八十八夜 茶を摘み己が茶をつくる

迷惑をかけるが否 八十忙しい

次男坊 嫁の母様よう看とる

ふるさとの山に抱かれて酔うている

考える間をとり道を誤らず

岸和田市 田中文時

読み返すそこに何かがある句集

野良犬の過去 食と住そろつてた

その昔 選良と言う語があった

歯ふらしも二本ひっそり老いふたり

戦争が無かっただけの半世紀

七人の敵も無くなり惚けてくる

岡山市 川端柳子

温顔の浮かんで消える雨しとど(栗先生の御逝去に)

てっぺんで周囲の山々見失う

山の絵を描いて日の出を信じよう

この道に立ち止まっての痛みです

淋しいから度々鈴を鳴らします

しあわせな頃 便箋を忘れてた

富山市 舟渡杏花

干からびて楽になったかかたつむり

骨髓バンク契約判をきつちりと

独りぼっちでなかつたことを臥して知る

再びのない人という風みどり

美しくもああ残酷な万華鏡

狭庭に天与の花がひっそりと

寝屋川市

江口

度

雨だれのリズムで黄ばみすすむ枇杷

晴れだ晴れだ家中の窓開け放つ

頑固さは寿司屋に任しとくことに

世も末か六法厚くなるばかり

夕方に妻の暗示が効いてくる

妻の留守 無言電話がよくかかる

今治市

野村京子

海は青 逢う日ブルーのドレス着る

深呼吸するとバラバラ骨がなる

人ごとのように月日が過ぎて行く

裁くには傷つきやすき白い桃

カタログは見るのが好きで買いません

ヨイドン親のない子が出遅れる

鳥取市

小谷美ツ千

亡母を思えば温い目をした母ばかり

故郷の老母に良い事しか言えず

泣き止んだ顔を鴉に見てもらう

やさしさの限りをつくす 嘘である(葬告知を聞いて)

助走路が長くて転びそうになる

花踏んで男の骨が太くなる

鳥取県

上田俊路

新しい仲間溶けたランドセル

自画像を僕だけが持つ色にする

時々サタンの声に耳をかす

友救うための白旗なら振ろう

素晴らしい人すばらしい風を持つ

酒拔きの相談だからまとまらぬ

西宮市

亀岡哲子

葱売切れニラも分葱も役立たぬ

取調室でもないにみな喋る

贅沢な悩みと言われ そうだとも

私は鳶まあるく飛べる空が欲し

緑陰に神憩われし風神社

クローバー優し長生きする牝牛

堺市

柿花紀美女

亡母に似た生きざま母の年となり

正論で迫るひたむき持て余し

目立たない私の石を持ち続け

織り上げた我が生涯の小さな虹

古里の森で昔の樹を探す

新茶飲む幸せ雨の老いふたり

鳥取県 新家 完司

どなたのくしゃみや花冷えの座禪堂
ほとけさまの代わりに鳥が喋っている

子を亡くした人よ泣くべし眠るべし
親不孝者の屍も花で埋められ
鳶が舞う活断層のない世界

鳥取県 江原 とみお

浮き袋つけて裏街徘徊す

振るたびに短くなってゆく尻尾
挽歌かな葉ざくらに棲む毛虫たち

風下に息して骨がつよくなり
波は気まぐれ取舵だ面舵だ

大阪市 本間 満津子

水鶏庵 在りし日偲ぶ花水木 (葉先生追悼句 二句)

塔で又会えたら握手して下さい
ひとりひととき心静かに新茶の香

弱虫が集まり怖いことをする
どうしたら頭を空に出来るかな

大阪市 榊 本 落 児

やけくそで飛ばす風船だつてある

養殖の鮎にふるさと問うなかれ
彫刻展 裸婦はいずれも逞しい

真つ白な嘘ついてます美人です
勿々頓首 相手の顔が目に見える

大阪市 大河 未佐子

長老の乾杯おかけになったまま
遅れてもまた乾杯の人気者

三次会 乾杯なしに盛り上がり
乾杯のグラスも気取るフルコース
乾杯の時はたしかに居た二人

堺市 桑原 道夫

夏という言葉にかつて胸つまりし

ボートの三人無口になって戻りけり
六月や目玉濡らして顔洗う

踏切で朝の力を溜めている
恋人よ空の青さを如何せん

豊中市 田中正坊

不戦なき不戦決議をする議会

新柄のネクタイを買う誕生日
好物の目刺し冷や酒のむ至福

今生きているのは奇跡かも知れぬ
新世紀さほどに遠きことならず

豊中市 三宅 つえ子

青空を見るまで走る車椅子

息切れを防ぐためならカラオケも
向日葵を貰い豊かな夢を見る

散る花に私の像を置いてみる
車椅子の影も疲れたままの夏

箕面市 岩津 ようじ

寝屋川市 堀江 光子

二等兵で戦死 一等兵の墓
凡人のくせに信念持つ恐さ

カルチャーも満席 二浪して入る

駅弁のように無難な味の人

御民われ由緒正しき無為徒食

吹田市 山本 希久子

水鶏庵あとに何処へ旅さるる(栗先生を送る)

孤独の華やぎ睡蓮は多色

金魚ひらひらこの世地獄か極楽か

愛は不毛 水無月の空 星見えす

病院へ行く坂ばかり歩かされ

吹田市 古川 喜美子

荷物みな持って貰って落着かず

ネオン散乱 童女のような妻といる

コントロールが下手で漂流しています

棚の隅 十年拭いたことがない

あの丘は遠くで見てる時が良い

高槻市 川島 颯云児

結び目がほどけ転んでばかりいる

まとめ買いしても値引きのないたばこ

チャンス来るまで眠らせておく野心

かっこよく跳んだつもりの水たまり

老獺を隠す帽子は深い目に

集まって歌の嫌いな子がいない

新じゃがを包むサリンの新聞紙

三年目 夢中の味が分かりかけ

ひとりより二人が寂し別れの日

一日を持薬を飲んで締めくくり

八尾市 内海 幸生

不覚にも恩師の訃など思わざり(嗚呼栗先生)

焼香の列延々ととめどなく

花々々 花にうもれた恩師の死

来週は退院ビール飲めまんねん

温顔へ閻魔も途を開けられよ

八尾市 高杉 千歩

最敬礼されて貯金が出しにくい

愛染さんこの児よろしく林檎飴

細うても負けんと猛暑生きてます

斎場はここに決めとこ夏早

過去型で話すことから多くなる

藤井寺市 吉岡 美房

哀しくて弔句一句がまだ出来ず(悼栗先生)

人生は一睡の夢 黄昏る

掌から掌へ蛍を移す姉妹

ぶつかって見たら何でもない話

いいかげんにせよと言いたい政治持つ

松原市 小池 しげお

昔のことは酒が言わしていたらしい

止められぬタバコを父の日に貰う

三つ目の辻でも後ろ振り返る

欠けかけた夫婦茶碗を拭いている

真直ぐな木にはたつぷり水をやる

松原市 玉置 重人

水鶏笛 温顔ばかり目に残る

割り切れば勝つか負けるかだけのこと

浮子が動いて野次馬も期待する

コンペヤーの目に人間はよく怠け

短冊の句も取り替えて衣替え

羽曳野市 吉川 寿美

地蔵半眼 世の移ろいの風を聴く

ためらえば闇がわたしを消しに来る

罪の一つにプリンがどうにも固まらぬ

ことのほか重い今年の掛ぶとん

八月よ忘れてならぬ愚の戦記

岸和田市 高須賀 金太

トキが消えた次はニンゲンの番だ

表情のない美人だいきらいです

ポロポロの私を雨が打ち据える

繁華街の誘蛾灯に掛かったことがある

橋はいつでも僕を置いてきぼりにする

岸和田市 岩佐 ダン吉

誘蛾灯 虫にも命あるものを

核廃絶の希望を捨てたりはしない

ハルマゲドン少年の目は澄んでいる

責任はとらず侵略とも言わず

とりあえずお皿を褒めることにする

尼崎市 春城 武庫坊

戦争を知らぬ男の不戦論

不安定な社会に耐えるやさしい眼

笑い声 満ちておくれる鳩時計

赤信号が信用出来ぬ街走る

全線復旧 新品の靴はいて乗る

尼崎市 春城 年代

露草のいろ鮮やかに傷癒える

娘と孫のかど曲がるまで手を振りぬ

まちがいは激しい雨に打たれしより

亡母そっくりの猫背ある日は憎みおり

きっかけに乗れずじまいの孤独かな

尼崎市 田中 薫

鴉の子もとより羽根の傷を負う

背中が見えないように魔法をかけられた

痒み止め塗って蟹は詩人の穴を掘る

憎しみは地より半跏思惟の影揺らめく

コメディータッチで揃うバンザイの両手

西宮市 奥田 みつ子

清水飲む耳にカッコウ霧が峰
銀の雨 封書一通謎めいて

恋の軌跡 誇りはあれど悔いはなし

順を追う日本の四季の美しき

仮設店舗 葱も苺もいきいきと

西宮市 西口 いわゑ

情けある鬼と時どき酌み交わす

ぬかるみの深さも知っている河童

しようぶ園 女の競演など思う

愛と憎 女の髪に刻まれる

旅の宿 地酒かこんで華やいで

宝塚市 嵯峨根 保子

テーブルに一つ残ったレモンの黄

耳許でカウントを読む鬼がいる

欲しそうな素振りは見せぬコレクター

集合写真の端を探せば母がいる

バラ園で疲れるほどの花に酔い

加古川市 吐田 公一

謀叛など知らぬ男の妻の留守

被災跡 無念を胸に刻み込む

おとなしい母の立腹もどらない

良寛になれぬが他人の子と遊ぶ

厳格な父のやさしく老いた顔

奈良市 宮口 笛生

玉碎の覚悟も五十年むかし
五十年むかし憲兵新兵で

負けるとはまさか五十年むかし
兵隊で死んで還るが忠と孝

あの日から五十年も生きのびて

拒絶され天国地獄死ぬもせず

生駒市 北山 悟郎

義足つけ僕の一生地獄図絵

人生の探求果し喜寿の坂

金婚に後一息を助け合い

てのひらに世界をのせて思案する

陽が沈む今日も達者であった母

和歌山市 牛尾 緑良

まだ夢を守りつづけるオルゴール

疑わず靴と背広が揃ってる

蝕んでいたのは我が手我が心

重心が少し動いた震度七

心せよ裡なる鈴がチリリ鳴る

和歌山市 西山 幸

和定食 生流転まだ続き

紫陽花は海の色なり恋逢か

約束をみな湿らせる微雨が降る

枇杷を剥く指には遠い過去未来

和歌山市 田中輝子

花鳥 波の高さはまだ知らず

悲しみをこぼして歩く海岸線

ひとときを大切にするぶらんこ

水一杯 差を縮めたり離したり

上昇気流に乗せた返事がまだ着かず

和歌山市 福井桂香

令夫人などと呼ばれてお仲間

レーガンもああ妹も病んでいる

何を言うてもふんふんふんと受け流す

ひとつずつ聞いた言葉を噛みほぐし

訣れから匂い無くしたラベンダー

海南市 三宅保州

怒ってる人に卵を握らせる

枝伸びたことを知ってる蝸牛

竹光は刀でないとみだ不覚

真直ぐな道に油断がしのび寄る

ほとぼりをゆっくりと消す香を焚く

砂川市 大橋政良

ふと思うことの一つに死後のこと

楢山がいろいろ映るシャボン玉

荷が肩にくいこみ途中下車をする

とまり木に乾いた男ばかりいる

空しさはひたひた砂の上歩く

五所川原市 斉藤 焔

廃校に囀る巨木だけ残り

足下の視野から地球大切に

スタートラインで静かに目を閉じる

ジョギングの少年 前を前をゆき

遭難の話はしない山仲間

弘前市 佐治 千加子

迷い入る菜の花鳥ひと遠く

流水去りゆっくり骨が崩れゆく

向い風 肋覚悟の息を吐く

傘たたむほろほろ心こぼしつ

向き合って言葉はいらぬ夜の鏡

弘前市 浅田 隆樹

一升びん何と手頃な持ちごたえ

二級酒に本当の酒の味がした

のこり湯がいとおし子らの香りして

テレビ消す妻との距離が近くなる

チャンネルがひとつで足りる事件あり

弘前市 一戸 ツネ

ひとことに砂を噛みしめやがて貝

身内には老いの弱みが先にたつ

火を吹いて孤独の隙間裂けたがる

極楽へゆくと信じる涅槃絵図

ペン先を研げば殺意の顔となる

弘前市 肥後 和香子

不器用に生きた父だが死に上手
かすみ草てんこ盛りです父の墓
乳房きゅんととても健康六時起床
三対一 紅生姜になるしかない
桃太郎 一休さんには遠い子ら

東京都 山口 新子

塩を買うつもりパン屋の自動ドア
走り切るための右手空けておく
稜線の淡きあなたはその向こう
マニキュアを剥がした十指わたしの手
麦踏み列 亡母さんがいた佳日

鳥取市 両川 洋々

草でさえ芽吹くに神戸負けるなよ
喜劇だね教祖が神になりすます
癌告知されて春過ぎ夏がすぎ
熱帯魚お前不倫を見ていたか
カラオケを地獄の鬼に聞かそうか

鳥取市 西原 艶子

午後三時 疲れに紅をさしてみる
どん底の日に洗濯機故障する
居酒屋で告白なんて信じない
みかえりを心の隅が待っている
星だけが光る夜空が美しい

米子市 石垣 花子

二人分の火を大切にしてくらす
ロウソクの火の裏側に仏様
阿呆になる薬時々祖母がくれ
青信号の内に渦から抜け出よう
首振って鈴付けさせぬ猫の意地

米子市 青戸 田鶴

うたかたの五十年とも想うなり
信号が変わると人の気も変り
弾まない毬にきあいを入れて
けしの花こが花野と揺れている
夕映えの中つかの間に華やいで

米子市 田中 亜弥

消し壺が静かになつてから眠る
太陽が起きだすまでに顔洗う
ふところは聖地 他人に覗かせぬ
老朽化はげしい椅子とわたくしと
骨太い男そろえて沖へ出る

米子市 林 荒介

お袋と唱えた経を繰り返す
ぬるま湯に愚かなものを浮かばせる
動かないちちをせつせと押している
バス停の寸劇だから面白い
花束にされて荷物になりだした

米子市 林 瑞 枝

香炉からははの挽歌が立ちのぼる
背を向けたさら地にははの影法師

待ってはくれぬ時計とつなぐ夢がある

長生きの予感ストレス溜めてない

河鹿鳴く小川に溺れゆく心

米子市 新 正 子

米糠三合 養子はポルシェ持つている

大笑いして昇天をする花火

迷ったら買わないことにする財布

嫁さんがまだ見付からぬせみの声

父ちゃんの留守は乙旗揚げておく

米子市 茂 理 高 代

母が病んだこのかなしみは身を刻む

すがる目が子に返ってる手術台

つつじ園 目にも心にも虹をさす

差上げる花をセッセと作っている

真心を吸ってくれたか実がなっている

米子市 中 井 ゆ き

天と地と私をつなぐ花満開

はるかなる人とつなぐは星たちか

一粒の雨のはるかな旅立だ

モスクワの免税店のくらいこと

雨だれに幸せなんだと気がついた

鳥取県 土 橋 螢

近寄るな危ない男かも知れん
戦争を忘れられないのも男

蛹から顔出している兜虫

生きているうちに浄土のパスポート

人間魚雷回天の血の匂い

鳥取県 谷 口 次 男

牛乳をあんまり飲むと牛になる

天地をも動かす力それは金

天国に近いところにある地獄

お化けより怖い飲み屋がすぐ近く

人間がみみずの餌になる未来

鳥取県 鈴 木 公 弘

五月晴れ野良着を洗う手をあらう

天の川 同窓たちは元気かな

負けそうになるとカタカナ語を使う

太陽に恥じることあり月見草

雨さんざスッポン料理屋へゆこう

鳥取県 大 角 正 道

やるせなくゆつくりお茶を飲んでいる

洗脳をされても赤い血は流れ

正体の知れないもので眠られぬ

遊ぼう遊ぼう思い出がいつばいになる

明日があるから今日もたくさん飯を食う

鳥取県 大角幸代

アルバムをめくる音さえ過去の音

この道を真つすぐ行けば逢えるはず

エプロンを外すと胸に波が立つ

花のいのちが落ちてやさしさだけ残る

ハブニングただ風船が割れただけ

出雲市 園山多賀子

新星が一際きらめく師を偲ぶ(捧真傳)

可も不可もなく堂々巡りする

婦唱夫随アドリブもある花吹雪

雇い歯がなくて真実噛み分ける

来た道に残して置こう花の種

島根県 佐々木鳳笙

輝いて妻が温泉から帰る

郭公が去年と同じ樹で鳴いた

月青く病を友にして久し

亡き父母が今年寄り添う年回忌

働き者の亡母は粽の香にも生き

岡山県 荻野鮫虎狼

振返る視線を意識して美人

中元を一軒忘れて居る酷暑

合掌の指から漏れている仏

少うしは喜んでくれ古希の宴

妻にだけ聞かせる童話出来上がり

柳井市 弘津柳慶

啓蟄の穴から出れば春の風

災害地 修業式に子の遺影

町内の揃い浴衣で意気が合い

銃声の中で青春通り過ぎ

青春を国にささげてもう八十路

美禰市 安平次 弘道

無為徒食 明日の風にさからわず

傷口にしみ酔いざめの水と知り

均等法 女の武器がまたも増え

針の穴だけが真実知っていた

定年からもうこの指に止まらない

下関市 石川侃流洞

雛壇に並ぶと首が凝ってくる

悩むのはおよしと朝の洗面器

森抜けた風が一行詩と遊ぶ

長老とかつがれ名刺もう刷らぬ

極楽は呆けても辿りつくだろう

香川県 木村あきら

星落ちて温泉の句碑淋しがり

寝る羅漢 水鶏庵主も寝てしもた

閉幕を飾る何かを考える

持ち駒を使い果して黄昏る

三人が寄ると派閥が二つでき

香川県 工藤吟笑

腹いっぱい食べて肥らぬ本を買う

同窓にやつと勝ったは長寿だけ

急かいでも迎えはきつと来てくれる

サッパリと片付けたのに孫がきた

此の壁の向うは波が荒れている

高知県 赤川菊野

孤の部屋で夢二の女まねてみる

焼肉のタレも作って独り住む

ゆっくりと磨こう此の子大器かも

群にいて海の広さが判らない

歳月が勝手にシナリオ書き変える

唐津市 田口虹汀

温顔に接し今宵もこらむ読む(水鶏院を偲ぶ)

雨の日は孫から手話を習います

八十の手習いと言う術もあり

鬼薊 活けて達磨は武蔵の絵

大観の無我にまた目のお正月

唐津市 久保正剣

披講する浄土の句座に菜選

歳入を満たすと終るネズミ捕り

庶民から雀つた金で企業保護

霞ヶ関 雲など見てる人はない

サティアンに静止画像の妻が居る

唐津市 仁部四郎

学校であれやこれやの差に気づき

私を信じるための百度石

通夜の空 今日から月が欠けはじめ

せんだんの頃から既に半世紀

まだ見える母の童話を信じた日

唐津市 山口高明

他人の目に触れてはならぬ男靴

千年の眠りに覚めたミイラ展

トランクに貼ったシールが百をこす

此の年齢になつても母の夢を見る

義父さんに会わずに帰る娘を送る

熊本市 永田俊子

鉄砲百合が狙つてるあなたの胸

愛の糸紡いでやまぬ母の繭

虫を曳く蟻のかけ声聞こえない

古本屋でハナナト マメを読んでいる

孤独三十年 欠伸の涙拭いている

北九州市 梅田宣司

五臓六腑 持ちこたえたぞ喜寿迎え

俺の勤 困ったことに冴えている

両方の気持がわかるから困る

雑踏で儲け話を聞きかける

ときめきを抑え王手の歩を握る

唐津市 浜本ちよ

香川県 山地 マツエ

白木れん寺庭に凜と心澄み
エプロンは白いままなり料理下手

過去捨てて出直す故里が他人めく
うつ晴らす姑が小さな旅に出る

意のままにならぬ筆もて水墨画
水墨画筆にシャンブー リンスさせ

勿体ないを積んで一人の老いの部屋
ハルマゲドン私一人が残っても
へソクリを隠した本が見当らぬ

香川県 成重放任

西条市 片上明水

米の味その国々の口に合い
野良仕事 今年も雨と泣き笑い

電柱の工事一日陽が当たり
いいことを聞いて食事の旨いこと
石段の汗ご利益を信じきる

あの人が目を疑った仕種する
旨くともサツと手が出ぬフグ料理

鯉のエサ切れるとサツと向きを替え
アパートの引越し窓で見送られ

香川県 池内かおり

今治市 越智一水

米櫃を満たすと老母は良く眠る
父の日を母が忘れて何とする

いらっしやいませとモナリザ笑ろてくれ(ヨーロッパ漫遊の旅 三句)
ライン河 古城たたえてよく稼ぎ

水を得た魚か老父の米作り
元氣出す魔法の鏡念入りに

アルプスを背に気取ったポーズとり
生かされているのだ恵みへ掌を合わし
枇杷の熟れ もてあましてる寡婦ひとり

香川県 新川マサエ

弘前市 小寺花峯

すねかじる子にもようやく出口見え
瓶で搗くお米の夢を今も見る

無口ゆえ花はだまって散るばかり
三ページ読んで薬が効いてくる

米作り重荷になつて来る齡
偶然に肴にされてはずむ宴

左遷する南は敗北に非ず
武器となる涙を消した均等法

大空に巢立つと強い風当り

留守番の部屋で時計と語り合つ

弘前市 中山雅城

塔碑から永久に消えない善保さん(村田善保さん逝く)

火よりも燃えて同志はネプタ撮る

夜桜が遺作になった写真展

可愛がる孫を見ないで悔いないの

趣味百科名も本業も捨てている

黒石市 相馬 一花

窓際で影薄くなる生き字引

女房にも一度言おうかアイラブユー

お化粧の時は物音聞えない

アベックをちらと見てから目を背け

金持は金の成る木を植え替える

八戸市 島田昭治

何故にこう嘘が多いか空見上げ

淡々として逝こうかな父母のもと

ああ美人つくため息が気にかかり

遺言に柿は要らぬと書くつもり

足跡の薄さ懸命に生きてるに

町田市 竹内紫鏘

街路樹の新たな歓呼バス曲がる

十年日記 老化のぼやき書くまいぞ

のろわしき軍靴と別な三万歩

野草観察 葉の天ぶらで締めくくる

寿の祝 一月生まれ立って謝辞

横浜市 菱田満秋

花と咲くなら華やかに赤く咲け

子の式へ扶養家族として並び

欠伸かみころしはしたが涙が出

柳絮舞う夢 故郷の街に佇つ

人生も付録の方が面白い

静岡県 藪田 蓼 杏

一本のタバコを分けた戦友は逝く

容赦なく若竹を揉む強い風

先輩に先ず健康の話から

出来る女 出来ない男 埋め夫婦

テレビに出て途絶えた友の便りくる

静岡市 安本晃授

忘却の彼方で笑う僕の影

青葉風 新茶の薫る母の家

受け皿が浅くて風の迷う路地

戦争の傷口なでて早や八十路

もう一度男を研く夏帽子

富士宮市 渥美弧秀

窓は雨 絆深まる歌声よ

富士山の姿 Xデーなる日

同情を過分と思う自尊心

回転木馬の孫は笑顔の王子さま

野草愛で夫婦で富士の散歩道

地に還るまで透析の繰返し

七尾市 松高秀峰

怒鳴られて見たくて父の墓に佇つ

雨続き呼べど売れないかもめーる

父の日も地下足袋で山 老夫婦

透析が終つて明日を考える

羽咋市 三宅ろ亭

片英語 使つて孫らを驚かす

わが余白 是々非々主義で埋めようぞ

抱卵のツバメ見上げに納屋通う

越中の真産売り雲版読んで去り

低温の日々へ農夫の立ちばなし

富山市 酒井輝

ロウソクの怒り根元で燃えあがる

死語がよみがえる八十路の同期会

権勢に溺れ謝る機を遁す

敗戦と言えぬ議員がまだ残る

粗服着ていてもおんなじ消費税

鳥取市 美田旋風

ほめられて王手の駒をひっこめる

証拠湮滅ボケないうちにしておこづ

地に落ちたバラへ淋しい風が吹く

頼つたた医者がポックリ先へ逝く
アルバムへぶつぶつ語りかける母

探し物 宇宙に負けぬ兎小屋

鳥取市 西村黙光

相手さえあれば二次会三次会

ペンを執り癩癩玉が羨み出す

三指をついて雨傘渡される

さすがペン煽てる骨に叱るこつ

米子市 木村富美子

曇り後晴れを信じてぬれて来る

好きだけど馬券を買つたことがない

ほたる草 無性に恋し母の忌よ

かたくなに小さな窓で世を計る

思いやる心がマナーだと思ふ

米子市 光井玲子

飯を炊く日課大事に生きている

日課にはとても忠実 老父の背な

母の鈴響けひびけと遠い屋根

時としておびえる命刻む音

さびしさを紛らす群の中にいる

米子市 菅井とも子

生きて還つて娘も何時か五十歳

山帽子ますます白く梅雨あける

塩加減ひかえ今年も梅を漬け

裏道を行けば近道出来そうで
かけひきに慣れ定価では買えぬ妻

米子市 寺 沢 みど里

サルビアの真紅に道を糺された
保護色の糸で結び目気づかせぬ
川を伝って古い記憶を取り戻す
生垣の手入れを老父がゆずらない
長男のおでこの張りは親ゆずり

鳥取県 松 下 たつみ

どうぞこの奥で人格光つてる
大往生 読む気にさせた雨の音
迷いから覚めたら僕の席が無い
時計が鳴って孤独の刻が深くなる
ひざの抜けたズボン勝ち気な女の子

鳥取県 幸 家 単 車

お布施見て僧侶も衣かえて出る
念力で壁の向うを推理する
Gパンの洗いざらしをはく若さ
壁画から古代文化を解き明かす
淋しさを飛ばしてくれた青い空

鳥取県 石 谷 美恵子

長続きのコツへはじめがきている
困ってる顔など見せぬ亡母だった
梅雨あけて青さを変え海の色
息抜きをさせてあげたい蟻の列
洗濯と掃除が好きでよく眠る

鳥取県 林 露 杖

芍薬の明日咲く蓄供華に剪る
山菜がなにか一品夏に入る
落城の悲話 万緑の古戦場
背を伸ばしウインド意識して歩く
ワンカップ車窓に眠気連れて来る

鳥取県 さえき や え

衣替えというにあらねどかすり着る
花作り これまた一期一会だな
年に不足はないが人柄惜しまれる
合掌の手にこぼされぬ種をもつ
子らのため花の小径をつけておく

鳥取県 太 田 幸 枝

男には陰の努力に気がつかず
歩の心持ってひろがる仲間の輪
過ちを消す消しゴムを父が持つ
重箱のすみつき過ぎ挫折する
うれし悲し敬老会の招待状

鳥取県 西 浦 小 鹿

遠くまで私の恋を運ぶ風
風に向い立っていたのは君ひとり
鴉が衣をつついていて真昼
仏の涙ですか温い雨です
一升瓶のうしろに父の影がある

鳥取県 石尾 かつ乃

聞き役になつて流したい涙
言いかけた言葉をつばと流しこむ

久々の虫干し晴着うれしそう

幸せの門出と思ふ朝の蜘蛛

愛という言葉に酔つて眠れない

鳥取県 羽津川 公乃

人生の半ば頃から風が風ぐ

好物を聞けば地酒の名を連ね

三男の嫁でハイハイ軽い腰

姿見でわたしひとりの七変化

大空の広さに愚痴を引つこめる

鳥取県 黒田 くに子

ワンテンポおくれ涼しい目で笑つ

八月忌 夾竹桃の紅悲し

貧乏のおかげくるくる良く動く

畳拭く夫の帰りを待つように

繕つた笑顔いびつになる涙

鳥取県 西川 和子

後ろから観察されているようだ

まだ元氣 大きい方の箱を取る

居酒屋のママはいつでも聞き上手

幸せの中で涙腺またゆるむ

手作りはいくら食べても飽きが来ぬ

松江市 舟木 与根一

賽銭の音も乾いて過疎進む
五十年決議が揉めて夏近し

食足りて浮き世離れに憧れる

麻酔薬打つてオウムの新リス聞く

私の辞書は古いとまた言われ

松江市 柳 楽 鶴丸

出雲弁笑う男の関西弁

妻の好きなひとは鏡の中にいる

安いから素うどん食べておりません

マイペースで生きる事のむつかしさ

活断層こわいが温泉有難や

出雲市 吉岡 きみえ

出かかった言葉のみ込む胃の重さ

他所には言えない話する夫婦

ふるさとがだんだん遠くなる血縁

ことしも蛍に会えて亡母思う

たまさかに持った針に拗ねられる

出雲市 尼 れいじ

炎天下男無防備のまま出掛け

柵をけつて一匹飛ぶ蛍

悩み事多くて猫とたわむれる

形良くなろうはずなしAカップ

真実が時々嘘に包まれる

出雲市 板垣夢酔

鯛でも心うれしい祝いごと

ザル持つとついついどじょう掬い所作

絵馬吊って合格したと思いきみ

独りゆえめしも布団もただ無口

這いあがるふちに手を置く日を夢み

出雲市 富田蘭水

あすなろう苗が夢みる森の絵図

骨董屋偉大な勲章ならべてる

百姓が野菜買っては精を出す

土産つき預金のバンクのみ覚え

少年の夢はいつでも晴れている

出雲市 竹治ちかし

時々は毒にもなつて旨い酒

混ぜ合わすたびに濁っていく絵皿

故里を知らぬ私が恋うる街

胸にある里に元気な亡父母が住む

妻の手に僕が刻んだ皺がある

出雲市 岸桂子

孫の知恵やがてやがてに夢を抱く

人並に小鳥を飼っている平和

ボランティア終えて涼しい風に会う

約束を守って咲いた茄子の花

古里の水は昔と同じ味

出雲市 伊藤寿美

光の曲聴いて大江を読んでみる

生きている証ハンカチまた汚れ

有頂天ついブレイキを踏み忘れ

揺れ幅の広い振り子がする努力

なお燃えて恋して老いのイニシエーション

島根県 松本文子

息子と喧嘩すると元気が出るようだ

長いものに巻かれどこまで汗をかく

子の為となれば違つた旗も振り

一応は芽を出す花も大根も

ひとり身の軽さの中にある不幸

島根県 堀江正朗

柱時計はお茶だ運動だと指図

いい湯だな菖蒲の香りひたひたと

人生のでこぼこ平らな妻の手に

大粒の雨ばらばらと話題変え

勘少しずれると笑いごとでない

島根県 堀江芳子

恩師の訃ただうろうろと うろうろと

部分品だいにせよと言うカルテ

直球のみごとさ言葉返せない

こんないい寝息を起す急な用

斐伊川は語り部 夫の手を引いて

島根県 石飛水煙

顔かたち癖まで母に似て育ち
選挙戦この時ばかりの笑顔見せ
夢語る老いの熱意の限りなく

屋台酒 同じ顔ぶれだが楽し

山河あり肩寄せ合つて農に生き

島根県 藤原鈴江

ひたすらにあなたの足跡追いつづけ(戦死した夫慕いて)

葉桜へつつじ裾ひく空の青

テレビにも仲間入りさす夕餉かな

趣味ひとつ抱え楽しむ老いの春

煩惱をさげて独りの城に棲み

岡山市 井上柳五郎

代償に北の島をとかんぐられ

年寄りのひがみとことん診てくれぬ

食いつぶすいのちを時は知らん顔

思い出は限りなしまた寝返りす

悔いる日もよろこびの日も風みどり

岡山市 花田たけ志

落胆が別の人生探らせる

民謡で心の憂さを捨てて老い

労働の汗が無視する休肝日

妻が書くカルテは痛み止めが無い

悪企み呆れるばかりの周到さ

岡山市 時末一灯

聴いているいくつあくびを呑みこんだ
苦い過去 武器にはならぬまま老いる
微笑んでゆっくり横に振った顔

膠着が美女のくしやみに救われる

主婦業の退職願却下する

倉敷市 田辺灸六

一病を扶け合つてる凡夫婦

三叉路で迷っています酒煙草

身から出た錆 反省の爪を剪る

自分史を書いて今更どないする

朱鷺哀し抱いたはかない無精卵

倉敷市 小野克枝

自画像をまじめに画いた手を洗う

非常口持たぬ吾が子に温い飯

公園の鳩に憩いの場所がない

かすがいの子は叛かぬと決めている

老妻が居て幸せなけんかする

倉敷市 井上富子

苦虫の急所へ投げた変化球

持ち家の神話へ懸ける夫婦独楽

掴めないハートへ謎をかけてみる

ブローカーの胸で電卓躍り出す

一人ぐらして泣き虫の住む喉仏

岡山県 小林 妻子

いい夢を見るか老妻は向きを変え
亡母を騙して古里捨てる過疎に負け

山の父 山の強さは語らない
頑張り屋の案山子限界だと思つ
み仏の威光が長い盆休み

岡山県 山本 玉恵

逢うだけをごんなにはずむ靴をはく
満ち足りて素直に通る今朝の櫛

春愁や想い重ねし北のまど
ぐつすりとねむり手足にある自由
逢い別れ心に残る絵まんだら

岡山県 矢内 寿恵子

三世代 暮しの知恵がつきました

平成の鳩が平和をたべつくす
平成の里へ武蔵を呼び戻す
八月の星と輝く兵士たち

シナリオ通りの喜劇に今日も笑えない

岡山県 岩道 博友

菊の芽を摘んで一鉢 駄目にした
人知れず隣の部屋で矢を磨く

要領をばかして会を円くする
曖昧な返事で病名増やされる
人恋し花が終った夏の顔

広島市 森田 文

梅干しが大好きなのといやなのと
サティアンのおそばで舞つてる迷い蝶

早口がのろま人形見たはなし
目に見えぬ靴の穴から水びたし
ふるさとの土へ還つて知る平和

廿日市市 林野 甦光

朝霧に羨望の玉見失う
長生きに悔い少しあり夾竹桃

流される先を読んでるコンベヤー
口裏を合わずさびしい昏だ
思い出し笑いの刻が一度来る

竹原市 森井 菁居

修羅場の火くぐるたんびに強くなる

健康と引きかえに絶つ酒煙草
助かったいのち厳しき妻に添う
自家用のトマトは熟すまで待とう
納豆に漸く慣れた朝の箸

恥ずかしい訳ではないがトマト色

竹原市 岩本 笑子

赤い実は鳥に残して庭を刈る
一遍にメガネ四つも買う夫で

田に水があり古里よ古里よ
貴方と二人見つけた星を持っています

竹原市 時 広 一 路

人間の過労死 蟻は嗤うだろ
口裏を合わせてくれと目に言われ
ペンキ塗り変えても嘘は剥げかかり
平穩を守るネクタイ固く締め
我が家のお茶の間だけに指定席

広島県 藤 解 静 風

足しても二にならない仲をいとおしむ
町内にオウム博士が五人いる
止めてください珈琲茶碗ゆする癖
受け皿のない珈琲の傲慢さ
これからが儲けでおます喜寿の坂

広島県 田 村 新 造

右脳のすこしこわれた写真見る
ドック入り七十年の錆落し
病室で動かぬ足をなでさする
点滴の渦を見ているただ無心
入院でしみじみと知る夜の長さ

京都市 都 倉 求 芽

新緑の間は控えめの常夜灯
花一輪 夢の途中で色変る
花菖蒲 不倫の色で揺れている
ふたり暮し隣の芝生はもう見ない
煮えきらぬ話へびつくり水差してみる

京都市 山 海 友 照

健康の過信 回りに魔がひそむ
安静という言葉 頑なに聞く
信念の意気込みだけが先走り
太陽が忍ぶ窓際温める
単純なメロデー洗脳の畏があり

奈良市 天 正 千 梢

罪人にめつぼう寛大おらが国
続く円高にハードルきびしすぎ
教育ママ超特急に乗せたがり
蝶よ花よ持ち重りする人形出来上がり
燃えたり冷めたり女の機能みずみずし

奈良市 米 田 恭 昌

どちらにもつかず首振る扇風機
息つまる無口二人の夕餉時
円高で末っ娘ワツハツハのマレーシア
連れだつて古希 喜寿がいく大和路
丘陵で老女 夕餉のわらび摘み

大和高田市 岸 本 豊 平 次

万歩計 野の花摘んで壺に挿し
上醍醐 朱印もらいにつづら坂
野次馬で来て人ごとと思えない
話し好き口止めしといてよく喋り
普段着の駅員が来る無人駅

奈良県 長谷川 春 蘭

季の鼓動 脈うつ如く葉が花が
老いの身に何弾ません散歩道
お詣りは普通の倅せ願うだけ
胸線の隆起豊かに薄暑来る
限りある命の汗を日日惜しむ

奈良県 田 中 紀美代

あじさいに銀の雨降る恩師の計
菜の花をことさら愛した師の重さ
険悪なところへ明るいつァックス来る
異常なしそれでも葉出してくる
ポアしたい大臣が二三いる

和歌山市 福 本 英 子

雨男にやさしい雨が味方する
大皿小皿みな出しやばりの嬉しい日
残り火で程よく煮える豆の艶
右上がり肩の力が邪魔な文字
地下鉄が綺麗になったあれ以来

和歌山市 堀 端 三 男

赤紙が来て七月で五十年
仮の世を生かさされ喜寿を祝われる
健康診断 齢相応の大鼓判
肩で風切つて歩いて蹴躓く
悔いの無い一日だった日記閉ず

和歌山市 池 永 正 雄

ラムネ瓶 達者な音をいつまでも
自動でない扉の方が性に合う
読めないが分かった顔の書道展
夕日には明日を夢見る色がある
アフリカに近づいて来たイヤリング

和歌山市 山 田 高 夫

生きるすべとときどき投げける変化球
頂点の視野は三百六十度
退屈はしない程度に用はある
国民は不在 譚譚 右派と左派
いい人でいたい汚れた手を洗う

和歌山市 桜 井 千 秀

もう周囲意識しないで踊りたい
やあよろしく向日葵元氣よい双葉
予測的中 何だか気味が悪くなり
孫留学ワシントン地図買ってくる
たちこめる孤独でことにのめりこむ

和歌山市 垂 井 千 寿 子

余生盛る彩を撰つてる白い皿
「青い山脈」不協和音の同期会
朝顔の蔓に負けまい通院路
舌先三寸 仮面の下が透けてくる
金で買えぬ物をもらいに寺参り

和歌山市 宮口 克子

太陽が好き スターレットソレイユだ

わだかまり消えるかジョーク投げてみる

堪えること今一言を若者に

一笑に付されて川柳切り出せず

花の乱 熱き命を持て余す

和歌山市 細川 稚代

ふんわりと消えて残り香あたたかい(葉先生を偲んで)

ひとときを式部にさせる菖蒲園

お百度を踏む梅雨寒は気にならず

離れ住む息子の表札に見守られる

枷抜けて独り住居に慣れすぎる

和歌山市 山口 三千子

子は巢立ち家の酸素が薄くなる

訂正印ばかり未来の設計図

二人三脚 起伏の多い夫婦道

行く先を遮っている水溜まり

反復をしながら今日も黄昏る

和歌山市 榎原 公子

つかず離れずなあがい長い恋がある

らーめんで満ち足りましたあの頃は

眉きりり引くと背筋が伸びてくる

照る日くもる日 降ってなお神戸

スメタナを聴いて思うは世紀末

和歌山市 田中 みね

惜しまれて巨匠逝く日の風みどり

まあ聞いて人の話を最後まで

人柄の良さそのままに丸い顔

よりにもよってこの散らかしへ姑が来る

女です豊かな胸に憧れる

和歌山市 岩本 美智子

羅漢の師 彼岸へ湯浴み逝き給う(葉先生追悼)

人間不信 降っているのは黴の雨

人間不信 裏切るよりはよしとする

五十年飢餓の地獄を覚えてはいる

八月十五日 米一粒も流すまじ

和歌山市 堀畑 靖子

ペンペン草生えそう夢のない胸に

飯の世とまだ悟れない日記帳

業背負う女 嵐にひるまない

完璧なオバサンになる日も近い

足許を見直すゆとりなく走る

和歌山県 小倉 アサ

そつと来てすぐに帰って行くも母

軽く受け深く捕えて風の乱

実篤の筆真ん中に家庭の灯

不透明な陰にこぼれる妥協癖

根こそぎの愛無限とや娘や孫に

神戸市 山口 美穂

失ったものから学ぶことの日々
人の生命 物の命もふと思う
瓦礫となつてかえらぬものが目に浮かぶ
ご先祖さまお墓も壊れたままお盆
耳遠い老母へわたしはひとり言

西宮市 門谷 たず子

いく度師の供せし旅か傘ひとつ
淋しさはもう言うまいぞ鬼瓦
封をした壺に未練は詰めてある
大切にされてロボット塾通い
人指した指の先からくるしびれ

伊丹市 山崎 君子

爪のびてまだまだ元気ひとり言
原爆忌 若い亡夫に励まされ
語り部は即座に昔連れてくる
あじさいはあじさいになり雨を呼ぶ
ハラハラと帽子に点す紅い色

川西市 氏林 洋敏

梅雨前にダムにいっぱい水がある
入梅に電話で済ますことが増え
背もたれの椅子で作戦練っている
美意識を古い物から教えられ
悪友へ携帯電話役に立ち

宝塚市 丸山 よし津

師の筆の絵入りのはがき額に入れ
高級とメロンの網目主張する
最後まで夕陽輝きつつ沈む
老眼でこまかい汚れまで見えぬ
距離置いてきれいに話す百合の花

宝塚市 吉田 笑女

薬にもならぬ話へ耳をかす
カレンダーめくれば夏がついてくる
昨日見た景色と同じ夢の中
泣きじやくる幼児へ祖母のもらい泣き
葺替えた瓦に初夏の陽がまぶし

宝塚市 中田 純次

敬と愛 水魚の如き友一人
いつの間に最高齢の客となり
舞っている時は憂きことみな忘れ
晴れてよし雨とて悔いず二人旅
傘の先この一突きにハルマゲドン

姫路市 大原 葉香

メガネきらり次の言葉を待たばこ
ヤジロベエだから笑ってすましく
逞しい男に似合うにぎり飯
確かめて頷いて鳩 餌を漁る
三つ編の少女の夢は水晶だ

姫路市 丁 坪 サワ子

巨塔落つ偶像消えて風うつろ
祖父と似た首相の人氣へ心揺る
人生相談 論されたのは姑の方
住む世界異なる人とさとの嫁
めし風呂の男で逃げるコウノトリ

大阪市 津 守 柳 伸

売らんかなピキニ ハイレグ セパレーツ
地を這わぬ西瓜小振りで美しい
豪華さを競う小型の引出物

フラッシュピカピカ スター気取りにさすロビー
気休めと思うスリムへフランスパン

大阪市 町 田 達 子

行く春へ少ししんみりエレキ聴く
目に染みる蝶もわたしも梅雨晴間
番蝶ふわふわ人に似ておかし
オーロラをふと北欧のガラス器に(ラインランド展)
童話好きムーミンカップ買い帰り

大阪市 井 上 白 峰

潜在の意識が酒に浮かびでる
善人と言われて守る車間距離
緊張の仮面がずれる縄のれん
盃を伏せて話の念を押す
口裏を合せて嘘を温める

大阪市 板 東 倫 子

三原色使わず描く老いの夢
我が家にも外報部長のような妻
東西に孤立無援の知事がいる
おぞましい教理を幼い瞳が見てる
サイパンの慰霊碑 故国を向いて建つ

大阪市 上 田 柳 影

地下鉄に乗るとサリンをふと思つ
粗大ゴミに甘んじ今日も恙なし
一周忌 気重く梅雨の音を聞く
年金に囲まれものという意識
紫陽花の彩の終りに湧く郷愁

大阪市 河 井 庸 佑

結論を急ぎ足元掬われる
手慣れたる心の角にある油断
お人好しまたも苦勞の種背負う
頑固さを上手に生かすのも上司
一步退く余裕欠いたを自省する

大阪市 神 夏 磯 典 子

友だちの小さな呆けと比べてる
雨季抜けて私のものよ青い空
芍薬の姿へ夢よもう一度
オウム教 明日の息子を考える
人生の余白 陽気に埋めている

大阪市 稻本 凡子

泣きに來た海の深さは測れない
カタカナ語乱舞 前へ進めない
鈍くさい私と思う梅雨晴間
割勘で肩の凝らない食べ歩き
傷癒えぬまま歳月に流される

大阪市 渡部 さと美

栞さんと柳友とお呼びをしたのに
もぐら叩きのもぐらの頭ほど地震
エスカレーターするもの遊びも悪業も
しつけ下手の犬がうるさい立ち話
結納の型終え梅雨の空も晴れ

大阪市 大塚 節子

富士独白 山はなんでも知っている
枇杷の実が今年是小ぶりで落ちました
一つ墓みかんの香あり山頭火
蚊やり火に一緒にむせた はったい粉
女独り猫にお留守をたのみます

大阪市 藤田 頂留子

愚痴らずに余裕はつくり出すものや
深いほど情けは闇になりたがり
そうやったんかいなで解けるわだかまり
八月の雲のさんげも五十年
無いように思わせておこ欲と意地

堺市 一瀬 福一

凡人の目には見えない法の網
金少し握ると男風に舞う
国会は遺憾と善処くり返し
原点に戻り飛躍の背を伸ばす
いてほしい人が不思議と辞めていく

堺市 黒田 真砂

次々と咲く庭の花 夢の数
紫陽花に夢のつづきを聞いてみる
慈父とあがめる塔の主が逝き給う
うれしい夢見て薫風がほほなでる
心空にして弥陀の御胸に抱かれる

堺市 山本 半銭

れんげ田の真昼を渡る恋ごころ
畳紙女の想い包み込み
着ぼそりの後ろ姿を案じてる
聖堂の裏にうさんな闇がある
へそくりの満期 地球儀回してる

高石市 浅野 房子

師を悼む五月雨弟子の涙かも
指輪より指貫が合う亡母だった
待ちぼうけ色褪せてきた花時計
プラス マイナス ゼロの暮しに甘んじる
親切で言ったつもりが無視される

豊中市 辻川慶子

待ち合わせとても素直な髪かたち

近すぎて大きな恩を忘れてる

花菖蒲とり越し苦勞せぬように

盆踊り踊り上手は汗かかぬ

雨止んでわがもの顔の水すまし

豊中市 井上直次

女系家族 親父は二階の城守る

のびのびと育てておそい花かこつ

大正は遠くにあらず大地震

乾杯がすんで忽ち人変る

変り身の早さについて行けぬ秘書

豊中市 江口明光

七十五日堪えて噂を見届ける

輪の中で耳打ちばかりするカラス

道徳と言う一線の立ちくらみ

無視されている母さんの一人言

花冷えの街で人情拾いあう

池田市 金崎峰子

旅三日 留守の用意も三日分

親子 孫ぞうさんの歌みんな好き

本箱のすみを出られぬ軍歌集

年問わず男女を問わずリユック好き

山奥と思つた地にも街ができ

箕面市 椎江清芳

傘寿過ぎあとは付録のように生き

老兵は死なず老妻また元氣

タクシーに釣りは要らぬとモーニング

お誘いはせめて主人の喪があけて

無口だが父に多弁のペンがある

吹田市 井上照子

五十年 大波小波よく生きた

アルツハイマーになるくらいなら人間をにげる

なぜ泣くかてるてる坊主明日晴れる

梅の壺 小梅に母の香いただく

思ひ出の渚あの人なせいがない

茨木市 井上森生

晩春の富士に五十九の独り言(新幹線にて)

新緑とかかわりたくてスニーカー

酒じやない酒盃に込めた夢に酔う

追っかける夢よ叶えと開けゴマ

朝焼けのイオンが燃える空の色(第二の職場)

茨木市 藤井正雄

サテイアンに富士似合わない邪教

土地価額わが家を試算する息子

またとない経験でした負け惜しみ

留守番の午睡静かな庭の雨

出生届親の実感躍る文字

交野市 福崎 しげお

朝の靴 粗大ゴミでは無いつもり
年金に少し余禄の汗をかく
ワープロで娘の手紙情が消え
老いふたりハルマゲドンも恐れな
いふたりハルマゲドンも恐れな
い
万歩計 明日へつなぐ一歩ずつ

守口市 森川 まさお

落書きの好きな子でした詩人です
不揃いの足音 仲間が来たらしい
世の中が面白いと言う八十歳
墓まいり大きく開く蜘蛛の足
古りた名の駅名聞いて窓を見る

守口市 結城 君子

背景を見えます筋は知りません
皺のない人を羨ましくはない
舫舟 わたしに乘れと言うごとく
ボレロききながらお茶漬たべている
無器用に大阪弁をつこたはる

寝屋川市 柴田 英千子

ピニールの糠床がある心満つ
むらさきの玉葱添えて夏サラダ
友と乗るおしゃれへ席を譲られる
銷夏法はがきに添えられた一句
反発の無口近所の目を避ける

寝屋川市 岸野 あやめ

面接の期待 電話のそばで待ち
光らない玉を磨いている疲れ
年齢言うて興ざめのした顔をされ
僕お洒落 時計は薄くシヤツ白く
新米の寡婦へ税金また税金

枚方市 海老池 洋

表まではみ出す姉のいい葉書
両輪も軋み軋みの夫婦坂
陰陽も人は人なり樹は樹なり
仮改札のどつと吐き出す夏の海
オウムの謎私流にした推理

枚方市 八田 敏

いつ旅に行けるか妻の車椅子
さくらんぼ熟れる日妻が待ちわびる
孫の絵も田の字の窓のうさぎ小屋
続く雨 犬もトイレを我慢する
バイキング欲ばっている残してる

東大阪市 今岡 貞人

自由奔放に生きて孤独の中に居る
岐路に立つ男を試す向い風
毎日が句作の小径繰り返し
葉牡丹の渦解け初めて恙なし
春眠が愚痴と欠伸に結ばれて

東大阪市 安永 曉子

違和感と仲良くしてる義歯の味
雲行きをたしかめて傘置いて出る
同じことなら思い立つモロー展

流されてさからいながらさざれ石
かぶりつくトマトやっぱり取りたてね

藤井寺市 福元 みのる

忍耐を説けば若者何故と言う

手を洗う医者が無言がすべてなり

三昧にふける気持ちにまだなれず

目を閉じていると子のこと孫のこと

素晴らしい世紀に移るゆらぎだな

羽曳野市 榎本 吐来

痴話喧嘩派手にした日もあり無口

老人手帳 席譲られたことがない

おのが器量百も承知の小さい城

縁談へ暦まさぐる無神論

兄弟姉妹に昔を連れてくる宴

八尾市 片上 英一

歴史からオウムのことははずせない

魚偏の湯呑を一つ陶器市

病棟に黄門様の笑い声

五七 五じゃあこの辺でグッドバイ

空海のとこ深く俱会一処

八尾市 高橋 夕花

しばらくは大樹の下で低くなる
余白にも小さい種を蒔いておく
飽きもせずご飯みそ汁夫婦箸

残り時間 花ふる下に委ねたし
春風も北風もよし生きている

八尾市 吉村 一風

また二人だけの夫婦で始まりぬ

あぜ道を花道にする彼岸花

絵日記に夫婦喧嘩を見られてる

世辞ぬきでほめたとうまい事言う

師の手紙ちゃんど大事にとつてある

八尾市 宮崎 シマ子

ゴミ袋 我が家の破片つめこんで

自叙伝は人の情けを主に書こう

すんなりと登った山が降りられぬ

右手は母ひだりは父の癖を持つ

歯の抜けた夫 羅漢の顔でいる

岸和田市 芳地 狸村

美女の顔隠す茶碗が憎らしい (大茶盛)

腕よりも太い茶せんにある人気(〃)

平城宮の昔が見える資料館(平城宮跡資料館)

嫁さんが上位で困る均等法

ふるさとに私の戻る墓がない

三輪通彦

岸和田市 島崎 富志子

口下手に口八丁の妻がいる

境遇がみんな似ている吹き溜り

マイホームよりマイカーが子の希望

もう親と風呂に入らぬ十二歳

就職難に均等法も無力感

岸和田市 寺田 甚一

同床異夢そんな政治がまだ続く

正論も一皮むけば私利私欲

母の日に娘がエビでタイ釣りにくる

通帳を見る気も失せる低金利

姉さん女房 所詮男は甘えん坊

岸和田市 原 さよ子

大皿を囲んで和む母の日に

母と子は笑顔ひとつで満たされる

闘病へ毒としりつつ好きなもの

追憶の小箱きれいな彩をつけ

豊作の分だけ腰のサロンプラス

岸和田市 古野 ひで

何時からか娘は老母に意見する

薬にも毒にもならずうまく生き

山緑そのふくよかに魅せられる

寺めぐりばけ防止数珠買って来る

娘の事になると歯切れの悪い父

言い訳を飲みこみ貝になつて

さりげなく温い言葉を娘がくれる

ハムスターの世界をのぞく子供の瞳

老人福祉少し恩恵受けてます

だんまりの顔を浮かべてお茶が冷め

和泉市 西岡 洛醉

窓際の花に余生を見守られ

今日の糧 妻温かい味を付け

日々好日 水平線へ陽の沈む

嬰兒の乳の匂いに朝が明け

善ひとつ重ねて生きる凡夫です

和泉市 岡井 やすお

大東亜共栄圏の夢捨てず

十二歳がこんなに伸びて強面

柔らかい頭脳に期待ノック知事

オウムからキリスト創価来なくなり

鯨やめにつくい鮫を食う工夫

富田林市 松本 今日子

挨拶は玄関の壺ほめてから

百合匂う一人の部屋で思い切り

ある一日カレーの辛さ一人占め

雨しきり亡母と見た川水が増し

押しくくまんじゅう一つのいのちおだいに

富田林市 池 森子

切り口がキラリ炎になる兆し

亡妻の湖はとてつもなく深い

これ以上澄むまいぞ泣くまいぞ

曲り角でこぼれて落ちたのは愛か

悪友を利用したのは雨の夜

河内長野市 井上喜醉

煮えきらずしびれを切らず喉仏

先に鹹飛んで花道ない世界

威張るほど歩いた道に無い余裕

生き残る平和楽しい豆ご飯

善人の腹芸なんか見たくない

大阪府 榎山隆

阿弥陀くじ一つの恋に突き当たる

回り道したなあ晩年陽が当たる

人はみな流れのままにセピア色

一豊の妻の話をしてあげる

風の海 車窓に沿えば郷ちかし

大阪府 八十田洞庵

これが人間 時々軌道外してる

自己記録破る足先光ってる

禅寺で口にする粥 禅の味

今日の妻やさしい声で何かある

嫁ぐ娘のあしたは居ない星月夜

福岡県 横地東川

変らない喜寿の桜に会う母校

奉仕だった空缶拾いが癖に今日

つまみ食いいつも知らず皿も消え

生き延びて銃創抱いたままに逝く

唐津市 筒井朴竜

長男家男児誕生五月晴

孫に逢う爺婆上京旅支度

市長殿陳頭指揮す城祭

禄高が知れる納税申告書

松山市 白石春嶺

敵に背を向けた武将の小さい塚

野仏の小皿を洗う山いちご

空き缶とゴミ高原の夏終わる

今治市 矢野佳雲

一人住む父が電気をつけて寝る

首横に振るが張り子の処世術

身を守る穴なら僕も掘ってある

跨がれた感じ孫なら悪くない

弘前市 蒔苗果林

鏡から出るに知られぬ梅雨の朝

若葉風 嫁げぬ娘にも花たもれ

なによりも合掌好きな指親子

老醜が浴衣とはしゃぎ老麗に

弘前市 岡本花匠

料理自慢 父に期待の夕餉の輪

失意の日 孤独を払うピアガーデン

ステテコに馬が合います心太

ねぶた祭り終って母の盆仕度

十和田市 阿部進

花言葉わからないけど花が好き

好きな娘のゴシップなどは信じない

脚線美追いかけている男の目

満たされて居る倅せを忘れかけ

十和田市 小笠原敏人

葉隠れにそっと咲いてる花一輪

句作りに登校拒否の子を思っ

五十代 徒然草に二度打たれ

花菖蒲どちら様にもいいお顔

仙台市 川村映輝

颯爽と歩ける足を羨まれ

ウイスキーがビールに変わり今ジューズ

お土産のようかん喜ぶようになり

禿げてから帽子を冠るようになり

鳥取市 岩原喬水

先生は老衰ですと軽く逃げ

極楽へ行く案内に布施はずむ

少年と知らぬ機械は酒を売り

太陽が沈み居酒屋光りだす

鳥取市 春木圭一郎

情熱のままに作品動き出す

生意気と自信境目むずかしい

わが娘への縁談何故か恥ずかしい

抜き打ちに娘が彼を連れてくる

鳥取市 武田帆雀

草臥れて鯛のように薄く寝る

待ち人は来ない隣も敗北者

取れかけた釘 同情してくれた

野心家の差し出す傘だ遠慮する

鳥取市 前田一枝

何色に咲こうか花も色を選ぶ

惜しい花届かぬ枝に咲いている

残り火を燃やす勇氣を持って居る

来て見れば案内のない席だった

倉吉市 米田幸子

禍はある日突然やって来る

磨いたが父の轍に届かない

愛してるなんて今更言えますか

泥船と分かっていても乗る度胸

倉吉市 野口節子

喜びは十二単にラップする

故郷に他人の顔で迎えられ

言い勝った後のしこりが重すぎる

ワープロの手紙で愛の冷えを知る

倉吉市 最上 和枝

六月のトマト勝手に赤くなる
大海にわたしの罪を葬らす
真っ白の香りを配る袖子の花
廃屋の窓で人形夢をみる

米子市 金山 夕子

岩藤が咲いたと抱え友が来る
大物でも小物でもなく自然体
バーベキューいつも父さん真ん中だ
むかしから弱い立場で比べない

米子市 白根 ふみ

太陽に合点をする梅雨はれ間
石塊が揃いかなりのことになる
六十を抜ける大事なものを減し
棘を抜いてから頼りない花になる

鳥取県 乾 喜与志

弁当箱に母の笑顔が詰めてある
衣替えしても本性変わらない
円高の衣を着せて売ってある
錦鯉がつつじの花を呑みこんだ

鳥取県 土橋 睦子

辛抱の限界 母が口を割る
順番の約束もない我がいのち
寄り添えば月も見ている影となる
明るさが信条 母は耐えている

鳥取県 乾 隆風

暗闇へおれを探している螢
先輩の頭はたしかだと思ふ
酒はほどほどにと警笛が鳴った
精進落ちの酒で涙を紛らわす

鳥取県 田村 きみ子

心の窓開けば湧いてくる笑顔
咲いて萎んで花もわたしも浮世花
すがることばかりで神を困らせる
夏かせにいのち大事とりんご剥く

鳥取県 津村 八重子

夏たのしゆかたうちわの地藏盆
絵に書いて残そう今の幸せを
やさしさが笑くば二つに画いてある
新品よりも母の形見はあたたかい

出雲市 久谷 まこと

整然とした筋道に但し書き
物識りが説明書に背いてる
今日の首尾すでに笑顔がこぼれてる
医療費は免除 菜がまたふえる

出雲市 小白金 房子

去に急ぐ老母を待たせるごもくめし
お茶だけは欠かせぬ夫婦のさしむかい
しあわせは眼鏡いらすのお針箱
牛代金 神へ一夜の夢を置く

出雲市 小玉 滿江
ほうたる来い亡母なつかしく遠い過去
流行へ一寸派手目な衣替え

助手席で孫の運転落着かぬ
五千歩がまだまだ遠い老いの足

出雲市 石倉 芙佐子

八月の火の見櫓は鳴り止まぬ
悪夢ふと胸の半鐘けたたまし
唄って踊ってそのまま消えた影法師
山姥で夏の祭の幕が下り

笠岡市 松本 忠三

過疎の村じいちゃんばあちゃんだけ残り
世の中がかわると嘘かほんとかな
さっぱりと分からねと与党野党だの
雨降ってまた泥んこの土となり

岡山県 江口 有一朗

生命の畏敬忘れていませんか
大江さんと終日話している書齋
今日の屍越えて明日へ歩を進め
耳飾り心華やくのも女

岡山県 二宗 吟平

没の句が選者変って天になり
年なんか思うひまなし句に追われ
返事して炬燵離れぬ回り椅子
巣箱かけ鳥と会話ができかかり

岡山県 池田 半仙
美田をば受けず残さず我は逝く
カタカナ語 覚え難いにすぐ忘れ
青空市花の多い日少ない日

魚の住む流れに見える梅雨の小川

竹原市 古谷 節夫

川がきれいい途中下車してみたくなる
自分史に触れたくはない過去がある
妻よ子よ僕の墓前に酒要らぬ
政治不信救う政治家もう居ない

竹原市 石原 淑子

仰ぐ師の余りに急なお旅立ち
生と死ととなり合せの姉を看る
とりあえず眠ろう明日は明日の風
茶を啜る癖コーヒーにも出てしまふ

京都府 稲葉 冬葉

蛇口全開 言い訳を聞き流す
横町のすし屋で二人きりになる
ホームレスの主張 半端なものでなし
嫁と気の合う世にも不思議な物語

大和郡山市 坊農 柳弘

あれこれと女が性の試着室
厚化粧 匂も盛りも通過中
真っ当に生きていますと二枚舌
向日葵に汗の時候を知らされて

天理市 飯田昇

清濁を合せた話 胃につかえ

今の子に教えておこう亀の意地

表彰状 辞めてくれとの意味も込め

夜目遠目 蛇の目の彩に騙される

和歌山市 青枝鉄治

夫婦別姓 僕はどちらにしてくれる

退職と引き替えに出す感謝状

直言の男に遠い回り椅子

お互いが耐えた気である夫婦舟

和歌山市 玉井豊太

事ある時 母がわらって出す財布

無駄話そうかそうかと聞き流す

なごやかな顔みな揃い汁の湯気

自重して渡り浅瀬の川こえる

和歌山市 玉置当代

中流の上と自惚れ鯛焼く

十字路に立って逃げ場を見失う

掌でもう転がってくれぬ毬

爺ちゃんが植えた山を見せておく

和歌山市 北山好笑

手料理に思いきり盛る季節感

裏話 本題よりも面白い

美しく老いる足場を低く組む

目が合って何も言ってはくれぬ面

和歌山県 西口忠雄

なんですねんあんたやっぱり拗ねている

奥さん奥さん朝に生まれた合言葉

ひと搗きにあんた丸める杵の音

兄弟になろうと他人のおべんちやら

西宮市 秋元てる

雨しとど受け流すすべ未だ知らず

居心地の良さの限界ふる里で

九十五歳その掌の温き変らぬが

嫁かぬ娘を案じ続ける九十五

西宮市 山本義子

お世辞とはわかっていても鈴をふる

なにつけ悔いを残さぬおんな坂

生きている チクチクとげの抜けぬまま

六甲よ まだおしゃべりは出来ないか

西宮市 菊池トミエ

駅までに更地が増えて暗い道

誕生日待たずにワインの封を切る

松の木に別れを告げる小さい家

雨の日は眼鏡も曇る気も曇る

芦屋市 黒田能子

生きているそれだけでいい乾杯す

軒先の雀一緒に雨やどり

リズム感一体群れの中に入る

そろそろ本番だ息を調える

真実を隠す袂紗が立派すぎ

川西市 松本 ただし

内緒やと聞いて風船軽くなり

冗談をとばすお医者に救われる
集印帳 判子の朱肉にある重み

大阪市 北 勝美

軸足を決める大地も砂の上
死生観ポックリ寺につき当る

おだてられその気になった好奇心
運賃の値上げも無縁老夫婦

姫路市 中塚 遊 峰

嫁とらぬ息子を持ち世間せまく住む

悔しいが一つ違いで席ゆずる

大阪市 寺井 東 雲

前向き意見やっぱり風当り

コーラスでひととき乙女の気になった

生きてゆく痛み針は受け入れる

水溜り翔べと言うても和服です

こうすればああすればとは老いの愚痴

福岡でカラオケのとり黒田節

(前月分) 宝塚市 丸山 よし津

鮮やかな軌跡を残し師は天へ

柳友がまた増えました師の葬儀

大阪市 川端 一 歩

単線の枕木歩く五月晴れ

駅四十年 少女が孫を連れている

何気なく引き受けた荷が重すぎる

駅風景 白が咲いたよ衣替え

スケジュール崩して帰る不意の客

亡父越せぬ悔しくも嬉しくもあり

大阪市 松尾 柳右子

診察を待つ居眠りは耳たしか

折目ない漱石さんを貯め麗ら

大阪市 小糸 昭 子

ありがとう済みませんだけ言えれば良い

雨の日に歯医者から出た人の鬱

美女めとる汗は惜しまぬ男意気

大根のおろしも辛み取れた頃

流行のリユックも弾む奥入瀬道

猫に椅子取られています今平和

大阪市 清水 利 武

初孫を抱いて幸福笑う日々

堰の水 魚道気付かぬ鮎跳ねる

大阪市 玉置 英 子

陽が落ちて蜜は甘い水が好き

私だけ好きで私の鮎を買う

芸人が競い合ってる参議院

永平寺味噌がまだあり胡瓜買う

禁煙でオヤツの方が高つく

ここかしら所によって俄雨

大阪市 奥田良子

無意識に明日あるものと生きている

縁切り寺 女の影がのこる門

病室に見舞のメロン二つあり

旅三日 枕かわれば家恋し

堺市 中野樺子

風邪気味へ梅とうどんがやさしくて

嫁のちらし家の味です供えます

亡母のメモ料理の秘訣こぼれてる

雑用とん今日私のはすつきり日

豊中市 吉田あずき

いま五十年 爆撃ここにあった真実

切り替えの早い燕へ空広し

子の受ける試練を母も身の内に

要するに晴れば文句ない予報

豊中市 滝北博史

死に甲斐を羊に説いて食うオウム

神仏に良縁たのむしあわせ

雷鳴はときどきあるが蚊帳がない

ご近所で再建工事すすむ夏

池田市 岡本吉太郎

年の功しこり残さず話つけ

近江路で我が家の紋の四ツ目紋

国栄えコップ中風ですまぬ世に

音高く流れし生涯と老いて思ふ

吹田市 茂見よ志子

万緑の奈良で仏教美術に酔う

法華経を拾い読みするガラス越し

朽ちている菩薩の足の痛々し

無為の過去 今に思えば悔しかり

吹田市 瀬戸まさよ

老いぬまま凜々しき顔よ五十年

もたもたと侵略謝罪五十年

母の死を母に知らせた罪重し

はにかみを忘れたくない倦怠期

寝屋川市 平松かすみ

事故車みて寿命があつてありがとう

これはこれはどうしようもなくレッカー車

当てられたショックが続く第三者

車屋が最敬礼でやって来る

東大阪市 森下愛論

生酔いが去んで落ち着くカウンター

飲み歩きされど色にはご無沙汰し

母親へ嘘を重ねる手を合わせ

アジサイの星なき夜の闇誘う

東大阪市 指宿千枝子

入院もホテル住まいと楽天堂

好奇心 入院の身を忘れさせ

病室に筆談手話の弾む日も

病棟に来るミルク売り愛想無し

藤井寺市 中島 志洋

器量より味を見てくれ栗南瓜

向日葵に覗かれている娘の昼寝

堅物でトップになれぬ副社長

阪妻のファンと言つて齡がばれ

羽曳野市 田中 透太

紫の似合う女と菖蒲園

悩んでもどうにもならぬ尾髭骨

紫陽花の雨の雫に妬く女

桜散る女ひとりを狂わせて

岸和田市 福浦 勝晴

侵略国の走狗となりて勲八等(第二次大戦回顧 二句)

慰安婦に激励されて生きのびる

カーテンを開けると綺羅めく夏の海

顔に穴あくほど赤ちゃんに視詰められ

岸和田市 藪野 けい子

試着室 傘と袋をおいて行く

旅の宿 非常口見て買うみやげ

父の日に無償の奉仕風呂洗い

孫がきて母の日ずれたプレゼント

富田林市 片岡 智恵子

親孝行 化学不得手な子に育ち

侵略だと言われ哀しい墓洗う

私のこころを脱がすハイキング

方言をまた聞き直す旅の宿

河内長野市 植村 喜代

降りつづくオウム晴れたら富士も晴れ

遠出してたまに心を洗いたい

戦前と戦後生れは違い過ぎ

旅帰り愛想いいのも二三日(前月分) 堺市 板尾 岳人

母の日を少し祝つて旅仕度

大物が来たと言いが始まりぬ

ついで行くわけにはいかぬ菜種梅雨

六十年夫婦生活終え旅路

行き先を告げず旅人となりけり

ふれあいの祭典'95 川柳祭作品募集案内

作品 各題1句(未発表作品に限る)

題と選者 1題3人共選

「揺れる」古川奮水 井床芦蘭
坂本須磨代

「横」真殿舎句里 佐藤寿美子
藤本静港子

「相手」遠山可住 恩塚治子
中川 一

二次選者 去来川巨城 小松原爽介
時実新子 黒川紫香 平山繁夫

応募料 1000円(定額小為替)

締切 8月31日(木)

応募先 〒678 相生市旭1丁目1-3

相生市教委生涯学習課

相生市ふれあいの祭典実行委員会宛

先に、川柳の繙訳に就て、と題するエッセイで宮森麻太郎氏の英訳川柳に触れ、原句の味わいを破壊した訳し方であつて、主観が力強く出る川柳の英訳は俳句以上に困難であると述べられたのは、阪大川柳会の笠原路生教授(本名道夫)であつた。再び川柳の繙訳に就てと、今度は独逸語訳について書かれる。

『近頃のことであつた。阪大川柳会の雑吟に私は次のような句を投句したことがあつた。

かも鹿の嬌羞に似て逃げる君

その時分私は動物の句を多くつくつていたので右の句もその一つであつた。余りいい句とも思っていないが、実を言へば右の拙句はハインの詩の一句を繙訳したのであつて、川柳の繙訳を論ずる上に於て掲げたのである。

ハインの「新らしき詩」中の一句

Sie floh vor mir wie'n Reh so schen.

(彼女は鹿のように左様な内氣に私から逃げた)

を繙訳したものである。「かも鹿の…」句は巧拙は兎に角、独逸詩人の詩の一句の川柳化

した繙訳として私は相当の自信をもっている。独逸詩の一句から川柳が生れ得るならば、川柳の独逸語訳も或はある程度までは可能であるかも知れぬと思つてゐる。

川柳の英語訳の困難であることは、いつか私は本誌に書いたことがある。川柳を外国語で繙訳してその持ち味を風俗習慣のちがつた外国人に会得せしむるには、先づ句を選ぶことが必要であつて、どの川柳句も繙訳し得ると言ふ訳にはいかぬ。併しある句では、わりあいとその繙訳が楽である場合もあるように考えられる。川柳句であればどれも繙訳し得ることの困難であることを例を挙げて述べて見たい。

恋の畏あの眼だらうか眼だらうか

この句はご承知のように路郎先生の句であつて私の好きな一つである。この句を独逸語でもつてどう繙訳しても原句のよさは出ないのである。「…あの眼だらうか眼だらうか」という疊語法のもつ川柳詩の味わいは到底外国語の説話法では表現出来ないのである。原

句を最も平凡に繙訳して見ると

Ob wohl die Schönheit der Augen

Könn' sein eine Fessel der Liebe?

(眼の美しさが恐らくは恋の畏であるか)

と繙訳して見ると、原句の意味だけは恐らく理解されるが、よさは決して表現されてゐない。第一「眼の美しれ」(Die Schönheit der Augen)がいけない。原句の言へんものの「あの眼」は単に美しいと言つただけではない。

魅惑のある、人を悩殺する眼でなければならぬ。モナ・リザの美しいが併し冷たい眼であつてはいけない。

原句を次のように変えてみる。

Sind nicht verlockende Augen

reizende Fessel der Liebe?

(人を誘惑するよつなあの眼は恋のうれしい畏でもあらうか)

前よりもいくらか原句の味はでているが、まだ原句に及ばざること遠く、「…あの眼だらうか眼だらうか」という氣持ちは繙訳句には出ていない。前の繙訳句より後の繙訳句が幾分か原作の味をもつならば、私は尚筆を投ずるには早く、暫く努力してせめて原句のよさに近い繙訳をして見ようと思つてゐる。

以上のように川柳の外国語への繙訳は時代と筆者が移つても誌上に屢々試みられている。

自選集

八木千代

児島与呂志

旅の雨 大きな傘を奪われし
計の受話器置くひと呼吸ふた呼吸
水鶏院釋眞諦と日に三度
切り取った絵に宇治寺の鐘の音
俱会一処 絆の端に従いてゆく

正本水客

奥谷弘朗

旅ずきの先生らしく前ふれもなく(ああ西尾栗先生)
句がたきと勝手にきめた師に逝かれ
薄なりましたなと口げんかが懐かしい
栗さんと心のなかで呼んでみる
釋眞諦はるかに高い弥陀の眉

工藤甲吉

金井文秋

靖国に祀られている損な人
功成らず名を遂げぬ人ここに居る
悔しさも何も奇麗にだまされる
バス通り裏に貧しい人が居る
いろいろなカードで財布ふくらませ

故里に笑い袋を連れて来る
からおけのそれから田舎の仲になり
七月の風にうっかりのせられる
その後はくせまじめになる鱧の味
追伸の一行 老いをいましめる
どう見ても白と見るにはほど遠い
湯かげんを茶せんが一番知っている
女湯をのぞく若さがまだ残り
女房が片腕となるいい家庭
手作りの菊で墓前を秋にする

解った顔で聞いて後から辞書を繰る
草花の世話も大儀になる弱り
万歩計始めた頃はまだ元気
趣味と共に行くなら百歳でも楽し
若ければこそ連休も意味がある

恒松町紅

その先が読めず失敗くり返す
若い気でいても形は隠されず
酔い醒めの水 幸せが喉へ来る
嘘という決まり手にまた騙される
意気投合 夫の箸が片付かぬ

遠山可住

ティッシュペーパーこの贅沢もいつか慣れ
何処までの余生か妻の掌の中で
行くあてもなし恋もなしテレビ見る
花の名は知らずやさしくささやかれ
みんなみんな寄ってわたしを古希にする

小西雄々

夢盛った皿を何時でも持ち歩く
山菜の楽しみがある故郷の春
除籍簿を覗くと赤い涙跡
きこの雲わすれはしない五十年
国会の愚問愚答に苦笑する

大矢十郎

今年また一つ許して古希となる
趣味一つ抱いて輝く命の灯
娘等 妻の味方 理由の理は問わず
孫巢立つ初給料へ添えて謝意
騙されて許して息子よそれでよし

野田素身郎

どことなく似ているやはりそうだった
倅は洋酒 俺は日本酒それもよし
三歳の孫に指切りせがまれる
土産話このところは伏せておく
見なれた景色だが窓際に座る

黒川紫香

美しい夢を見ているバラの花
来年もまた逢いましょう投げキッス
おしゃべりして出る日の風は生温い
様変わりした故郷で逢うた友
陽を呼び戻す音戸の瀬戸のいと速し

久家代仕男

雨煙る中に畏き植樹祭
朱鷺の恋 愛のかけ果もちり散りに
可能性ばかり求める老いの日々
けなし合う夫婦 結構馬が合い
いまわしい過去は早瀬に捨ててきた

野村太茂津

三百回目の大夕焼けに背を伸ばす
五体擦り尽くし夕陽と対峙する
下向いて歩こう何か落ちて
八月の老兵 悔むことばかり
修羅偲ぶ今幸せのド真ん中

有働芳仙

道徳の時間いじめに目をつむり
盃の底で辻棲合わしとき
空振りで終った父の力こぶ
夫婦とも字が下手くそで仲が良い
世渡りへ嘘の上手な咽喉仏

辻 白溪子

胸の差でゴールを踊るように抜け
はずんでる電話の聲が途切れがち
嘘をつく受付などと思わない
噴水に小銭沈んでいる平和
四季みんな知ってる犬と散歩する

波多野五楽庵

涙から生れた花が脆すぎる
通りゃんせ布石の鬼が待っている
悟られぬうちに舌打ちしておこ
鉢植えの土を過保護にしてしま
きはたりちようと泣くのは合歡の花

小林由多香

靴下の穴も疲れた顔を見せ
仏壇へ亡母のやさしさまだ匂う
抜擢の椅子がかたくて落ちつけぬ
待合室ガンかも知れぬ順を待つ
息抜きの旅はやっぱり温泉か

月原宵明

竿売りのマイク流れて梅雨晴れ間
騙されたふりで役者は父が上
急ぐ時 履くスリッパは一つだけ
乾盃へ力はいらぬ紙コップ
曲り角違えていやな人に会い

松川杜的

星に聴く弥勒菩薩のつぶらな眼
波やさし老春の門 唯騒ぐ
レモン噛む黒き瞳は疑わず
ゆるし合う二人へ湯豆腐浮いてくる
花言葉一句を添えて夢二の絵

藤井明朗

自由か わん曲して歩く平和
男女の遅婚 青春をもてあそぶ
うす紫がふたりを包む山の宿
信徒 当局までだます天罰下る
若さっていいな若返るだけの老い

藤村 女

原爆忌まだまなうらにきのこ雲
小説を地でゆく孤児の五十年
過ぎ去ればみんな絵になり詩になり
愚痴捨てた窓から空が澄んで見え
短所そっくり孫可愛い日憎い日

高杉鬼遊

友だちの句がひかりだす五月燦
恋をするキリンの首はなお長し
いかるがの天平はるか鴟尾浄土
学歴がなくてオウムから遠い
ひとりでは立てぬわたしに影の影

小出智子

子の家も二泊三日が丁度いい
少し曲った胡瓜 わたしみたいだな
夜が更けてこっそりエンピツを削る
ケープルの一番前に席を取り
待ってくれる人が居るからアイスクリーム

西田柳宏子

あっち向いてホイ僕の荷物が消えている
古いことはつきり喋り呆けてはる
肩軽くなったら銀行も来ない
次々と手を出し妻が尻拭い
乙亥や地震オウムにハイジャック

橘高薫風

五十年 毎年 夾竹桃と蟬
金輪際変らぬ黒縁のめがね(石曾根民郎先生)
合せ鏡とや蓼科湖白樺湖
霧ヶ峰人恋う鳥もありぬべし(かっこうを聞く)
掌で囲むほどの火も恋の巴里祭

堺市民芸術祭川柳大会

とき 9月17日(日)午後1時開場
ところ 堺市立榎文化会館 第1講座室
(泉北高速鉄道とが美木田駅3分)

おはなし 「仁徳陵の謎をめぐって」

宿題	「ふたつ」	中井正弘氏
	「移る」	重谷峰彩選
	「掘る」	本多洋子選
	「メンバー」	板野美子選
	「すこし」	野里猪突選
	「抜く」	河内天笑選
	「わたし」	田中正坊選
		梶川雄次郎選

◎席題なし・各題2句・締切午後2時

参加費 1000円(作品集・参加賞呈)

主催 堺市文化団体連絡協議会

奈良新聞川柳大会

とき 8月20日(日)午前10時開場
ところ 春日大社景雲殿(奈良市春日野町)
(近鉄・JR奈良駅からバス)

席題	稲垣馨選	
宿題	「土」	福田秋雄選
	「かたつむり」	石田常念選
	「茶碗」	鶴本むねお選
	「日曜」	宮口笛生選
	「城」	杉森節子選
	「海」	中村福太朗選
	「公園」	片岡つとむ選

◎各題2句 締切 午前11時半

会費 3000円(昼食・発表誌含む)

欠席投句 500円(発表誌呈)

欠席投句送り先(8月10日必着)

〒630 奈良市北市中町71 杉野睦朗宛

古屋夢村

東野 大八

「影像」という言葉は、私には最も懐かしい生命の表象詞である。と同時に、私の新興川柳詩論の基点である。私の生命は暗い——という事は、私の句を読んでいてくれる人には直覚せられるであらうと思ふ。私の暗い生命は、ある深度に進むとき、恐ろしい象徴を招いて戦慄する。

そしてその戦慄は、技巧を凝らす猶予もなくて個性の生地をそのまま、何の飾り気もなく、おそれず大胆に生命の袋からとび出ることすらある。そして自分でもふだんから、この生命を護る事の余念のない癖に、疲れ切っている飽いている。悲観主義に陥ることもあるが、どうすることもできない。「影像」通巻36号「新柳壇への宣言」昭和2年2月）この文の結びは、「わが川柳とは宗教なり」

と唱えている。

本名・古屋寅雄。明治28年山口県萩市の萩の東光山窯元・大和松緑（作太郎）の五男として生れ、のち古屋家の養子となる。広島市の中国新聞記者となる。広島歩兵第十一連隊除隊後の大正十四年一月、川柳影像社を創立（入隊前の新川柳千里十里を16号で改題）した。改題後は、田中五呂八が大正十二年二月に小樽で創刊した「氷原」の新興川柳派に共鳴して、その旗幟を鮮明にし、誌上に活発な句・論を展開、新傾向の句作に精進する。

影像常連は新興川柳派の論客森田一二や木村半文銭、宮島竜二、渡辺尺獲、高木夢二郎らで若き溢れるその句論を掲載、昭和初期の『再生影像一号』の再スタートには、『新興川柳影像句集』を發刊。保革双方の柳界から

注目される。（昭和2年5月号）

「……人間は闘うべきもろもろの約束の上に産みつけられた。闘い……闘いは更生である。革新である。明日である。闘いは我等が生きていく唯一の理論である。この唯一の理論は常に断崖の上に立っている。（中略）」
更生は法悦の嘆願であり、人生塔への一梯である。人生宗教、自然宗教の最後の火花が打ちあげらるる久遠園の旅駅である。

されば更生の騎士よ、勇敢に誰よりも先にその死線を突破して、久遠園へ、法悦の白塔へ走り続けるべきである。越え行くべきである。夢村（「影像」第38号巻頭の宣言）

この時、夢村は血気の32歳である。更生影像誌の、その時の發表句はつぎのとおり。

爐の燃ゆるすがたは死ぬ日を描き
涙河に狂いたりけむや、熱き
足裏に觸るる一字に死んで行く

夜の底で野火が燃えてる螢が光る
幻影の白きに毒蛇舌を噛み

「貧乏詩社が、貧乏な男の手に、火のつくような思いを続けて、如何に自覚せんも、発奮せんも、到底堪えうべきもない重荷のために、やがて新興川柳の未来まで自殺せしめ、その本質まで湮滅しようとする。何んぞこれ以上の悲痛があらう。（中略）」

静思すれば、新興派出馬ははるか昔日の感ある昔日を数えている。その間、同志散じ、作家著しく変移し、詩社統出、統到、ただいちるの本質を頼む重くるしき空気の間に、全国的に点々闘士、作家を遺したるに過ぎないではないか。これに加え、新興川柳の本質は昔日の如く一般民衆の意に食い入る能わず、文詩壇人の頭天を叩くを得ず一月刊の雑誌、時に隔月となり、時に休刊す。(中略)

されどここに影像はばく進して、新興柳壇の未来に、川柳詩社の多幸なる建設を策し、ここに「影像・創刊号」を無代配布の筆を断行せり」——新興川柳影像更生第四号創作号

この昭和二年末から翌年にかけては、治安維持法の悪法が成立し、農民労働党結成が即日解散、大正天皇逝去に加え、金融恐慌が全世界を襲い、第一回普通選挙は成立したものの、共産党員の根こそぎ大検挙、東北地方の冷害大凶作等、こんな大混迷の世情は、まさに新興川柳どころの話ではない。

貧窮にさらされた一介の地方紙記者に過ぎない夢村だが、骨身を削るこの「影像創作号」も風の中の灰の如き結果に終わった。

「今の自分の生活には不満と不安ばかりだ——この不満と不安にさらされた鮮やかでない顔色の底から、何ものでもよい真剣な真実だ

けを詩の底から見極めていきたい。

芸術は、詩は思想である。地方俳壇、既成川柳壇、月並な感傷歌人の群れなどは、なるほど競争はしているが、あの遠い彼岸ではなく、柵をしつらえて観衆に座席を与え、馬券を売って灯名を儲ける興行競馬だ。興味本位腹立たしい現況だ。

◇

芥川竜之介が自殺した。そして多くの人間も、甘くもからくもない時間と空間をのんで殉死した。(影像更生第五号・夢村雑記)

「わが国における過去の詩人達の自然礼賛主義や、泰西諸国の詩人達の人生賛歌、或いは享楽主義の詩論を一蹴し、近代新興諸芸術としての、グタイズム、表現派、立体派、感覺派、如実派、措成派等のエッセンスを撰取した、その広汎なる対象世界への詩眼の瞳目を叫ぶ、自然宗教詩派の詩論にかけては、古屋夢村師の面目躍如たるものがある。

カナリヤの瞳の奥の夢の国

囚人の持てるクサリのただならす
赤色を吸いつくしたる赤ガラス

これらの句は、私にとってはやや驚嘆に値する。以上、夢村師の数十句について、忌憚なく是非の苦言を呈したが、

雪片の土に吸わるる音をきく

の拙句の例をとろうと思ふ。以上の句評は、私の軽風を出しやばりではなく、既成柳壇の八百長主義や鎖国主義的を非難しつつも、それ自体、先輩への盲目的な追従主義、崇拜主義に陥りつつある新興柳壇の悪風潮のおそまつな逆説でもある(「影像31号」「古屋夢村論」喜多二二)

喜多二二とは、後年の鶴彬(あきら)であるが、このとき年少十九歳である。彼は、喜多一児の柳号で、影像23号(創刊二周年記念号)から十八歳で登場、毎号のように柳論句評を寄稿しているが、やはりどこか稚拙で独断的な若さぶりが目につく。

このためか、影像52号の昭和4年ごろ「鶴彬君に贈る一片」で、両者は袂別して相会うことはなかった。夢村はこのとき「詩を作るより田を作れ」との鶴への広酬に尽きているが、このことはまた、夢村自らが甘受しなければならぬほどの世情の深刻さであった。夢村は昭和8年から再三にわたる応召をうけて大陸各地に転戦中、妻子を広島島の原爆で失う悲運に遭遇するなどして昭和27年7月6日病死した。時に中国新聞社徳島支局長の職にあり、享年57。影像の終刊号は不明。

▼次号は「小川静観堂」

柳籠裏三篇研究 (二十六丁)

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人

八木敬一・七久保博・岩田秀行

紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

351 土用中嫌れいほうをおがませる 花菱

八木「「れいほう」は、「とんだれいほう」の略。怪しい物をれいれいしく宝物扱にする事。

土用干に、嫁が普段余り見せない、いろいろな物を出して来て干している、ということであらう。それを「とんだれいほう」と洒落ているのである。

岩田「単に開帳の際の靈宝に見立てたものと解していたが、「とんだ靈宝」をもきかせていると見た方がよさそうか。

佐藤「靈宝は、ここでは嫁が里から持参した美服の数々やら、手回り品のことであらう。「とんだ靈宝」との関わり合いはないと思

ますか…。

たからくらべを嫁がする暑イ事 一四一三

座敷中嫁のはびこる暑イ事 二七四

見せつける気て花嫁ハ土用干 明四天一

鈴木「佐藤兄のお説が正解。

岡田「同。靈宝は開帳のときなど特別料金をとって見せた寺社の秘宝・秘仏。即ち、この句では減多に出さぬ一張羅の美服など。

352 唐棧の二ツ身を着るい、男 霞朝

八木「「唐棧」は棧留稿のこと。表面滑、光沢あり。舶来の棧留稿が唐棧であり、和製のイミテーションは和棧である。守貞漫稿によると川越辺でつくられた。割合高価なものであるが、正装用ではなく、通人が羽織・着物

などに愛用した。

句は、唐棧を背縫のない「一つ身仕立て」にして着て、イキがつている「いい男」だ、というよふな意味に解し、「しよのない野郎さ」というよふな感想も含んでいると思

う。
青木「礎稿贊。一つ身の唐棧「通じんい、男」ということなのだらう。

佐藤「「一つ身」は赤子の着物のはずだが…、不明。

鈴木「礎稿の「イキがつているいい男だ」でよいと思つ。

岡田「佐藤氏のいうように一つ身は赤子の着物です。唐棧の一つ身の大人用ならチャンチヤンコだけ。
さて、この「いい男」は美男子でなく

一年を裸で暮らすいい男 四四一

女には見せぬ諸国のいい男 三六八

の角力取。ひいき客(大名にかかえられている者多し)から折角贈られた唐棧も、発育盛りの子供のよう、手や足がつん出てしまつというカツコウ。

353 それミヤあがれすぐに小屋へうせおろ 美徳

八木「「小屋」は非人小屋。何の場面か分か

らないが一解を示すと、日本橋の心中さらし物。見物人がのしつてゐる場面。

七久保 賢

ふ心中車や松にかくまわれ 明二梅 2

江戸のまん中でわかれるなさげなき 八三

吉原の咄をさせる小屋がしら 五二七

心中を吉原関係か、一般の場合かと限定する要はないと思う。死んでまで添いとげようとした二人に対する観衆のやつかみだろう。

佐藤 賢はつきりしないが、心中未遂説と考えていた。

鈴木 礎稿でよいと思う。岡田 同。

354 大汐の猪牙大道へへさき来る 五楽

八木 「大汐」は、一か月中で最も汐差の大きい汐。または十五日の上げ汐、新月または満月の一、二日後に起こる。

大汐で川の水位が上がった状態である。土手と水位の差が少なくなり、猪牙のへさきが道の上に突き出して来るように見える。

七久保 「大汐」の類句に、

大汐に松をかすつて猪牙通り 傍二六

がある。主題句は大汐のつて矢を射るように進む猪牙舟の速さを「大道へへさきくる」と表現したのであろう。

上げ汐で御仕合だと柳橋

岩田 賢もやっている場合と思ふ。

西原 猪牙らしい趣がよく述べられている。

佐藤 神田川か、山谷堀での実景であろう。

隅田川としても勿論よいが、満潮のときは、

道路にまで水があふれることもあるくらいだから、

吃水の浅い猪牙舟なら、大道へ乗り上げそうに見えるであろう。

鈴木 賢右に賢。

岡田 佐藤説の神田川あたり。着舟の場合。

355 なくたミで無いのは狎をたんとかひ 車道

八木 大屋の風景か。愛玩用なら沢山飼うわけはない。商売だから飼っているのだろう。

七久保 礎稿にある商売用の場合であろう。

番傘川柳本社水府忌句会

とき 8月6日(日) 午後6時

ところ PLP会館(JR天満下車)

宿題と選者(各題2句・席題1題あり)

「毀す」 大村 三千子 選

「くしゃみ」 山本 翠 公 選

「光背」 片岡 つとむ 選

「結果」 小出 智子 選

「暑い」 磯野 いさむ 選

川柳公園改装記念

西日本川柳大会

とき 9月3日(日) 午前9時開場

ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削

久米南町中央公民館

交通便 JR津山線弓削駅下車徒歩5分

兼題と選者(各題2句)

「円(えん)」 寺尾 俊平 選

「焦る」 八尾 和加子 選

「メンバー」 西出 楓 樂 選

「魂」 中原 諷 人 選

「期待」 谷川 渥子 選

「深い」 恒 弘 衛 山 選

席題 2題 特別課題 1題

◎締切 午前11時半

投句 20×4cm句箋に1句ずつ明記、裏面に雅号を書き、8月30日までに会費を添えて左記へ

〒709-36 岡山県久米郡久米南町下弓削

弓削川柳社

会費 出席者2000円(昼食・記念品)

投句者1000円(発表誌)

呈賞 総合13位まで知事賞ほか

秀句鑑賞

同人吟 小出智子

17月号から

私事ですが、近頃、年をとるということは

こんな寂しいものかとよく考え込むようになりまして。第一に感性が鈍くなり、何を見ても聞いても感動が薄く、加えて、健康の上でも疲れやすく、根気がなく、悪い条件が重なって悪循環となり、それが句の上にも影響していることに気がきます。若い時はもう少し自由に、自分なりの思いを広げることが出来たのにと悔しくなりません。

私の身近には八十歳、いや九十歳を越えた方でも、佳句を創っておられる方が幾人もおられます。私もこのままではいけない、今まで閉じ籠っていた自分の心を思い切って開放し、自由に、何にでも好奇心を燃やしてみようと思ひ始めました。そして、今このように生きているというものを残さなければ、川柳をしている意味がないと思うようになりました。伸び切った弾みがない心をどのようにして奮い立たせるか、非常にむづかしいことですが、焦らず弛まず、肩の力を抜いてコツコツと歩き続けたいと願っています。

雨傘の雫も中年くさやかな

桑原道夫

随分久しく句を見せて頂くことがなかった作者ですが、一月号から颯爽と登場された。思わず「お久し振り」と心の中で挨拶したことでした。

若い日の雨はさして気にならず、中年ともなりますと、雨の雫も人間くさくなり、しめっぽく感じるようになるものです。それが、中年の分別というものでしょうか。

円満に同居 大した役者なり

西出楓楽

昔から嫁と姑の問題は宿命的とも言われていますが、円満に同居するには賢くなるか、余程馬鹿になるかでないかと、続けることはむづかしいと言われてきました。だが、作者はそのどちらでもなく、役者になってその場を演じると言われています。この句のあつげらかんと聞き直った仕立て方が、この内容にふさわしく、そこはかとないユーモアも感じられて頷くばかりです。

みな胸にしまいサビオを巻いた指

田中叶

この句の背景には、一つの出来事があったはずですが、サビオを巻いた指に焦点を絞って、具体的には表現されていませんが、これは作者の優しさで、心の深いところを詠まれています。純粹な人柄のよく現われた句でもあります。「わざとらしさのない叶川柳」と五葉庵氏の言われるとおりです。

直情の川に溺れたのはむかし

江原とみお

作者のお人柄を詳しく知る由もありませんが、平素の句を拝見していてもこの人の気骨というものを感じます。一気に表現されたこの句にも通じるものがあります。

火の用心 噂大きくなってゆく

政岡日枝子

「人の口に戸は立てられん」とか、「火の氣のない所には煙は立たん」とか、いろいろな諺がありますが、噂というものの広がりには計り知れない不思議さがあります。何時の間にか尾端が付いて、とんでもない事になってしまっている場合もありますが、「火の用心」と大袈裟に構えたとところが深刻でなく、さっぱりとして、さして重大なことでもなさそうなお面白さも含んでいます。

雑然と整理のできている書斎

小砂 白汀

たとえ家族であっても、触られたくないというのが書斎です。どれほど雑然としていても、何処に何があるか本人にはよく分かっているのです。「雑然と」にこの句のポイントがあります。

連戦連敗バレー部は皆美しい

小島 蘭 幸

オリンピックに出場して帰国したチームのバレーを何度か見たことがあります。それはもう堂々として逞しいと思ったのですが、美しいとは感じられませんでした。

この句、連戦連敗のチームのことを詠ってありますが、強いチームになるまでの試練に耐えているのでしょう。流れる汗とも、涙ともしれぬものを拭っている姿は、それこそ真実美しい姿なのです。下五字がこの句を引き立てています。

兄弟の気性 兎と亀に似る

吉岡 きみえ

同じように育ったのに、どうしてこうも性格が違うのかというのはよく聞く話です。亀にしる兎にしる、いずれにも長所短所がありますが、兎と亀に例えて、生き方をはっきり表現されたところが楽しいです。

湯舟から聞こえる母の子守唄

鈴木 公弘

「子守唄」というのは、よく常套的に使われることがあるのですが、この句の場合、それとは少し違います。お孫さんと一緒でもなく、一人っきりでお風呂に入っているお母さんの鼻唄と受けとれます。そんな雰囲気がこの句にはあります。このお母さんは多分、子守唄しか知らないのでしょうか。

その昔、故里で、終い風呂に入る母のために風呂の焚き口から薪をくべていると、母のつぶやくような唄を聞いたことがあります。遠い日を懐かしく思い出させてくれました。

雨が止んで昨日が残る水たまり

岸 桂子

昨日の出来事を思い出しながら歩いていると、ふと雲の切れ間の青空が水たまりに映っています。水たまりの水が澄んでいました。

墓石のちらしはそつと四つ折りに

肥後 和香子

作者の心の中に潜在する何かがあつて、墓石に関心があり、ちらしを四つ折りにされた。句にはそれだけのことしか言っていないのに、心のうちが読み取れます。一家の中で立場をよく心得ての仕草ではないかと想像されますが、心の深い表現です。

かぜえ唄 残りの旅が見えてくる

舟渡 杏花

一つ、二つと、数え唄のように、人として親としてしなければならぬことが片付いてゆく。淋しくもあるが、これで良いのだと思う。女性ならではの表現が見事です。

いつもの道いつもの家がないのです

黒田 能子

訴えるようなこの句に、切々とした悲しみが伝わってきます。阪神大震災から五ヶ月も経ちますのに、街の復興は進まないと聞きます。ご自身も罹災されただけに、他人の身を案じる気持が強いのです。「いつもの道いつもの家」とたたみかける表現に、一層、哀しみを深く感じられます。

納得をするまで回り道をする

澤田 千春

この句を拝見してハッ／＼と立ち止まってしまいました。安易に妥協したり、諦めたり、そのような繰り返しであったのではなかったのかと反省させられました。

川柳にしても、入選するしないは別として、せめて自分だけでも妥協のない納得の出来るものでなければ、分身のような句が可哀そうではないかと思つたことです。それがたとえ回り道であつたとしても……。

水煙抄

高杉鬼遊選

東大阪市 谷 口 義

高槻市 小林 一 閑

考えが変わり金魚向きをかえ
ワングルーム金魚と同じ間取りなり
診察券わざと集めたわけじゃない
腹立てる事がないのも淋しいね
天高く今日は姑の法事です

和歌山市 木 村 親 路

円高は敵か味方が分からない
血圧も三次会ではもう忘れ
経済論一席ぶって金を借り
金のない縁者ばかりで仲が良い
紫陽花のため息を聞く女寺

沖縄県 杉 谷 一 栄

ノバティの大会 御二人目の訃報(西尾菜先生)
爪切りの音いらいらを消している
食べてくる電話お米を研いだ後
今更と自画像描くと笑うかな
出張の帰りわが家に寄るプラン

誘うたらまたの機会と逃げられる
電車開通 合掌をしに行きましょ
遠足の孫 宅配でかすていら
時間給水思えば濡れて苦にならず
ご主人がまだいらっしやるお気の毒

鳥取市 山 宮 愛 恵

七転び八起きの汗で生きている
さわやかな朝だみんなのパンを焼く
レトルトの味にすっかりならされる
たっぶりのスープに愛が溶けている
地の果ての駅まで信じついで行く

尼崎市 的 場 十四郎

弱音吐く男で高い山が好き
借金はないが貯金のない弱味
咲けば散るさくら暦のみおつくし
深い訳聞きたくなつた紙コップ
胸の傷癒えないままに雨季に入る

母の謎 引き出し一つ開きません 堺市 谷 平 照

東京に謎置いたままUターン
空白の一年がある身上書

謎のまま認知している黄泉の国
究極の謎 赤ちゃんを産む身体

知らぬ間に毒がまわっていた日本 八尾市 村 上 剛 治
仲直りしてもせいでも友は友

謎が多過ぎこの世フアジーに暮らして
正確な時計が僕を急き立てる

無事旅を終えて保険が惜しくなる

子のために祈ることしかしてやれぬ 八尾市 村 上 ミツ子
早よかえろ飲み友達が家に居る

切り捨てたしつぽがひとり歩きする

かばい合いでこぼこ道を歩いてる
逃げるから追っかけられるようになる

ついでの棲処 算段つかぬままに夏 西宮市 古 谷 ひろ子
仮設にも花嫁がきたふだん着で

陽の匂い洗濯ものに生きている

こどもみな味方につけて妻の乱
敵味方問わず生きてふと孤独

命乞いが聞える黒いゴミ袋 宝塚市 永 田 暁 風
長生きをしてねとからむ指の細さ

それぞれの闇を背負うている笑い
古椅子もわたしも許しあい過ぎて

ゆきずりに点して行つた灯が消えず
遊ばせておくには惜しい鬼瓦 島根県 武 島 ちよえ

湯の宿の朝も定時に目が覚める
意地と意地何時もわたしが折れておく

一枝をきれば隣と顔が合い
愛妻のお出かけ何処へと聞いて欲し 豊中市 石 川 勝

不眠症しつかり金を貯めている
妻と腕組んで歩いたことがある

歯科眼科耳鼻科と生きる忙しさ
子守唄あまり上手で眠れない

シナリオにやらせがあつた猿と蟹

灯台の下を回ってばかりいる 倉吉市 松 本 よしえ
だまし舟 底も何時かは帆になれる

よっぽどの事で刺ある花を抱く
どん底を見てからはもう怖くない

ライバルの火遊びじつと見ています

記憶確か 八月十五日の猛暑

枚方市 前 たもつ

基地隠す夾竹桃のやさしすぎ(沖縄旅行 二句)

県花ですデイゴの真つ赤散りそめる

食わず嫌いゴルフもきつとその類い

酒はよい俺とお前の仲にする

堺市 宮 本 かりん

片付けすぎた部屋が他人の顔をする

飲みますか いいねと返事すぐかえる

無駄な事している時は楽しいな

夕ぐれの小雨がしとど胸に降る

言葉よりいっしょに泣いてくれる人

今治市 村 上 久美子

合掌のついで も一つ欲を足す

束の間の虹に酔いますシャボン玉

身の程を知って飛べない水溜り

そつと覗いてみたい私の死んだ後

捨てられた場所で雑草意地を見せ

名古屋市 藤 井 高 子

耳鳴りの底にあるのは玉音か

オウム狂乱 上九の富士は哀しかり

カナリアと組んで富士野の桃太郎

そつと散る夢を見ていた水中花

絵に描いた餅 通販に誘われる

時の神リュックを背負うたのもしき

飽食が新車に乗ってやって来た

ひとすじの涙 今年も広島忌

しあわせの丸虫 星となり給う

神戸市 向 井 泰 子
弘前市 相 馬 銀 波

円高も気になりますが麦を刈る

足腰の疲れが目立つ重い口

約束の重さ軽さはない親娘

働けば深いねむりの幸がある

摂津市 木 下 道 子

這い這いの目線で物を片付ける

判断を狂わせたのは甘い水

夏は来ぬ すだれ 花萼塵 わらび餅

華やぎのあとの佗しさ花火屑
出雲市 原 章 峰

合点がいけないけれど会釈する

百態の雲 百態の風を生む

整形外科に大きな靴が脱いである

尿カップ頑固なことは言わせない

堺市 神 原 文

秘事めいてあやめ一輪咲き誇る

ひとり居の段差に慣れてつまずかぬ

人波に無性に揉まれたいひとり

手作りの手提げをくれる嫁がいる

河内長野市 大西文次

からっぽの頭浮いてる露天風呂

馬の顔長うて馬は馬らしい

あれこれとあつてこの年まで一人

補助椅子で空くのを待っているポスト

八尾市 生嶋ますみ

鳩時計の鳩よ私を眠らせて

疑いが解けてあれからよく眠る

別れ話娘は涼しい顔でする

電話口 娘を妻とまちがえる

大阪市 尾崎黄紅

頑張れにどう頑張つてよいものか

君が代は忘れましたと疵を見せ

老兵は消えず戦友会続く

戦後処理終つていない遺族の詩

和歌山市 楠見章子

インターホンいつも私をときめかす

私生活ときおり覗くごみ袋

負けん気の強さきつういコルセット

ポーナスの区割りを妻に仕切られる

愛媛県 中岡鍊三

俺お前 会社の外でしか言えぬ

意識してヨイシヨは言わぬことにする

定年の終着駅か守衛室

シャイなとこ共通項でウマが合い

大阪市 勢理客 トミ子

知り抜いたはずの迷路が抜けられず

働いた母の笑顔がまんやかに

売り声にひんやり浮ぶわらび餅

平成七年元氣を出そう盆踊り

久留米市 鶴久 百万両

月並みな福祉を呪う 孤老の死

充電が足らず火の粉をあびてくる

愛妻百句 残り時間が気にかかる

振りむいたらあかん別れがつかくなる

鳥取県 原 みさを

竹光のくせにちよくちよく抜きたがる

中元に不況の義理がつめてある

握り飯 猿に悲劇の幕があく

受話器から母のやさしい鞭がくる

今治市 越智青園

老い一人言葉の通う風という

ジャンプ傘いきなり娘 嫁くと言う

円高の花屋 国際色ゆたか

走らねばローンの重さ肩にくる

尼崎市 長浜澄子

こころやさしいメダカを親友にもっている

付け足しの言葉おんなの背で裂ける

母と娘に埋め尽せない豆の数

胸の内推し量つてる醤油差し

大阪府 澤田和重

平等に分けるお菓子が目で追われ

毒舌が忠告だからありがたい

抜いた歯を舌が時どき淋しがる

みっちり和本に洗脳されている

富田林市 藤田泰子

過去なんてどうでもいいの揚羽蝶

答えないことも私の意志表示

雨垂れもピョンピョン弾む赤い傘

五分と五分そんなに違うこともない

唐津市 浜本治幸

我が戦史水虫だけは知っている

父の日を忘れぬ嫁がいて嬉し

油断すな法衣の下に鎧着る

禁煙の効果次第に肥り出す

伊丹市 樫谷郁子

毎日の薬が睨む枕元

病院のリズムにも慣れ日は暮れる

コンサート病院で聞く幸せか

同病を相憐れんで車椅子

高知県 百田幸

踏まれてもなお立ち上がる花の性

帰らない夫へ時計が睨まれる

神ほとけ口に出てくる不幸せ

ボケベルにコーヒーの香をかき消され

和歌山市 吉村さち子

水無月の日記は雨の音ばかり

縛れ糸 最後は母に縛りつく

家で食べるメロンにしては高すぎる

許す気になった僅かな行き違い

綾部市 藤田芳郎

八つ当たりたかがじゃんけん負けただけ

本音だなしどろもどろになっている

漬け物に手頃な石が床の間に

一周を遅れて事実だと気付く

尼崎市 田辺鹿太

頼杖をついて弱気になっている

酔い痴れて男は只の石になる

阪神が負けると妻は取り乱す

縁遠い娘が読んでいる育児本

高槻市 庄野澄子

乾杯のグラス目線の合う仲で

乾杯のグラス ジェラシーもなみなみと

そこに死が残る瓦礫に菊の花

限りなく自由 限りなく寒い留守

鹿児島県 大山舞鳥影

天高くはばいたのか水鶏庵(菜師を悼む)

マニユアルがあるか いじめの死が続く

病室でりんごむいてるアイシャドー

親ゆえの過労死はない労基法

香川県 辻上 よしみ

油断した心のすきにつけが来る
ガンバって頑張ってるが出る裏目

母逝った季節がグアブる豆の飯
意地っ張り素直になれず損ばかり

堺市 桜井 莊次

目立ちたい女の舌が良く回る
柏手を打たせる虫のいい願ひ

鯖読んだ話と知らず鵜呑みする
得心の行くまで波と語り合う

鳥取市 藤 ふうこ

溝一つこえられなくてまだひとり
逃げることも上手になって歳をとり

ネオン消え色気も消える午前二時
万歩計 今日を生きてるパロメーター

尼崎市 松下 比ろ志

縄のれん心の色の酒を酌む
空間も時も動かぬ寺の軒

無器用で歩幅は何時も同じです
古い街の古い家並の色匂う

八尾市 平川 幸枝

自立して気まま孤独が深くなる
しらが染めわたしを騙す春日傘

生みたてのためらい一つも割るたまご
木に登るブタで仮面をはずさない

高知県 桑名 孝雄

じつくりと聞けばやっぱり俺の負け
この齡 若気の至りでは済まぬ

取り敢えず酒でケジメをつけておく
仲直り酒があるから有難い

羽曳野市 徳山 みつこ

相談にのつた私も泥の舟
夫からバラをもらったことがない

たっぷりと時間があつて乗り遅れ
たっぷりとおでんをたいて妻は留守

寝屋川市 太田 藍子

留守中の大騒動は知らぬ旅
こんな時ご一緒したくないお方

お疲れが見える新婚一ヶ月
逝く人も逝かれる人もただ寂し

大阪市 遠藤 正敏

子守りしてるのは孫のほうではないか
海を見る宿はひとりにしてもらう

ふとこころにしまふ炎となる秘密
正直に生きたい肩をたたかれる

鳥取市 田中 友子

順番のくる墓石をよく磨き
帰省の娘すつかり町の匂いする

古里の風に抱かれて昼寝する
ぬくぬくと見える隣の窓明かり

横浜市 清水潮華

この駅で降りれば逢える雨しきり

転職が首持ち上げる三年目

確率を信じた傘を持て余す

設計図 柿も桜も切る間取り

和歌山市 杉山精子

たましいを月下美人に盗まれる

フランスパンと格闘してる夫の顎

掌の内の飛車と角とが睨み合い

妻でなく母でない夜の赤ワイン

岡山市 大石あすなろ

芽吹くもの風の動きを見のがさず

輪の中でひとり浮かれている仮面

春は多弁で耳傾ける癖がある

若葉さらさらまだ捨て切れぬめぐり逢い

大阪市 中橋 恵美子

妻の後ついてみやげを持たされる

カウントを数えて子供を急がせる

冷凍の鮎がならんだ旬の顔

言いにくい断り妻にまかせとく

羽曳野市 芦田 絢子

昔話が好きで枕で寝てくれぬ

指切りをくすり指にも知らせとく

まだ消えぬ噂 故郷に帰れない

作戦タイム一寸クールにレモンティー

秋田県 湊 修水

炭小屋でユダ札束と生きていた

母の日も父の日もないブルドーザー

黒田節などうなるるか父の日だ

復興の春は遠いと寒い文

藤井寺市 楠 昭子

しばらくは自由になれるひとり旅

意地悪な神だと思ふ試される

おしゃべりな風が盗んだひとり言

むずかしく考えてない吸うて吐く

島根県 福岡 博利

句読点ここらで昼寝しておこう

灰皿が恥ずかしそうに置いてある

火葬炉へいくら不孝をわびたとて

陽の当る場所で踊ってみたかった

米子市 鹿島 蘭

捨てきれぬ心荷物として抱え

未来まで誰が負ぶって下さるや

右左どっちにしても坂なんだ

わらべ唄大正琴がうたいだす

大阪市 和田 和風

均等法女の棘は抜きにくい

真ん中にいつも写っている女

旧縁の水虫連れて夏が来る

冷奴 酒の二合もあればよし

藤井寺市 高田 美代子
やりくりの巧いおとこでよく遊ぶ
言いくいこと言わされる腹話術
煽られているとは知らず燃えている
そのうちにロボットだけになる地球

大阪市 一本 勇 太

ユーモアがひと匙欲しい雨の午後

人間の森で吹雪いている背中

饒舌な女のボタン取れている

木登りが好きで出世の遅い猿

尾張旭市 三浦 きぬ

七転び八起き目もまた転びそう

サリン魔も同胞ですかお釈迦様

儘ならぬ浮世 気儘に生きている

横顔のままが良かったお嬢さん

海南市 谷口 義 男

相打ちをする日を待つて居るわたし

匙加減 妻が握つて居る生命

残高を気にして生きる老いの日々

右向け右 言われたままに右を向く

島根県 三代 朝 子

笹百合の香に包まれる初夏の部屋

もう少し若かったらと負け惜しみ

脇役になくてはならぬお漬けもの

齡忘れ綺麗な服にあこがれる

往年の力はないが紹介状

苦勞など何んもないのかよく太り

風邪だけがここ四五年の病なり

妻の愚痴逃げたところで二DK

犬山市 早川 盛 夫
兵庫県 西井 つや子

優しさに触れてこぼれる花の種

ことわざを並べ大正いやがられ

派手も駄目 地味も淋しい古希の坂

唐津市 山門 幸 夫

サハリンがサリンに聞こえ過敏症

豆の蔓よう伸びよった入院中

無農薬ここをせんどと虫が食い

唐津市 山門 タ ミ

嫁姑 生れ育ちが違いすぎ

美容院 女の口がほころびる

病む人にせつせと通う妻がおり

鳥取市 植田 一 京

冷暖房あつて図書館有難い

群れを出て群れのかたちが見えてくる

どの芽にも伸びる暗示をかけておく

和歌山市 福重 美 子

借り住い耳ある壁が気にかかり

物干の男世帯が物足りぬ

一寸へマやれば老化の所為にされ

曇ったり晴れたり夫婦ややこしい
鳥取市 谷口 侑里

釣りの穴場 子にも孫にも教えない
さわやかな風に浮かれて風邪を引く

新潟県 高野 不二

肩書きは酒だけ呑める役ばかり

孫の声電話で聞いて良く眠る

年金の元は取ったがまだ死ぬ

米子市 林 風子

懺悔する厳しさもなし豪雨に佇つ

樹海深くみ仏とあり忘れ花

光合成わたしも両手ひろげてみる

尾崎市 尾宮 弘治

他所行きの指輪外して台所

抱いた子のもみじの手から募金箱

助かった命に欲の芽がのぞく

泉佐野市 内田 倫子

隣席の若い会話に乗り過ごす

乾杯が怖い高価なクリスタル

ああシンド追いかけられた夢のあと

富山市 島 ひかる

いい夢が膨らみすぎたシャボン玉

開墾の汗がゴルフの丘となり

暑気払い仏の水に浮く氷

甲斐もなく弱気になって娘に頼る
尼崎市 中澤 向西

栄えれば寄り添ってくる絆

霧の中 動く影絵が見えてくる

和泉市 中川 楓

妻の音がころっと変る電話口

猫を抱く妻に冷たくされている

よそ行きの言葉の列で落ち着けず

河内長野市 木太久 正一

改札に温みが残る町に住み

隣から阿波のすだちのお裾分け

円高のメリット食べる悪い虫

鳥取県 岩崎 みさ江

お惚気と途中で気付く愚痴ばなし

泥水も待てば上から澄んでくる

更衣 母の遺した一張羅

熊本県 高野 宵草

身辺の整理しとこう親友が逝き

十人十色 街のベンチは面白い

一病の爆弾抱いて医師と生き

松江市 安食 友子

針千本飲む覚悟なら出来ている

よちよちの孫に危ない信号機

頂上へお花畑が勇氣づけ

鳥取県 山本正光
幸せと言う幸せに気がつかず

鯉のぼり揚げて日の丸揚げぬひと
生きて来たみちを問われる足のうら

鳥取県 吉田孔美子

お客さんのどこでもいいわほめておく

背な子を始めた店も二十歳

夫昼寝となりの部屋に昼寝する

摂津市 井上源一

平成七年 地獄に足を掬われた

名薬に過ぎた男のしじみ汁

メイドインジャパン バリの旅土産

宝塚市 飯西ミサヲ

生きている実感うれしボランテイヤ

七転び転んだままの人生も

伴奏よもつと素直について来い

今治市 渡邊伊津志

もう海へ戻れぬ魚の瞳がうるむ

ひたひたと誰と語るか夜の海

底知れぬ若さを秘めた海の蒼

鳥取県 権代康女

老いらくの恋は長生きできるかも

相性が合わず食べ物まで違う

果物があれば私はおちつける

大山市 森正

逆立ちを子だけに自慢 外は梅雨

初めから型にはまった痴話げんか

またも産む犬の始末へ陽が落ちる

八尾市 大内朝子

さよならを言ってふくらむ花の思慕

毛虫にも蝶になる日の夢がある

背伸びした足が疲れてくるひとり

泉佐野市 河原崎純隆

解答は簡単だった詰将棋

核心にせまったとこでコマーシャル

瘡蓋をはがしてみたい治りがけ

大和郡山市 榑原慧心

カタログのショッピングにも上手下手

週刊誌やたらに多い美人妻

人生の縮図を運ぶ渡し船

尼崎市 立谷勇次郎

母の柵抜ける日が来た反抗期

来世もお前と添うと阿呆なこと

温泉で初めて聞いた妻の歌

枚方市 森本節子

日暮れまでサッカーの声河川敷

河内飛鳥 古墳の謎がゆれ動く

残酷な過程もあつてしじみ汁

山陰の夕日が映える嫁ヶ島

島根県 児玉 幸子

誕生日また年がふえ喜ぶ子

花しようぶ今を盛りと人を呼ぶ

兵庫県 大谷 幸次郎

マナーなど忘れ榮養撰っている

死ぬ順は決っていたと鬼嗤う

げんこつの味など知らぬやさしい子

米子市 池尾 保子

死んだ人忘れていない請求書

もつれ糸いつもわたしがほどく役

朝早くカラスの群れに起こされる

松江市 松浦 登志子

オウムよりうぐいすの鳴く里に住む

どうせならプラス志向で生きたいね

紫陽花が無色であったころの夢

兵庫県 安達 厚

友人の度忘れ聞いて安堵する

気にすなと言われたことが気にかかり

近いうちまた来てほしい孫送る

鳥取市 津村 静枝

オックスフォード孫娘からエアメール

心配は親がするものとも言えず

帰国まで神に縋って日々過す

マンネリの老いに逆立ちしたくなる

高槻市 芦田 静江

二度勤め自分騙して生きてます

生臭い風と知ってる応接間

寝屋川市 富山 ルイ子

友からの差し入れ何もせずに日々

娘と息子両方からの温い風

ほかしてはおけぬ弱った母の世話

尼崎市 河津 正治

着想の奇抜な割に芽が伸びず

半壊の庇ロンの目が光る

満開の枝をためらう花鋏

島根県 松本 聖子

大声をあげたら楽になるだろう

消費税 何がなんでも取る気なり

またしても白髪が増えることができ

島根県 菅田 かつ子

抜歯待つ待合室の白いばら

もう、恋もできなくなつたか歯を抜かれ

手抜きしてすこしご自愛しています

茨木市 島元 ふみ

若者を攫つた鬼に角がない

先に逝くつもりか自立強いる妻

現実に戻す今夜のお惣菜

静岡市 大村 正雄
陰口は世間をまわるプーメラン
決断を足踏みさせる風の音

不本意と言つて本音の時もあり

鳥取県 橋谷 静江

路地裏の情け一人になつて知る
時々私の胸の火が燃える
仲直り出来る七夕待つてゐる

尼崎市 野瀬 昌子

五月病一年生がぐずり出す

疎開先へ母が持参のえんど豆
一つ一つ殻抜き捨てて生きてゐる

羽曳野市 麻野 幽玄

介添も付合つてゐる森林浴
上げてゐるつもり足の蹠きぬ
柩には何も入れなと言ひ残し

岡山市 山磨 行子

情けない若さに勝てぬ二度の職
気くばりも過ぎれば嫁にうとまれる
孫よりの誘ひ嬉しや食事会

鳥取県 橋本 多哥由

地酒のんで鄙びた風を聞いている

粗大ゴミ岸边にやつと辿り着く
還暦で新スタートを切るつもり

和歌山県 中村 君枝

変化球 妻の癖にもなれてくる

顔見れば小言がたえぬ妻といふ

共通の痛みがあつて生きられる

熊本市 北川 一進

助手席に座り気になる新免許
万歩計 目標まではまだ遠い
マニキュアをしてから派手な笑い声

尼崎市 岩倉 キク子

五十年 焼野ヶ原を偲ぶ夏

竿差せば届く処に娘の住い

右向いて左むく間も無い財布

尼崎市 吉永 伊三郎

春の夢この頃とんとモノクロで
脚萎えた男に巴御前在り
大正がこの頃呆ける白内障

和歌山県 古久保 和子

大きな目の靴で歩いて来たつかれ

一日の長さ忘れてばかりいる

親友の癖を見つけた七ならべ

富田林市 山原 昭水

百円で聖観音に運を買ふ

二上山登つて俄歌人なり

神様も絵馬みて笑う誤字 脱字

大阪市 鈴木トヨ子

亡姉さんと呼んで形見の帯結ぶ

連休の楽しき亡夫に見守られ

青空に平和呼んでる鯉のぼり

泉南市 坂根流水

震災もサリンもぬれて梅雨の下

高原の深山つつじは雲と生き

老いて病む孤独のがさどくとなめ

兵庫県 円増純子

今日までで一番うまい酒を飲む

全快へ昨日と違う空の青

花鋏 罪の意識を抱きつつげ

砂川市 武田正美

あちこちの花と対話をして暮れる

不眠症 朝の眠りが心地よい

ひよっとことおかめで余生恙なし

鳥取県 山内芳江

今開くつばみだそつとしておこす

骨惜しみしてると福も背を向ける

お金には印はないがあるけじめ

仙台市 小寺九

あちこちに置き傘をして傘が無し

夏休み親も遊べぬ塾通い

良き妻と違っていても腹の立つ

和歌山市 木村初子

明日よりも今日を生きんと鳴く鴉

だんらんの輪にはあちゃんの指定席

心急かれて三分間は待ち切れず

香川県 堤くに子

窓際でカッパの皿もかわきがち

今頃になって返せと言われても

米を研ぐ事にも慣れた妻の留守

兵庫県 倉垣恵美

ブランコに揺れて檜山見えています

今ここでノーと返事がなぜ出来ぬ

約束をたやすく破ったのはわたし

松江市 松本知恵子

雨の日にお隣からの花の苗

思考力失せてマニュアルばかり見る

正確な手つき老いても草を抜く

熊本県 大川幸子

気にかかる影のかたちが老いてくる

何もかも譲り楽やら淋しやら

大木を夢みて小さな芽が伸びる

寝屋川市 籠島恵子

四畳半で熊を飼ってるぬいぐるみ

疑いを晴らしてほしい領収書

人の意見も聞いてみようか赤い服

西宮市 牧 潤 富喜子

グーチョキパー やさしい負けをしてくれる

雨が降る目立たぬように化粧する

底知れぬ不安ふと湧く余震なお

米子市 足 立 由美子

丁度よい広さに住んでながらえる

定刻へ犬にせかされ散歩する

時として影と厳しく立ち向かう

吹田市 西 岡 豊

腹の底見せぬ聞かせぬ喉仏

有刺線張り巡らせた新設校

阿弥陀さま母は達者で居りますか

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

わが影をステンドグラスに溶け込ませ

ワルツ聴くほどにあなたと旅の夜

王宮の見えるホテルで子に便り

青森県 西 谷 鐵 郎

一日を生きて一日減る余白

飽食の親が拒食の子に育て

またの世は鶴に生まれて来いよ蝦蟇

唐津市 市 丸 晴 子

析ること日課になった母と居る

キッチン道具あくびの共稼ぎ

被災地のテントに無情 雨が降る

出雲市 加 藤 スズコ

お天気に振りまわされた春炬燵

金槌を手に母さんと呼んでいる

仏壇にカーネーションを分けて上げ

静岡市 沢 田 き ん

風呂上がりまだ石鹼の匂う肌

お喋りが降車のベルを押し忘れ

ゆっくりとあの世で話すことにする

静岡市 松 下 正 枝

忘れたと記憶にないという違い

ゆっくりでいいよと言ってみたものの

村八分二分捨て切れぬ温かさ

静岡市 小 木 久 子

響き合う会話が出来て弾みます

身勝手へある日我慢の糸が切れ

戦争は絶対いやと叫びましよ

静岡市 浅 子 まつゑ

夢を追い覚めてむなしい水に溶け

手の届く位置になんでもある恐さ

人生を端役のまままで渡りたい

静岡市 佐 藤 次 枝

連休の通り過ぎるを待っている

托鉢にちよっぴり善の布施をする

丁寧な挨拶されて恐れ入る

静岡市 永倉柳華

金の成る新茶の味よよい香り

川の字で疲れた顔の鯉のぼり

年寄りの意地が手伝う瘦せ我慢

静岡市 三浦つね

幸せが逃げないようにチェックする

つかい棒外せば人の字が倒れ

いつ死ぬかわからないから欲をだし

日立市 加藤権悟

新聞の隅から溢れ出る美談

飽食のグルメよ奢りすぎないか

人生はプービー賞でつつがなし

寝屋川市 井上すみれ

猫だけが見舞ってくれた日記帳

うれしいこと有ってお経を読みちがえ

あの友も転んだニユース花鏡

宝塚市 黒台伊佐武

禍と福が交互に前を駆け抜ける

紫陽花に恋の焰を鎮められ

聞えても聞えぬふりで素つとぼけ

島根県 小林延子

戌の日に犬が五匹の子を産んだ

目を閉じて不自由な人のこと思う

墓参りしようとすると雨が降る

高槻市 傍島克治

誰も彼も晩成型と思いい込み

色あせたのぼり好評分譲中

どうでつかまあまあでんなすれ違う

河内長野市 水谷笙子

甲斐性はないが犬には慕われる

人妻の旅行鞆を持ちたがり

幸せと思う 夫婦でえんど剝く

島根県 岩田三和

よくかんで脳にしげきを兎にさせる

馬のりになって喜ぶ金太郎

いい仕事うるさいテレビ消してから

唐津市 山口ふさ子

母の日にエプロン攻めのプレゼント

戦後処理 過去では済まぬことばかり

指紋消すほどの悪ではない積り

唐津市 福島紀一

一度だけ父に背いた悔い今も

ずっしりと大振りて服むお茶かげん

春愁や昔の町を汽車がゆく

伊丹市 小熊江美

ああ言えばこう言う孫が頼もしい

一滴も飲めぬ女でなじめない

嬉しさがビール泡を溢れさせす

寝屋川市 後藤 黎之助

古希近く尖ったものは爪楊枝

定年を追い出す如く自動ドア

お互いに歳ですなあと仲直り

今治市 野村 清美

言い訳はよそうと耐える葱坊主

頰杖の思案がいつか寝てしまい

人騙すことは平気なけしの花

旭川市 朝倉 大柏

お早うさんどの花花もぼくに向く

来てほしい時に顔出す人がいる

老い楽し年の数だけ馬鹿になる

鳥取市 坂田 和歌子

畔道に座れば苗が問い掛ける

トンネルを抜けて地酒の名が変わる

晴れマーク心の中にそっと貼る

和歌山県 上岡 正直

野の花は介護なくても生きている

喜んで散ったわけではない桜

反抗期なくして過ぎた子はこわい

福岡市 井崎 ミサ子

なるようになると思えど気に掛かり

親切にされた店には足が向く

独立の一步を親は見てるだけ

尼崎市 軸丸 勝巳

そんなつもりで征ってはいない兵の墓

安井賞展わかった顔で頷いて

頬笑んで被り直してみる帽子

島根県 槻谷 伸子

お茶のんでお茶にのまれるまで話し

薫風に少女の足は長くなり

母の日に貰った服は宝物

札幌市 三浦 強一

雲になり風になる日の山頭火

戻れない道に時雨る山頭火

からくり人形おどろおどろと化けてゆく

今治市 塩路 よしみ

ストレスが寄り道させる縄のれん

凡人でよい路地裏がいつち好き

無欲にはなれずまだまだ夢を追う

大阪市 池田 一男

神にだけ言える秘密に掌を合わせ

年金のなんとも細い命綱

子は親の苦勞の背中見たがらぬ

静岡市 増田 扶美

苺真っ赤 陽の申し子か夢を食べ

蛇苺 真っ赤に熟し嫌われる

太るのが欠点といいよく食べる

大阪市 川原章久

見習えとばかり寄り添う道祖神

水郷の舟べりを打つ初夏の波

紫陽花の人も移ろう色模様

河内長野市 柏本靖子

菓子つまみながら読んでる瘦せる本

口出しはしないと決めて円く住む

お日様の恵みを享けたシャツを着る

大阪市 岡本久峰

スターリン殿に忠誠誓わされ

ウクライナ ウラル バイカル ナホトカよ

エプロンの白さや白し噫祖国

河内長野市 橋本弘美

担当医 代つてからの五月病

神妙に次元の違う話聞く

皺ふえる度に悩みが薄くなる

河内長野市 妹背 尽呂久

ユーモアが出かけて蓋をした弔辞

若者のルールを知らず馬鹿にされ

世の中を食い物にする週刊誌

兵庫県 北川とみ子

翔びすぎて命のはなしなど忘れ

満ちたりた事になっている夫婦箸

また聞きの話カラスが白うなる

西宮市 池田善守

定年後 妻の歩幅で暮す日々

招かれる客は妻の友ばかり

島めぐり一つ一つが自己主張

寝屋川市 北岡波留吉

妻の留守 飲みたいけれど休肝日

晴れた空信じ切ってる旅かばん

慰問袋の菓子食った暗い青春

鳥取市 岸本孝子

居酒屋で愚痴って酒に笑われる

弁当も子供の口に合わされる

年金の暮らしに穴はあけられぬ

岸和田市 井齋一齋

強盗をたやすく逃がす自動ドア

核のゴミ地球を壊す無策ぶり

巣造りにツバメが迷う震災地

大阪市 今西静子

中の暮らしと自分で思うことにする

あこがれをまだ追っている老いの坂

気遣いの人と並んだ座の疲れ

和歌山市 津村武春

上様という別姓の請求書

失せ物がひよっこりと出る大掃除

嘘つかぬ男で無口無愛想

和歌山県 藤井春子

美しい嘘で優しく亡母看取る

シンボルの富士の裾野は鉛色

善人と悪人知っているつばめ

羽曳野市 酒井一壺

残すもの何もないので良く眠れ

残すもの少うしあつて夢を見る

遺言状あなたにあげるものはない

十和田市 阿部喜久江

ゴシップの仕入れる先は美容院

疑えば森羅万象怖くなる

だんだんと小粒になってきた政治家

大阪市 中井正秀

内の家今度揺れたら潰れちやう

人も国も常の付合い大切に

通リやんせゆるりと渡れぬ交差点

寝屋川市 森茜

ドラマティックに幼稚園から帰る靴

はりせんぼん どこに触れてもやっかない

朧月夜というのにおなかがうと鳴る

相生市 中塚礎石

手を引いてくれる孫にも当てがある

人間のこの世の花は泥まみれ

手の甲に命のしみが一つ増え

宿毛市 岡村千鳥

雲行きを孫の片言和らげる

まだ彼女なごう花の青春なのに

すねてなど居れまい今日も孫が来る

堺市 吉本菁風

歯を見せて笑えば叱る亡父であり

面映ゆくバージロードを歩むなり

またしても年増ばかりの細雪

大阪市 三浦千津子

逢うてきた余韻が雨を歩かせる

四面楚歌 浮かれた街を走り抜け

父の絵に走り続けた跡がある

八尾市 奥田明

叩かれるほど有難い木魚の音

落ちそうな瓦みながら溝に落ち

好物を後にまわして食べきれず

岡山県 富坂志重

母の小言 信号待ちの顔で聞く

身から出たさびと思えど腹が立つ

さとされてやさしさ倍にしてかえず

尼崎市 森安夢之助

栄転の祝杯 妻が音頭とる

仮住まい妻も私も子も無口

ふかぶかと下げた頭に嘘がある

好きなのに理性の鎧外せない
宝くじ当たらないけど買いに行く
郭公の声に一瞬 時が澄む

鳴門市 八木 芳 水

さくら散りちよつと人間らしくなる
気休めになるから飲んでいる薬
いさかが増えて地球の温暖化

和歌山市 山 根 めぐみ

新茶いれるとてもやさしい目でいれる
ストレスを小刻みにする胡瓜採み
誰にも言えぬ日のときめきが海にある

泉佐野市 稲 葉 洋

やどかりの嘆き身にしむまた転居
鳩が鳴くそれでなくとも眠いの
母の日に比べ父の日軽なこと

東京都 松 本 冬 虻

悪いこと百も承知の愛煙家
想い出を綴つてとじて老いを知る
このままで時よあの日に連れて行け

徳島県 安 宅 美代子

時々は過去が論しに来てくれる
走ったら待ってくれます里のバス
その先を言わせぬ釘を打って置く

和歌山県 中 後 清 史

投げ込んだ石の波紋にうろたえる
森の中を出ぬ少年の自閉症
茨木市 久保田 恵美子

謎少し解けたドラマが褪せてくる
沢庵が噛めぬとポツリ淋しいね
鳥取市 岸 本 宏 章

伯耆富士 本家だけには歯がたたぬ
ハイレグのマネキン夏を呼んでいる
松山市 丹 下 美津子

偉そうに言つても夫の傘の中
嫁の留守 鍋の底までピッカピカ
高槻市 乙 倉 武 史

くからの電話 訛りは大つびらに
歳とらぬ長寿の薬欲しくなる
寝屋川市 宮 崎 菜 月

日本人深く思わぬ顔となり
美しくいのちを閉じた萩草
寝屋川市 瀧 本 八十八

臨終の科白やっぱりありがとう
公約が化粧と知らず票を入れ
島根県 谷 岡 婦 美

天候不順 不作の声がちらほらと
この頃の世相のんびりして居れず

天候不順 不作の声がちらほらと
この頃の世相のんびりして居れず

天候不順 不作の声がちらほらと
この頃の世相のんびりして居れず

天候不順 不作の声がちらほらと
この頃の世相のんびりして居れず

八尾市 鷺見章
プラトニッククラブなら許す車椅子

病院のナースはみんな美しい

西宮市 岡本道子

裂け目から狂気がぞくぞくくろの美

胸奥の釘打つ音が雨しきり

唐津市 岩崎實

早朝の足どり軽い老夫婦

長電話 待ってたように長電話

倉吉市 山中康子

居酒屋で息が合うたか帰らない

ぴったりと寄り添う花は美しい

東京都 清原悦子

長電話 悪口ばかりいやになり

あつさりと引き受けたけど荷が重い

佐賀県 木屋広一

欲しいけど我慢はしこの友は減り

不意に病む妻の介護にうろたえる

米子市 堀江美月

精一杯咲いて他人に盗まれる

結び目をしっかり守る母の紐

愛媛県 安野案山子

上り切った所に落とし穴がある

水道が止って水の有難さ

柏市 上鈴木春枝
片恋のノック気づいてくれますか
椅子取りのゲームに遠慮いりません

羽曳野市 安芸田泰子
インスタント女がおんな忘れそつ
年金を孫の笑顔に浚われる

鳥取県 藤山弘子
暗号を忘れ困ったことになり

兵庫県 中野とよ子
ウイニングがコンピューターへ届かない

石段を登って仁王と顔が合い
一杯も飲めぬ夫の膳淋し

大阪市 乾哲静
夕飯のおかず次第の内輪揉め

心配の種蒔くだけの老いとなる

鳥取市 杉本孝男
菜園で草との戦 負けそうだ

兵庫県 森脇和子
親不孝した悔しさが募りだす

空白へまだ一つある望み賭け
家柄で食っては行けぬ木を下りる

鳥取市 福永ひかり
出る杭を打つ金槌が錆びている

阿々大笑くったくのない人が好き

熊本県 岩切康子
ティッシュ一枚 洗濯物を困らせる
「お座り」へ従う犬に裏がある

豊中市 みき わきみ

塞翁の馬で余生を生きている
持家があり年金の暮しむき

岡山県 国米 きくゑ

逃げるのは下手片ちびの父の靴
六十路坂まだときめきのある出会い

米子市 服部 朗子

冗談がお互いにとぶバスツアー
挨拶は決めております兎のマネー

兵庫県 高見 末野

腹立つと余計に仕事夢中なり
初夏と言えまだ半袖を着られない

大阪府 原 美恵子

幸せを自覚しないでいる若さ
ビール一本 至福の刻の老姉妹

静岡市 中西 雅

老いてなお湯舟でなごむクラス会
健康を説いてた人が先に逝き

鳥取県 奥谷 彩子

昼の月 別れた人のこと想う
はつれ綴じ幸せ少しずつ溜める

和歌山県 村中悦男
職を去り野良に親しむ夕茜
乳の香のいっばいの孫抱きよせる

大阪市 中田 あい子

枯れすすき陽気な叔母の愛唱歌
北齋の大波が呼ぶ海の声

熊本県 増田 一乗

手に負えず人手頼んだ庭の草
ありがたさ年金ふえた知らせ来る

堺市 志田 千代

出陣式ウーロン茶でも燃えられる
蛇いちご赤の誘惑飢餓の頃

榎原市 西本 保夫

冗談が言えるナースは人妻か
知っている話題を知らぬふりで聞く

和歌山市 猪飼 あいや

童眼聞いて明るくなる未来
母の味 妹跡を継いでいる

羽曳野市 福田 悦子

大の字に寝れる我が家の四畳半
意地張らず暑さに白い旗を振る

東大阪市 松山 隆

首と腰 鬚は女性の伎芸天
肩書きのすつかりとれる時期を待ち

羽曳野市 川 田 晋
すらすらといけばいったでまた悩み
古希の身になおつきまとう自己嫌悪

豊中市 岸 田 知香子

思春期の心の傷が大きすぎ
くちなしのほのかな香り梅雨の闇

高槻市 執 行 稲 子

一病と仲よく暮らす友がいる
来る 来ない 花占いに日が昏れる

交野市 山 川 日出子

チンしてね父の日料理娘から
悪知恵で青い地球が黒くなる

池田市 木 村 一 笛

土砂降りのをがれて入る屋台酒
ガス騒動 静かな日本何時戻る

出雲市 川 島 和歌子

母の日にアジサイの花贈られる
あまりにも信じた道が悲しすぎ

松江市 佐野木 み え

ハイビスカスあの日も咲いていたら
形から入って茶の湯 茶の心

松江市 浦 辺 静 江

朝の水五臓六腑に活を入れ
水やれば庭の草木がしゃべり出す

羽曳野市 西 村 りつえ
葉桜も見ないで入るひばり館
母逝って初めて夢で会いました

箕面市 木 村 天 弘

別姓は嫌いあなたのものだから
愛犬が散歩嫌いを連れて出る

米子市 木 村 春 枝

坂の数 幾度越えた私小説
ぎりぎりを母の袋に救われる

高槻市 古 見 萬 勇

OB会 先輩面が多過ぎる
祭神はどなたか知らず手を合わせ

貝塚市 池 田 寿美子

もう少しお待ちなさいと花時計
エッセイにやすらぎ貰う雨の午後

今治市 渡 辺 南 奉

電話鳴るドキンとさせる傷がある
車座はみんな味方と限らない

米子市 小 塩 智加恵

夫無口 一人芝居の幕があく
あきらめをつければこの世住みやすい

富田林市 欄 智 久

木蓮が咲いて見上げている孤高
浮草は水の流れに逆らわず

和歌山市 山 裾 かず子
限りある命悔やまぬように生き
病院を出れば少しは若ができる

出雲市 中 村 トク子
母の日に亡母の笑顔を想い出す
家庭円満いつも聞こえる笑い声

大阪市 平 井 露 芳
ポアしたとサリン殺しも悪びれず
府議会は知事の名前で先ずはもめ

河内長野市 印 藤 智 子
夕食の時間が早い定年後
赤いばら棘があるのをすぐ忘れ

高槻市 江 原 秀 夫
針先を見せずじわじわ我を通す
降り止まぬ雨にテレビの空しい画

岡山県 土 居 ひでの
駅ができお通焦れる武蔵像
桜散る痛み分け合う姉弟

千葉県 大 川 晚 翠
コンサート賽銭入れて只で聞く
都市博に無党派層の天の声

寝屋川市 坂 上 高 栄
いとおしや命を刻む我が鼓動
咲き上るラジオラスにある序列

唐津市 松 本 圭
一年の命の鮎を食べている
逢うたびに貴女がくれる傷がふえ

和歌山市 和 田 美寿子
相槌をうちつつ思う外の事
老いたとて口紅だけをポイントに

島根県 森 茂 美
小さい家 座ったままで用が足せ
ピヤガーテン小さな贅を妻として

羽曳野市 山 本 たけし
肩書も何処へ忘れた縄のれん
日日の糧やと凌いでいる平和

寝屋川市 太 田 とし子
ゴミの山 昔むかしが泣きじやくる
あじさいの色が変った変化球

唐津市 入 江 喜久亭
家庭内離婚の妻の背が寒い
喜怒哀楽 話し相手のない独り

唐津市 江 川 青 琴
五月晴 行楽よりも布団干し
芸のない私は笑い美人です

泉佐野市 大 工 静 子
人事部の辞令 仏壇よろこばし
昇進へ合せ鏡や今日の顔

福岡県 本田忠男
捨てられるゴミの定めか老いひとり
赤提灯 今日素通り妻がいる

香川県 田中ふみ

間の悪い時にかぎって客がくる
本心が掴めぬままに幕が下り

姫路市 服部一典

払い下げパンスト穿いた粗大ゴミ
自慢した過ぎたる妻に手をやかれ

鳥取県 高尾京

健やかな孫のアルバム幸おもう
母さんへ私しあわせとの便り

池田市 藤井計光

月並みな出会いにのった赤い糸
鶯が朝の目覚めを早めさせ

姫路市 福島姫女

桜餅 亡母の好物葉もよばれ
湯布院の湯が恋しくて旅プラン

岡山県 福原悦子

簡単な答えに釘がさしてある
返り血を浴びない距離に立っている

兵庫県 玉田三重

味方にも少しやさしい敵がいる
つまみ食いするから傷が深くなり

豊中市 上田圭津子
花びらの酢の物楽し椿島
老犬とほほえみあつて花吹雪

出雲市 西尾和子

ペパーミントの香りでこころよい眠り
母の日のお礼に送る「コシヒカリ」

出雲市 荒木恵美子

あの世にもこの世にもいる好きな人
ボケはじめ旅の刺激でぶつとばそ

愛媛県 中居善信

臆病な母で何時でも遠慮する
砂糖すこし嘗めて男の骨が抜け

豊中市 藤原桂子

質屋では値打ちの出ない指輪です
月給に皮肉も汗も入ってる

岸和田市 亀井皎月

危険です安全と言う企業名
蒔いた種よりこぼれ種よく育ち

(前月分) 高槻市 小林一閑

頑張るといふのは選挙期間だけ
核の滓 隠れて帰る大航海

花の名は知らずその美を愛でるのみ
大阪の新名所さえまだ行けず

沙湖抄

小出智子選

み仏のうしろ姿も見て帰る
 サイダーの気がぬけて贗作の夏
 柱時計ずっと春闘続けてる
 芋掘りの子は感動をしばし留め
 金魚の夏長し短し兄いもと
 コップ酒蠅が一匹はなれない
 暮らし良い街だと他所の人が言う
 語り部の雲 八月を忘れない
 美しき人美しき手話の指
 いい壺と言われたからの置きどころ
 トンボの目なくしたものを探している
 鼻の低いところも利用して生きる
 目隠しの指の間を覗く鬼
 よそからは見えて夫婦に見えぬもの
 娘のツンとすました肩に自立心
 お隣の猫ともお付き合いをして
 ささくれた指と未来の話など
 ここは危険にんげんが棲んでいます
 一言半句求めて旅が果てしない
 鈴つけてみてお互いを確かめる

米子市 林 荒介
 西宮市 岡本 道子
 堺市 谷平 照
 八尾市 吉村 一風
 吹田市 山本希久子
 松原市 小池しげお
 出雲市 竹治ちかし
 名古屋市 藤井 高子
 八尾市 鷺見 章
 堺市 宮本かりん
 鳥取県 新家 完司
 富田林市 池 森子
 米子市 小西 雄々
 旭川市 朝倉 大柏
 東京都 山口 新子
 寝屋川市 籠島 恵子
 綾部市 藤田 芳郎
 尼崎市 田中 薫
 和歌山市 桜井 千秀
 芦屋市 黒田 能子

言いたいことたくさんあつて草伸びる
 幼名をまだ覚えてるハンモック
 思い出がちくちく痛い剃り残し
 ポーナスの裏を偏西風が吹く
 梅漬ける一粒ずつにありがとう
 酸漿熟れて昔のような母と娘に
 鉛筆削りできょうも神経を削る
 握りこぶしは風をつかんで放さない
 本心を打ちあけてから水が澄み
 捨てるものいっぱい 捨つものいっぱい
 森林浴殻を破つてみたくなり
 びわ湖の水位高くても低くても
 税務署を興奮させるビルを建て
 よく家を空ける隣を不安がり
 濡れながら妻と異なる方見てる
 ごった煮の野菜が美味い三りんぼ
 点と線結ぶと残りすくなくなり
 掌にこぼさぬように君のこと
 風呂桶にちちの機嫌が浮いている
 トンネルを抜け出せないでいる眼鏡
 憎しみが融ける淋しい絵になった
 風船が遊び疲れた部屋にある
 好事魔が多く整理は遅々として
 さくらんぼにやさしい言葉かけられる
 花冷えに大きい面をする炬燵
 わたしのこと褒めているひと腐すひと

島根県 松本 文子
 堺市 桜沢あかり
 富田林市 藤田 泰子
 鳥取県 鈴木 公弘
 八尾市 高橋 夕花
 米子市 政岡日枝子
 宝塚市 永田 暁風
 鳥取市 小谷美ツ千
 豊中市 辻川 慶子
 和歌山市 福井 桂香
 貝塚市 池田寿美子
 寝屋川市 江口 度
 鳥取市 武田 帆雀
 青森市 工藤 甲吉
 青森県 田中 叶
 尼崎市 春城武庫坊
 八尾市 宮西 弥生
 米子市 木村富美子
 米子市 林 瑞枝
 西宮市 西口いわゑ
 和歌山市 田中 輝子
 出雲市 吉岡きみえ
 大阪市 津守 柳伸
 和歌山市 野々 圭子
 黒石市 相馬 一花
 鳥取市 西原 艶子

真実はきつと嘘より嘘っぽい
 冷蔵庫の中にも母と娘の絆
 雅号でも着いた最初の年賀状
 花好きを素通りさせぬ花の市
 貧しさの色とは遠い麦のめし
 褒め言葉少し危険な匂いする
 目立たない彩で落ち着く群れの中
 群衆の中のひとりの無責任
 松枯れてどくだみは殖えつづけ
 懐かしい郷土誌時を止めて読む
 野の花に素焼きの壺がよく似合う
 対岸の虹はここから見ていよう
 神仏を抱いて気強い母の四肢
 杖ついて人の温みをしみじみと
 誰とも仲よくなれる花の下
 いい夢をみるおまじないして眠る
 アイデアは何処も同じ水車小屋
 誰が為の銀鱗かなしさつき鮎
 美しい衣で煩惱を包む
 風駘蕩情けうつろい易きかな
 茶柱をそつと懐紙に包む朝
 亡父の書架 命刻んだ跡がある
 おこがましいが地球の未来案じられ
 回り道回り道して終の章
 心経を座右に置いて揺れ動き
 遠慮する人ではないと知っている

大阪市 西出 楓楽
 尼崎市 春城 年代
 弘前市 中山 雅城
 宿毛市 岡村 千鳥
 米子市 石垣 花子
 静岡市 小木 久子
 鳥取市 植田 一京
 今治市 月原 宵明
 豊中市 安藤寿美子
 鳥取県 上田 俊路
 豊中市 田中 正坊
 米子市 青戸 田鶴
 唐津市 田口 虹汀
 池田市 岡本吉太郎
 羽曳野市 田中 透太
 寝屋川市 森 茜
 愛媛県 中居 善信
 吹田市 栗谷 春子
 鳥取県 乾 隆風
 鳥取県 江原とみお
 和歌山市 山裾かず子
 西宮市 奥田みつ子
 米子市 光井 玲子
 大阪市 池田 一男
 寝屋川市 堀江 光子
 藤井寺市 高田美代子

うっかりと傘寿になつてうろたえる
 モリハナエのエプロンで立つ台所
 つまずいた過去は喜劇にしておこう
 かすみ草今日は主役にしてあげる
 残り火を大事に守り辞書を引く
 矢印を逆に歩いた苦勞人
 咲く頃に来るよと母が種をまき
 やさしさをふと見せられてからの縁
 つながれた紐引きずつて家を出る
 苦にならん程度の嘘は赦し合う
 特攻の度胸を忘れそうになる
 お隣の猫が聞き耳たてている
 花や木をたくさん植えてひとり住む
 奉加帳右へならえをしておこう
 男には黙つて渡る橋がある
 つかまえておかなきや消えそな小さい幸
 ふくらませた夢しほませたのは風船
 折り紙を孫に教えて雨の守り
 おみくじにうなずく他人に言えぬ事
 風車 水子地蔵の風のいろ
 筋金入りのごつごつの手を持っている
 点滴の雫に余命計る日々
 退院をして神様と握手する
 ストレスを土産に替えて旅終る
 夕焼けが美しすぎる日の不安
 気配りもほどほどが良い箸枕

出雲市 園山多賀子
 和歌山市 堀畑 靖子
 高槻市 守先 伸子
 八尾市 大内 朝子
 姫路市 中塚 遊峰
 和歌山市 池永 正雄
 今治市 矢野 佳雲
 鳥取県 石谷美恵子
 米子市 鹿島 繭
 和歌山市 宮口 克子
 鳥取県 土橋 螢
 海南市 三宅 保州
 宝塚市 丸山よし津
 和歌山市 細川 稚代
 岡山県 小林 妻子
 姫路市 小林 保水
 西宮市 牧湖富喜子
 今治市 野村 清美
 和泉市 中川 楓
 弘前市 佐治千加子
 倉吉市 最上 和枝
 唐津市 山門 幸夫
 鳴門市 八木 芳水
 香川県 新川マサエ
 河内長野市 水谷 笙子
 和歌山市 山田 高夫

のほほんと来た訳でない五十年
 不器用ですが美人の妻をもっている
 春秋を刻みおうなの面に似る
 目から鱗落ちて迷いからさめる
 美しい仮説に酔うている短詩
 妻の座にあぐらをかいていた不覚
 五十年妻に尻尾が生えてきた
 むずかる子あやすようにはいかぬ夫
 高望みしているうちが華なのだ
 免許はないが米を作るといふ誇り
 たいていの嘘聞き流す昼の耳
 萎えそうでガッツポーズをして見せる
 コンバクト パチンと距離をまたつくる
 巨星墜ち心虚しい夫も病む(西尾葉先生)
 日々かわるあくことのない空の色
 父の倍生きても残すものがない
 名水を汲みにはるばる五十キロ
 早いけど山田に案山子立つ気配
 外人に古典の良さを教えられ
 呼び出してみる五十年前のボク
 贅沢はよそう地球が狂い出す
 嫁いだ娘を貸してもらった小旅行
 八百屋で春を見付けた菜の花和え
 希少価値我が家に嫁の低い腰
 夜爪切る叱ってくれるひともない
 ひたすらに頼みをかけているポスト

和歌山市 田中 みね
 鳥取県 橋本多哥由
 米子市 中井 ゆき
 和歌山市 山口三千子
 唐津市 久保 正剣
 和歌山市 津村 武春
 倉敷市 小野 克枝
 和歌山市 岩本美智子
 八尾市 村上ミツ子
 鳥取県 田村きみ子
 米子市 堀江 美月
 尼崎市 長浜 澄子
 吹田市 西岡 豊
 唐津市 山門 タミ
 枚方市 森本 節子
 岡山県 池田 半仙
 米子市 小塩智加恵
 唐津市 野田 旭恒
 唐津市 市丸 晴子
 岡山市 川端 柳子
 河内長野市 植村 喜代
 大阪市 稲本 凡子
 堺市 黒田 真砂
 静岡市 三浦 つね
 西宮市 門谷たず子
 守口市 結城 君子

亀が勝つ話を信じ母は生き
 飽きのこぬ味をおふくろ持つている
 盲点をやんわり突いたばらの刺
 ブレーキも小刻みに踏み保身術
 新世紀へ銀河鉄道走る夢
 来し方の人みな懐かしき今宵
 夜店の灯ひとときわ目立つ母娘連れ
 墓地をかう話へ老いの耳が向く
 原色に埋れて白が欲しくなる
 右下がり男の文字に芯がない
 ハンカチに好きな一会の人包む
 ランドセルきっちり見せる面構え
 苦勞話は背なの丸みにかくして
 気がかりを拭い切ろうと皿洗う
 丸い部屋四角に掃いて煙がられ
 声かけ合って励まし合って満ちている
 久し振り母の助言が射る

兵庫県 玉田 三重
 鳥取県 西川 和子
 寝屋川市 坂上 高栄
 岡山市 井上柳五郎
 大阪市 日阪 秋子
 八尾市 片上 英一
 奈良市 米田 恭昌
 岡山県 江口有一朗
 大阪市 神夏磯典子
 鳥取県 土橋 睦子
 和歌山県 中後 清史
 弘前市 一戸 ツネ
 岡山県 富坂 志重
 今治市 村上久美子
 倉吉市 野口 節子
 和歌山市 吉村さち子
 大阪府 澤田 和重

荒介さんの句。何気ない事が心に残り、何故み仏の後ろ姿を見たのか考えてみる。それは人間だからである。だが、それを一句にまとめることが出来るのは、作者の力だ。道子さんの句。贋作の罷り通ることへの批判と受け取れるが、サイターの気のぬけたようなものだとする手法が見事。「サイターの気がぬけて」「贋作の夏」と区切って読むことによつて、作者の思いが一層強く伝わってくる。照さんの句。柱時計もそうだったのかと今更に頷く。春闘は外で働く者だけでないことを気付かせてくれる。下五字を字余りになつても「続いている」とするの意味が強くなるのでは。一風さんの句。初めて芋掘りをする子供の驚きが手に取るように見える。

秀句鑑賞

—7月号から

西原 艶子

ことさらに難解な表現よりわかりやすく川柳眼のやり場、感性の豊かさを鑑賞したい。

クライマックスでポテトチップス食べる音

古久保 和子

観劇であろうか演奏会であろうか、作者は感動の頂上にいるのに、どこからかポリポリとスナックを食べる音がした。人間の本能である食欲と精神的な感動とを並べて人それぞれの差がおもしろい。

青空にシート励ます鯉轡

久保 まさお

私が西宮北口句会へ出席させていたのだのは五月。急行の車窓からまだ青いシートが点々と見えた。晴れた日の鯉轡はさぞ、みんなの励みになったことでしょう。

以心伝心嫌いな人に嫌われる

與田 明

いつかどこかで好かれれば好きになるとか、

それを互恵性の法則というなどと書いてあったのを思い出した。目に口に仕草に何となく好きも嫌いも出てしまうから怖い。

飼っている犬の尻尾に嘘はない

後藤 黎之助

犬を飼ってみるとよくわかる。犬は正直で仮面を被らない。作者は人間の嘘を嘆いてい

ると思う。

人間の罪の深さに海濁る

渡邊 伊津志

人ひとり生きていくために汚すものの多いこと。器・衣類・身体・汚物を洗い流している。遠く離れた海を知らず知らずに濁している

と理解したが、この海とはもつと広く言えば心のことも知れない。

妻という楔がとても効いている

山本 正光

楔の大きさは妻の存在感であり、愛情の深さではないかと思う。夫や姑の楔ではなく、妻の楔が効いていて、つつがなく日が巡るのであればそれでいいのでは。

頂上は冷たい風の吹くところ

藤田 泰子

頂上は四方八方からよく見える所、良くない面も良い面も隠せない。気をつけなければ欠点を暴く風が強く吹くかも知れない。

方程式 越えぬ男でつまらない

長浜 澄子

決ったことしかできない男。そう決めつけてしまつと可哀そうな氣もする。男はいつも立場と責任を思つて行動するらしい。

目立たない特技持つる落ちこぼれ

藤井 春子

大人も子供も、全く駄目な人間はいないもの。優秀だと評価されている人が満点とも限らない。いつかきつと芽吹くときが来る。

ただ一度主役になれるお葬式

藤 ふうこ

本当は、たびたび主役を演じておられたのだと思うが、老いていくとは主役を外れていくことのように考えてしまう。確かに真実味のある句であるが、もう一度でなく、まだまだ主役になろうと元氣に生きてほしい。

一匹のホタルが胸に棲んでいる

国米 きくゑ

ホタルの放つ光は、大きく明るいものではない。強く弱く光る小さな明りがふとところで動くとは、それは人を恋つ明りか、希望の灯か。貧乏性なのでメロンが熟れすぎる

原 美恵子

おいしいが高価なので食べないでおくとい

首香のむ

西出楓楽選

塩もコシヨウもわたしと遊ぶ夢を持つ

梅らつきよ漬かつて母の祭かな

譲られた席の温みがこそばゆい

梅雨になる楽しいことを考える

方向音痴 渦中の人になつていた

ちらかして便利このうえない机

天地無用に母の情けを詰めてくる

ときめきがあつて喜劇がまだ続く

花鉢 素直なところ受けとめる

野あさみの棘が守っている立場

操りの糸を人形たちで切る

紅さしてもさしても今日は水の顔

海に出て魚の頃の君に会う

初恋のリボンのような遠火花

魂に塩をまぶして引締める

春の風 花の心になつて吹く

やさしさへ少し傾斜をしたくなる

考える猫と人嫌いの女と

橋こえて春を探しに行った蝶

岡山市 川端 柳子

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 福本 英子

米子市 金山 夕子

大阪市 神夏磯典子

吹田市 茂見よ志子

岡山市 矢内寿恵子

出雲市 園山多賀子

豊中市 辻川 慶子

和歌山市 古久保和子

米子市 政岡日枝子

弘前市 肥後和香子

米子市 林 風子

米子市 新 正子

和歌山市 山根めぐみ

河内長野市 植村 喜代

鳥取市 西原 艶子

和歌山市 木本 朱夏

熊本市 永田 俊子

物憂きは緑の風も寄せつけず

どうしても自由型しか泳げない

謝るより先に言い訳してしまう

プライドを捨てたら棄効してきた

忘れてるふりも小さな思いやり

ノーと言える知識を詰める雨の午後

花明かりとともきれいな裏話

山盛りの洗濯を干し主婦に足る

あらいやだ年確かめる指折って

謎めいた片言でよい老夫婦

従う者なくとも主張曲げられぬ

抜け切れぬ甘さ挫折で悟らせる

蟻の列ポケットベルは持つて居ず

大望を抱いてる腕が痛くなる

突然の波へ男の視野借りる

宇宙抱くように初孫抱いている

お向いの犬が留守番してくれる

目に青葉 仁王走つてみたかろう

傷口に塩をすりこむ愛もある

コーヒー二杯 仏さんと飲む

出直しの風を拳に溜めている

なれそめはそつとベールをかけよう

子と夢を描く画布なればまっ白に

分身は虹のむこうで待っている

これ以上聞かないことにして平和

大阪市 鍛原 千里

富田林市 藤田 泰子

大阪市 本間満津子

米子市 小塩智加恵

和歌山市 北山 好笑

貝塚市 池田寿美子

岡山市 山本 玉恵

鳥取県 石谷美恵子

鳥取県 田村きみ子

守口市 結城 君子

大阪市 町田 達子

芦屋市 黒田 能子

富田林市 片岡智恵子

八尾市 村上ミツ子

和歌山県 小倉 アサ

鳥取県 松本 文子

茨木市 堀 良江

西宮市 西口いわゑ

西宮市 奥田みつ子

豊中市 安藤寿美子

鳥取県 小谷美ツ千

羽曳野市 徳山みつこ

西宮市 門谷たず子

寝屋川市 籠島 恵子

和歌山市 細川 稚代

非常袋 地震の不安入れたまま
 プライドが妬いてるなんて言わせない
 なるほどな喜劇に涙ふいてます
 したたかな鏡と抜けてきた月日
 復興はまだあじさいは重く咲く
 騙されてあげよか月が光つてる
 死角から鬼がやさしい笛を吹く
 湯上りの鏡が同情して曇る
 紫陽花は雨の情けを知っている
 新築で殺せぬ腹の虫が居る
 白黒を暈して柔らかい風と住む
 青い空わたし詩人になれそうな
 途中下車できぬ切符でつつ走る
 改めて人はいろいろだと思ふ
 紫陽花が心変りを悔いている
 ご近所の噂がこわい風媒花
 舞台裏きな臭い刃がたむろする
 凭れない背中がほしい遠花火
 見る人が変れば違う味を出す
 死にざまはこうあれかしと茜雲
 翔ぶことを真似ては疵を深くする
 愛一つ消すこんなにもエネルギー
 淡々と届く手紙に距離がある
 非常口に近い方にある安堵
 いきさつをきいても誤解まだとけぬ

大阪市 日阪 秋子
 羽曳野市 芦田 絢子
 大阪市 藤田頂留子
 今治市 野村 京子
 宝塚市 丸山よし津
 岡山県 富坂 志重
 徳島県 安宅美代子
 兵庫県 北川とみ子
 兵庫県 三浦千津子
 大阪市 前田 一枝
 鳥取市 野口 節子
 倉吉市 羽津川公乃
 鳥取県 津守 柳伸
 大阪市 田中 みね
 和歌山市 佐野木みえ
 松江市 高田美代子
 藤井寺市 安食 友子
 松江市 中村 淳子
 大阪市 権代 康女
 鳥取県 神原 文
 堺市 木村富美子
 米子市 宮口 克子
 和歌山市 山口 新子
 東京都 山口 弥生
 八尾市 宮西 弥生
 米子市 中井 ゆき

傷あとをやさしく舐める夜の雨
 主婦の口 積もる話がみな捌ける
 未練のこして小指の傷がじんじんと
 根回しが効きすぎスパイ刃がたたぬ
 順番を待つ人垣が長すぎる
 団塊の世代未来図描き直す
 胸中は南無阿弥陀仏 離着陸
 待ち時間たっぶり持って通院す
 こうなれば打つ手などない顔のシワ
 相談は後へ回して薔薇を賞め
 人の香に酔って私も生きている
 これ以上みるのは辛い延長戦
 網を張りくも悠々と敵を待つ
 庫裡落成にわか善女になりました
 胸の中の鬼が修飾語で述べる

米子市 林 瑞枝
 寝屋川市 宮崎 菜月
 和歌山市 岩本美智子
 大阪市 稲本 凡子
 米子市 寺沢みど里
 米子市 堀江 美月
 大阪市 大河未佐子
 大坂市 春城 年代
 尼崎市 堀畑 靖子
 和歌山市 土居ひでの
 岡山県 太田とし子
 寝屋川市 栗谷 春子
 吹田市 浜本 ちよ
 唐津市 福原 悦子
 岡山県 小西五十鈴
 鳥取県

一句目―川柳のたのしきここにあり。塩、コシヨウがわたしと遊んでもらいがっている…この自由な発想に率直に従っておこう。二句目―生きる喜びを、日常の些事の中に見つける人は幸せである。梅、らっきよが漬かったことを無上の幸せとする「母」の人生までくっきり見える。三句目―乗り物などで席をはじめて譲られた時、かなりシヨックを受けるだろう。それを甘受するにはまだ若い作者の、戸惑いと人の好意へのうれしさが「こそばゆい」で端的にあらわされている。四句目―日々の暮しの上で大切な心の持ち方を教えてくれている。それは、梅雨イコールうつつしい、の先入観を捨てることに始まる。

特集 阪神大震災百句

平成七年四・五・六月号
『川柳塔』編集部 編

一月十七日の阪神大震災は、数知れぬ多くの川柳を生みました。今回は同人に限らず、本誌の川柳

塔・自選集・水煙抄・澎湖抄・苗香の花の各欄に掲載されたものから一人一句で選び出しました。

陽は昇る橋は架かっている筈だ

亀岡 哲子

そして神戸あとの言葉が出てこない

片上 英一

五十年活断層と知らず住む

滝北 博史

瓦礫と化したのか一盛りの骨よ

池 森子

震災をそつなく糧にする政治

榎本 吐来

仮設住宅ゴルフ場には建てず

岡井やすお

大地震 所詮地球は仮住い

中田 純次

被災地へ送る小さな灯をひとつ

田辺 灸六

主の祈り光明真言みなとなえ

安藤寿美子

五千人バベルの塔の下敷きに

小砂 白汀

価値観もひっくり返す大地震

西出 楓楽

寒月やチチハハシスという地割れ

鈴木 公弘

改めて命いただく猫共に

林 はつ絵

十大ニュースのつらい第一位が出来た

都倉 求芽

悪夢なら覚めよ神戸が炎えている

両川 洋々

地獄絵のコーベ見下ろす風見鶏

板東 倫子

被災地に弟がいる気の重さ

春木圭一郎

視察者はきれいに髭をそっている

榊本 路児

無くなった昔 瓦礫に立ち尽くす

瀬戸まさよ

つくづく無力 人一倍に思っても

本間満津子

余震なお避難テントへ雪が舞う

吉川 寿美

あの神戸あの三宮アーケード

岩津ようじ

真つ暗な中 呼び合っている家族
弄つた自然にしつべ返しされ

電話口ポトリポトリと情けふる
千年のサイクル砂時計をかえす

がれきから転がる老母の骨拾う
大時計 恐怖の時を指し続け

道ひとつへだてただけの運不運
ポランテア背筋のどれも伸びている

抱き合つて声掛けあつて命あり
ポランテアのつもり震災画報買う

半壊のいのちひとつを抱いて逃げ
余震予告 心の揺れがおさまらぬ

この鳩は神戸逃れてきた鳩か
犬が鳴く今夜も余震ありそうな

余震あるこたつに家族まるく寝る
原発に不安消えない大地震

生きていた事が不思議と友の声
棚など倒れる中に震撼する いのち

断水の蛇口を囲む疲れた目
表現のさまざま被災地の焚火

黒川 紫香

茂見よ志子

山本 義子

吉田あずき

佐々木鳳笙

山下美津留

古野 ひで

榎山 隆

黒田 能子

松川 杜的

湊 修水

軸丸 勝巳

芦田 絢子

和田 和風

向井 泰子

河原崎礼子

山口ふさ子

永田 暁風

春城武庫坊

春城 年代

冬の廃墟に死者たちの長い行列

亡き友が余震の度に呼ぶような

二月十七日シート真つ白に干す

震災が生きる力を砕きしか

赤ちゃんを囲む顔あり仮設風呂

地震から妻が意外な事を言う

「生きてます」その電話が通じない

地震以後日記白紙になつている

生と死を瞬時に分けし震度七

倒壊のただ茫然と貝になる

地震から独り暮しの夜が長い

激震が話題 病棟の長廊下

被災地を励ますように桜咲く

被災地の友の背中が丸くなり

余震待つわけではないが着ぶくれて

活断層 猫も杓子も口ずさみ

嗚呼とひとこと被災地から帰る

避難所にとりのこされるこわい夢

ポランテア彼も廊下で寝ると言う

春一番青いシートの屋根が飛ぶ

田中 薫

奥田みつ子

古川喜美子

田中 正坊

近藤 豊子

江口 明光

山口 美穂

辻川 慶子

岡本吉太郎

菊池トミエ

吉田 笑女

久家代仕男

西田柳宏子

松永 会美

飯西ミサヲ

藤井 計

倉垣 恵美

木村貴代子

藤井 千年

川原 章久

花花に見送られての仮住居

救援隊の男の汗を写すべし

親切を貰う電話が鳴りつづく

手も足も出せず静かな災害地

生き延びた梅は待ってる春の声

日本列島ビックリ箱の上にある

地震火事 兵庫の人に雪が降る

地震以後 丸寝のくせがつかました

持ち出しリュック中味に迷う昨日今日

被災地へ真水十キロ徒歩で来る

被災者に苛酷な雪が舞いながら

豪邸の街でプレハブ生き残り

罹災した人の顔がつぎつぎ浮かぶ

ご破算は瓦礫の上に立ちつくす

呼びかけも返事も必死 瓦礫下

防災のリュック背負ってへたり込む

被災地の大阪弁に救われる

青テント飢えた話を語り継ぐ

梅が咲く活断層を抱いたまま

西口いわゑ

新家 完司

門谷たず子

秋元 てる

山崎 君子

森田 文

土橋 螢

さえきやえ

中野 樺子

藤井 正雄

行天 千代

丸山よし津

正本 水客

月原 宵明

瀧本八十八

印藤 智子

太田 藍子

宮崎 菜月

蘭田 瑛杏

被災地の土に溶けしか友の骨

震災の遺影虚しや卒業歌

地震から涙ぐむ日の多くなり

地滑りの隙間に雑草芽を伸ばし

ボタン雪 神戸は寒いことだろう

家も子もなくし槌音さえ空し

跡かたも無くなった土地天を向く

大地震 早速家具を置き替える

二日分地震で菓飲み忘れ

呆然自失ここがわが家か土握る

嗚呼神戸ポータタワーに灯がともる

立ち話やっぱり震度七のこと

神戸の空へみんな祈りの目をそそぐ

このひとと沈んでもよし大地震

活断層の上で開き直っている

災害地だんだん欲もとりもどす

逞しく地震に心磨かれる

揺れる揺れる恐怖の時間揺れやまず

伝形の仁王の突如叫ぶとき

丁坪サワ子

斉藤 劔

栗谷 春子

森下 愛論

植村 喜代

吐田 公一

牧洲富喜子

木村 春枝

小林 一閑

上田 柳影

小島 蘭幸

堀 良江

青戸 田鶴

三宅つえ子

宮西 弥生

石飛 水煙

北山 悟郎

榎谷 郁子

橘高 薫風

川柳とユーモア

川柳こぼれ話

田中正坊

大阪教育大学名誉教授の岸本末彦氏に「川柳の笑い」という一編がある。心理学者で、古川柳研究家ではないが、「柳多留」を材料にして、「笑いの条件発生的研究」を行つてゐる。ここでは笑いをもたらす条件を十七のボタンに分類し、それぞれに例句を示しているが、その中には語呂合せや駄洒落に類するものも含まれるので、現代にも通ずる笑いの佳句を紹介するとどめたい。

道問へば一度に動く田植笠

おしまひとことわつて子は箸をおき

男の子はだかにするつつかまらず

通りぬけ無用で通りぬけが知れ

憎い嫁可愛い孫をやたら生み

あがるなど言はぬばかりの年始帳

百両をほどけば人をしざらせる

ちくはくの顔は貰つた棧敷なり

ねかす子をあやしてていしゆしかられる

土用干し隣の嫁は美しき

かつて『川柳雑誌』『川柳塔』を通じて、

川柳に関する論考を多く発表し、後に川柳随筆・句集『聴診器』に収録した北川春巢氏に

「ユーモア特集」がある。ここでも古川柳に

ついて触れているが、主として現代川柳を素材にしてユーモア句に検討を加えている。こ

の中で注目されるのは、川柳におけるユーモアの要素の一つとして「比喩」を挙げている

ことで、次に例句を紹介したい。

〈直喩の句〉

大波の打ち寄すようにフラダンス 暁舟

来客へギョウザのように子は並び 一栄

末っ子のように朝顔秋に咲き 若芽

〈隠喩の句〉

眼鏡屋は鬚雲ほど並べたり 薫風

当選にバッタの姿思えかし 路郎

遠き国恋つるか象のふりやまず 千梢

〈提喩の句〉

飲む話あっち向いてる間にきまり 春巢

三味線が音痴の前へ来て座り 静升

サインコサインそろそろ親に口答え 不二

〈擬声・擬態語の句〉

ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる 豆秋

踏切はジンカジンカと夕焼ける 水客

親おろろおろろ受験の日がせまり 生々庵

〈擬人法の句〉

ボストンが先に席とる一人旅 鉄舟

仁王さんあぐらをかいてみようなり 多久志

しなびても土筆袴はつけていた 一瓢

ところで最近、ユーモア句がとみに少なくなつたと言われる。『番傘』誌にかつて連載

された「川柳作法」で亀山恭太氏は、「類題別番傘川柳一万句集」（昭和三十八年刊）に

は、どの頁を開いてもユーモア句が多い。それと比較して二十年後に出された「続類題別

番傘一万句集」では、その少なさにおどろかされる。喜劇を悲劇よりも一段低いものと見

るのと同じの川柳家の間違つた「背伸び」、

つまり川柳界全体の傾向が「笑いの句」を抹

殺する方向に進んできた」と述べている。

これをそのまま肯定するわけではないが、

『川柳塔』を含めて最近の柳誌に掲載される

作品に、ユーモア句が少なくなつたことは事

実である。かつて麻生路郎は、「世相を反映

する川柳に可笑味が減つた」ということは、世

相が笑えない、可笑味のないものになつてい

るからであらう。笑えない世相に可笑味の句

を作れというのはムリという人達があるかも知

れぬが、同じ事象に対してでも明るい見方

をすれば可笑味の句を作ることでもできるであ

らう」と説いている。

雷

稲葉冬葉選



邪宗から裂ける雷 人の子か
 すぐに怒るので雷の名を貰い
 核家族雷オヤジ死語にする
 雷のような軒に眠い朝
 稲光 透ける私のあばら骨
 雷鳴がロマンの幕を開けてくれ
 速雷に少年野球迷つてる
 雷を居酒屋さんの椅子で大きく
 爺ちゃんの雷だから怖くない
 雷名の割に目立たぬお人柄
 速雷を人恋いながら聴いている
 軍歴に雷という駆逐艦
 雷を落す社長も人だった
 平等になつて気安く落とす雷
 避雷針の母が居るので怖くない
 雷でおどしタ立されて行き
 かみなりはもう落ちなくて首がとび
 稲光恋しいたのだと気付く
 速雷へ専あじさいがしおれてる
 雷が下から落ちる朝寝坊
 母ちゃんの雷様は朝落ちる
 雷を落とされてから好きになる

ツネ 宵明 あずま 一花 佳雲 鉄治 露児 とみお ひでの 高夫 めぐみ 新造 忠男 晋 志重 満秋 芳郎 英王子 清芳 雅城 正子

雷のようになりたい親父です
 雷鳴にびくともしい妻となり
 謎解けぬまま遠雷を聞いている
 春雷へどこかで犬が吠えている
 春雷へ少しあわてる貸衣袋
 雷を落とした父の丸い背な
 こみ入った話へ雷割つて入り
 春雷や別れ話があつた
 遠雷や昨日はきのうだと思つ
 踏み絵には耐えて雷には弱い
 雷を肩に感じてから微熱
 雷鳴へ変わらぬ妻の黙秘権
 雷が落ちそう僕の通信簿
 雷の効き目はとうに消えている
 うちの雷ビール一本あればよい

圭一郎 保州 一風 よしみ 美代子 俊子 寿美 雄々 たず子 春枝 高明 ルイ子 照 高栄 艶子 とし子 洋 正剣 勝 愛論 森下

外 国

鈴木公弘選



外国に出て日本がよく解り
 外国へ翔んで行きたいシャボン玉
 外国の失敗談が受けている
 外国の素材でつくる母の味
 舶来をまつて心病んでいる
 外人に通じぬ英語だけ覚え
 外国を身近に思ふポランテア
 ジーンズで海外へ行くハネムーン
 アメリカが何を言おうと譲れない
 海外はいや戦傷に結びつく
 外国へ行くと日本人になる
 オーロラに故郷を恋うた虜囚の譜
 外国へ嫁をさがしに行つてくる
 外国の土産内地に着いて買い
 日本人だけに通じる外国語
 外国と思つていないグアム ハワイ
 外国へ行くと目覚める祖国愛
 外国が自国に戻る百年目
 助っ人を頼りにしてるプロ野球
 梅干とこんぶ忘れぬパスポート
 外国の大豆で作る冷や奴
 大空は地球の裏も見てるだろ

有一朗 雄々 愛論 黎之助 鉄治 しげお 高栄 通彦 義男 南奉 保州 重人 圭一郎 美子 高夫 新造 あずま 正剣 武春 一風 清芳 タミ

集 路

外国の戦い余波が押し寄せる
日本語は訛り五ヶ国語を喋り
外国へお伴し行く正露丸
外人に旨いすし屋へ誘われる
ビードロを吹けば異国の風匂う
外国の仏に会いに行つてくる
メイドイン外国並ぶ応接間
外国に住んで日本の有難き
外国語混じらぬ会話してみたい
外国の看板無視をする老舗
お隣に外国人がいる暮し
地震ない国を探しているのです
地球儀の任地をたどる母の指
パスポート 今度はどこへ老い豊か
外国でノーと言えない日本人

典子
陶美代子
一花
正雄
よしみ
螢
可住
英子
剛治
京子
富喜子
希久子
たず子
よし津
旋風

外国はお土産買いに往くところ
外国にすっかり監視されている
外国をいつぱりつめた市場かご
舶来の服が田舎に干してある
ハワイまで肌をこがしに行くおしゃれ
人
わたしには箱根の先は外国だ
地
見えている島影に要るパスポート
天
外国の学校を出た駄菓子やさん
軸
背伸びして見る外国は美しい

幸夫
次男
寿美
三重
保夫
正子
保夫

江原とみお

過ぎる

榎本吐来選



百菜の長も過ぎると業をする
一言が過ぎて壊れた隣の塀
一時間過ぎて動かぬ時計
年金へ荷が重過ぎる寄進帳
言い過ぎてからのお酒が苦くなる
過ぎたことは忘れなさいと他人さま
ご機嫌の駄弁一駅乗り過ごし
叱り過ぎ寝顔にそつと詫びておく
出来過ぎた妻は冷たいプロンズ像
反抗期父の意見がくどすぎる
遊び過ぎ歩幅小さくなる帰宅
兄嫁が出て過ぎて見合ばかりする
やりすぎは言うまい若い勇み足
私には過ぎた妻だと友は言う
悲しみへ事務的過ぎる公益社
喋り過ぎる大黒柱頼りない
メロドラマ見過ぎた妻に誤解され
過ぎ去ればみんな許せることばかり
一言が過ぎて独りで飲む地酒
世話好きの親父肩書多すぎる
二十四時過ぎて頭が冴えてくる
言い過ぎたことをすくう網がない

あきら
サワ子
庸佑
清史
とみお
たもつ
三重
一齋
ツネ
重人
正雄
しげお
佳雲
一風
洋
晋
一花
通彦
恭昌
柳弘
朝子

過ぎたるも足りぬも料理許されず
飲みすぎへ医師は妻から処方箋
過ぎた日のいくさ忘れぬ原爆忌
賞味期限過ぎる手前にある妙味
通り雨過ぎてポツンと女傘
ふるりの駅特急が通過する
横綱の笑顔は過ぎぬ方がよい
ゆつくりと過ぎる時間のある若さ
定年の挨拶大過なしばかり
物分かり良過ぎて男軽くなる
情報が過ぎて真実見失う
汽車ポッポ喜寿も傘寿も過ぎました
過去はみな美しくなる忌の回り
婚期また過ぎる娘の登山靴
過去ばかり自慢さびしい日向ぼこ

あずき
みつこ
ひで
富喜子
希久子
春枝
英千子
英子
宵明
俊路
ちかし
たず子
正剣
南奉
潮華
洞庵
寿美
志洋
鉄治
芳郎
和子

良妻で賢母で少しうとましい
言い過ぎた悔い老眼鏡を拭いている
枕の下を今日が静かに過ぎてゆく
出来過ぎた美談で飾る立志伝
寝ぬ過ぎた天狗の鼻を持てあます
人
塾へ行く靴へ分母大き過ぎ
地
過去言わぬ老母から学ぶ躰系
天
出来過ぎる妻が持ってた般若面
軸
過ぎ去った日々へ無口な般若湯
小西雄々

初歩教室

題一痛い

吉岡美房

川柳は人間としての情感を表現するものです。そこで一句に仕上げる場合、どのような表現にするかを考えて、この部分は漢字にするか、ひらがなにするかというようなところまで検討してほしいものです。

それでは添削句から発表します。

優しさが痛くなるほど胸に染む

三津子

(優しさにふるえる胸が痛くなる)

名曲を聴くと痛さが逃げて行く

孝男

(ショパン聴く心の痛み消したくて)

負の痛み心の隅に残ってる

あいや

(胸底の恋の疼きがいじらしい)

痛いと言わぬが祈り深くなる

志重

(この歳で人の痛みが見えてくる)

執念が痛みしつかり抱いたまま

行子

(失恋の痛みはずつと抱いたまま)

懐しむ湖畔の便り胸痛む

郁子

痛い目にあわな内恋やめる

瑠美子

(あきらめた恋の傷痕痛すぎる)

人妻へ痛い目にあうバラの花

一典

(人妻に贈ったバラにある痛み)

耳痛いとこに友は針を刺す

三重

(耳痛い意見親友なればこそ)

耳が痛い忠告友よありがと

ミツ子

(忠告は耳に痛いがありがたい)

頭痛の種つくる子もあり子沢山

美子

(子沢山頭痛の種も混ってる)

家族です痛み分け合い暮す日々

美寿子

(家中が痛みを耐える二浪中)

孫ころび痛いの痛いのとんで行け

日出子

(孫にまだ効いた痛いのとんで行け)

膝の砂痛い痛いとおつてる

日静子

(痛くても一人遊んで泣かぬ孫)

一言の痛みに堪えて今がある

高栄

(いろいろな痛み女を堪えて来た)

痛いところさりげなく突く妻の口

太郎

(痛いとこ掴んだらしい妻の口)

痛み分けそんな言葉で父さすとす

方子

(痛み分けそんな解決策もあり)

五十年寄り添い痛み分け合って

秀夫

(痛み分け合って寄り添い五十年)

絢子

痛くない腹は早目に見せておく

玲子

(痛くない腹だすつかり見せてやる)

基仇の知るや知らずや痛い土地

隆

(痛い石打たずにほしい基を覗む)

角番にこの一番は痛い星

辰男

(角番を賭けた一番痛い負け)

九回裏痛いエラーで敗けになる

侑里

(九回のエラーが痛い負け試合)

手で合図痛み知らせて歯の治療

潮華

(顔と手で痛み知らせる歯の治療)

注射針見れば余計に痛くなる

宏章

(見ただけで泣いてしまった注射針)

痛そうに顎め面して注射する

信敬

(注射針しかめつ面が腕を出し)

神経を揺さぶる様な歯の痛み

義男

(歯の痛さだった一晚耐えられず)

死にそうに痛い言うけど死にません

露芳

(死にそうに痛さと言って笑われる)

痛そうに包帯巻いて来る示談

武春

(痛そうに包帯巻いて来る示談)

痛い足さすって悟る齢かな

美恵子

(痛い足さすって齢だと思ふ)

母の腰痛みがなくて痛み出す

ふゆ子

(休みなく使った母の痛い腰)

正子

痛い膝お札めぐりはよいきげん 俊一

(御利益をもらう遍路の痛い膝) 痛くてもかゆくてもよし繩のれん とし子

(一日の痛みを癒やす繩のれん) 目に痛い白い土塀の続く道 旭

(古都の夏白い土塀が目に痛い) 痛かろと念仏唱え生き作り 一乗

(活け造り鯛の痛さを食べるエゴ) 思い切り叩いて金槌放り投げ ふさ子

(痛いやら情けないやら指叩く) 胸の傷深爪切ったよう痛み 八重子

(深爪で自業自得という痛さ) 深爪にこころの痛さ倍加する ツネ

(深爪が痛む心を深くする) 痛い目に逢ったの忘れけんか売る 姫女

(痛い目に逢っても懲りぬ子のけんか) 意地っ張り聞こえぬ振りの痛い耳 ふみえ

(耳痛い話聞こえぬ振りをする) 卵を産ませ昼夜を問わず痛ましい 和歌子

(眠らせず産ませて卵痛ましい) 相手にはわからん痛さする痛さ 一壺

(気の毒と言うが何にも痛くない) 出る杭で痛さ知りつつ顔を出す りつえ

(出る杭で打たれた痛さすぐ忘れ) 公約を守られ痛い大企業 真一

(セネコンに痛い公約守られる) 真一

頭が痛い先の見えない米作り 忠男

(米作り頭の痛い後継者) シベリヤの厳寒痛い父が云う タミ

(シベリアの冬の痛さを語る父) オウムさまこの頃痛いだらうなあ 多哥由

(ポアしても痛さ感じぬ黙秘権) 慰安婦の歴史が疼く恨の声 強一

(慰安婦の痛み消えない歴史持つ) 大正生れいやと言うほど痛さ知る トヨ子

(戦争の痛さの中で生きた青春) 背伸びして痛いとこが増えて来た 黎之助

(背伸びして繕い切れぬ痛み増え) 痛いとこついてくる老妻流石なり 幸夫

(痛いとこ握り老妻笑ってる) 人の痛み判る子供に育てなん ミツオ

(育てたい人の痛み判る子に) 着想・表現ともに立派な句 剛治

ママの顔見たら痛みがぶり返し 剛治

後ろ指他人の痛みわからない 君枝

思いやる心は痛み知ってから ルイ子

耐え抜いた痛みにもらう呱呱の声 文子

戦争の痛みしつかり語り継ぐ 君江

痛いとこ突かれて酒のハイピッチ 春枝

痛々し神戸の街の青シート 弘子

写真にも心の痛み写ってる 木管

釣り針の痛さ忘れて騙される 志華子

痛い目に合わねば足が抜けられぬ よしみ

一球が痛いサヨナラホームラン 勝巳

痛いとこ突く友情があたたかい 芳水

痛いほど抱いてもらった夢の中 三重子

医者嘔注射が痛くないなんて 照

痛くても野ばらの中にある蔵 かず子

バラを抱く棘あることを知りながら 淳子

退屈と言うほど痛み癒えてくる 幸枝

痛いとは意地でも言えぬ初年兵 半量

ぬるま湯の中で痛みを撫でている めぐみ

訳知りが無難に裁く痛み分け 幸次郎

母の顔見るまで耐えていた痛さ 惺静子

美しい花から貰う痛い刺 ますみ

野麦峠のあかぎれ今も語りつく さち子

痛いとこ突かれてからの具になる 鐘造

レントゲンでも見えない胸の痛み持つ 和子

頂点に佇って手痛い矢を受ける 彩子

抓られて愛を感じている痛さ 碧

石蹴って石の痛さが跳ね返り キョエ

私の句 原爆の痛み聞く耳持たぬ国

痛くない方程式で裁かれる

題「影」 8月15日締切(10月号発表)

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

お世直し

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

高槻川柳サークル卯の花 川島颯云児報

運命を信じドラマは悪役で
劇評に同じ思いが載る紙面
吊皮に主義も主張もない喜劇
疑いを阻む蟻一匹の劇
反論も謙虚に耳を傾ける
左右小首傾げるピカソ展
愛孤独どの花見ても傾斜する
気がゆるみ傾きかけた甘い罌
冬が続いて蝶はバイブルに傾く
傾きを少し残して病んでいる
愛しさ余り伎芸天の影傾く
不機嫌な風が約束違えさす
自動ドア誰にも機嫌よく開く
ほがらかな酒がからんできた機嫌
栄転に応える椅子が硬すぎる
姑看取る応え一言ありがとつ
激流に應えて小石丸くなる
今年こそ応えてほしいタイガース
受付の応待で知る社の気風

瀧小 龍志子 重人 澄子 庸佑 克治 マツエ よしみ 恵美子 節子 薫 ふみ メ女 スミ子 英一 静江 杜的 彰一 波留吉

友の死がこたえて煙草止めました
ハンドルを握る妻にはさからえず
さかさまに振つても知恵が出てこない
初孫に笑顔笑顔で日が暮れる
好きだから受話器をそつと置く
攻める道逃げ出す道は別にある
左遷地へアゲ名が先に赴任する
八起きまで辛抱したが芽が出ない
投げられた石をにつこり受けて置く
影が私を追い抜いて行く駅の雑踏
橋のない川を渡つて来た喜劇

川柳塔おっぱい吟社 木村あさら報

また一つ悔いを残して日が暮れる
一言が過ぎて過疎地へとばされる
勇氣ある一言左遷覚悟する
まだ少し残る元気を頼られる
ジャレて来る犬持て余す晴着の娘
オフクロの愛情味に染み透る
有れば買う愛生を測る物差しを
結局は自分に甘い匙加減
真に受けた今更ジョークとも言えず
ねぎらいの笑顔に湧いてくる元氣
カクレンボ見つけてほしい赤い靴
あの頃の充実の日々忘れられず
楽しんで余生を舞える踊りの輪
人間の心悲しやサリンまく
元氣なが歳だやっぱり案ぜられ
被災者の邪魔をしなでオウムさん

萬雲 東雲 艶子 芳子 獵杏 あきら 白溪子 しげお ひでお 颯云児 くに子 あきら マツエ いさむ 治延 よしみ 坊太郎 ひかり 放任 かおり はつ恵 ふみ マサエ 正雪 吟笑 文仙

川柳クラブわたの花 片上 英一報

花屋さん床に合う木の枝見つけ
一粒でも元氣のみなもと米食べる
若葉もゆる新任教師村に来る
雑草の気ままに生きる家の庭
春風へ気ままに絵の具塗りたくり
自立して気ままな孤独深くなる
盆栽に亡父の気ままな生きている
寝て起きて気ままに暮らす老いの幸
おなじ趣味もつと絆が生まれます
次の世は生まれたくない核世界
缶ビールぐらいでこない顔
佗しさに空缶けて夜の道
保険金掛けて安心買うてます
修羅の面はずせばやさし春の顔
おんな傘返しに行つてそれつきり
パラソルのいわくありげな待合せ
午前様のいわくありげな傘を干し
湯の町は名入り番傘下駄を借り
無人駅ポツリ一本忘れ傘
とつさんの大きな傘の下にいる
タンポポが風に頼んだ落下傘
約束のひとつ濡れますジャンプ傘

東大阪川柳会 森下 愛論報

南朝の悲話からつづく花曇り
色即是空人も桜も散るさため
人恋いの夜ほろほろさくら散る
シマ子 美津留 一風 幸枝 ますみ トシエ 友甫 朝子 龍 弘直 英一 まさと 春子 道子 明子 ミツ子 剛治 鬼遊 湖風 雅文 真柳

七度目の桜も散って母の忌よ

晩酌が過ぎて天狗の鼻が折れ

二度の職天狗の鼻が邪魔になり

小天狗がうようよよしてる趣味の会

訥弁のジョーク本音を覗かせる

紫陽花のジョークが分かるカメレオン

ジョークにもせつめいのいる堅い人

講演にジョークも入れてある人気

薄化粧幸せ続く主婦日記

いじらしい顔で待ってる美容院

化粧など無縁の子らの輝く目

一言も言わない妻がいじらしい

家庭円満嫁に文句は言わぬ主義

ダンブ街道不足言えない春の泥

文句一つ言わない人でもの足りぬ

サークル檉樓

小林 一夫報

結び目がゆるんで愛が逃げて行く

饒舌が更にストレス増やしてる

片目のタルマ耐える喜び知ってる

六月の雨結び目を確かめる

死んだふりして結び目をたしかめる

結んだりほどいたりして余生かな

結び目に小さな嘘をひそませる

五月閨女結びの解けやすし

洗い髪結ぶおみくじを結ぶ

口堅く結び少年無実なり

結び直してわたしの弦を張りつめる

梅干を食べてアルカリ性の脳

シマ子

孤舟

勝美

たもつ

恭昌

度

頂留子

東雲

愛論

文秋

みどり

信治

太一

章久

潔

お前の指はほろほろと海を結んでいる

ある夜 象とんぼ返りの夢をみる

岩美川柳会

羽津川公乃報

絵心を満開にして見る個展

左遷地でうれしかったり地酒飲む

孝行のつもりか地酒がUターン

レットルを変えて地酒がUターン

後座敷地酒で語る国なまり

旅の宿地酒のうまさ褒めて呑む

ご祝儀の地酒に酔ってチョイナチョイナ

サティアン地の酒はサリンかも知れぬ

レットルを貼らぬ地酒だ味が良い

地酒には土地の情けと香が染みる

祝い節唄うと地酒うまくなる

旅先で地酒の由来読んで買う

名水が地酒の味を引き立てる

町長も地酒に太鼓判を押す

地酒には脚の足らない蟹でよい

地酒からおもしろい猥談がでる

西宮北口川柳会

亀岡 哲子報

目の位置でわたしに合った道を選ぶ

プライドを捨てれば浮ぶ道もある

道草がいつか役立つこともある

瓦礫の道の草踏まれてもふまれても

封をしたはずの悪事がこぼれ出す

誕生日待たずワインの封を切る

封じ込めた哀しみ話せるようになる

薫

喜美子

照女

多哥由

公乃

喜与志

嘉津江

信子

陸子

忠良

孝男

美恵子

單車

きみ子

芳江

はるお

大漁

螢

返信の期待ふくらむ封を切る

陽なたほこ噂ばなしを干し上げる

裏の顔時々干して生き返る

横綱になるまでまわし干している

冷戦のふたりのシャツが干してある

干し草が匂い素朴な恋が燃え

一夜干し言いたいことがたんとある

干箱が揺れて海峡夕焼ける

甲羅干す亀と長寿の話など

広島の虫干し一冊ずつ増える

偽善者の中に入れず干されてる

優勝のユニホームだよ 高く干す

暗い世相にせめて花屋のはなの彩

B面に暗い世相の皺がある

退屈で困っていたとでもなされ

能子

美智子

みつ子

紫香

佳秋

曙蝶

重人

萬の

絹子

富喜子

江美

哲子

たず子

夜船

白浜子

佳句地十選

(7月号から)

高瀬 霜

石

変化球ばかりを投げて飢えている

B面にきれいな嘘を盛りつける

割り算が上手にできる第三者

悪知恵があれば貧乏してまへん

梯子から最後に父が降りてくる

運不運積んだドラマの終電車

勲一等苦を苦としない妻にやる

ふるりに続く線路がさびている

先頭に立つて青空見失う

すばらしい上役平のまま去り

森子

諷云児

正子

頂留子

蘭幸

ツネ

祥子

菊野

英子

博泉

紫陽花の嘘を許している花屋

身二つになるとやさしくなるレモン

いきいきとしてる女に誘われる

瓦礫より出て蒲公英の不返転

くす餅の冷えごろ伯母がやってくる

大空に魂干している詩人

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

忘郷へつゝの思いで里帰る

吾が郷に悲劇のこした江戸時代

郷は西太陽が沈んでばかり

運のいい人には高い椅子がある

うらやましあの天性の高貴さよ

やつと越えたハードルつきは又高い

高い塀なんでそんなに隠すのか

妻の値を高くかつてるよその男

風船がふわり地球を逃げだした

少しでも高く見せたいハイヒール

老いて今柱の傷が高くなる

天高く山彦消えて行ったきり

円高に世界情勢沈下させ

初心者は高い山ほど憧れる

人を許して女に空が高くなる

高い木に囲まれながら咲いている

門柱が高くて人を寄せつけぬ

ジェット飛ぶ空をめざした竹とんぼ

高い樹にのぼって神と話す

狼煙が高くのぼった胸さわぎ

高い高い父もわたしにしてくれた

鹿太

佐江子

透太

春蘭

義子

いわゑ

朗子

一夫

紫布

日枝子

紫布

春枝

八重子

和歌子

寿々子

弘子

すみゑ

花子

天雀

美月

千春

千代

荒介

瑞枝

ゆき

恵子

富美子

川柳塔唐津支部

久保 正刺報

伸び過ぎる青麦を踏む藁草履

あると言うその自意識に満足し

居眠りの法話は最後まで聴いた

盃を交わし心の戸を叩く

講演を聞いたび変わる健康法

母だけは信じています不肖の子

隠したり出したり孫の貯金箱

氷河期が来るまで続く戦種

梅雨上がり相合傘をしまいこみ

人生の終着駅へ並ぶ句碑

宴会は裸になると決めている

二本のナスへ支柱をそえてやり

老いたれどまだまだ登る坂の道

全国民オウムニュースにかたずのむ

久しぶり友が便りとかまほこと

ドラマ見て老いた証か涙ぐむ

下駄履きでまつ黒な土踏んで見る

可憐な花つけた雑草抜かず置く

修身と一緒に消えた聖女像

川柳たけはら

時広

一路報

小包でとびきりの恋届けたい

大嫌いガリガリけずる歯医者さん

森がある臉閉じても開いても

隊長を勤める孫に応援を

応援は孫の笑顔がある強み

カーブ頑張れ僕が応援しているよ

応援をされてもベース崩さない

その日から無口になって森に入る

夕やけて風も静かな森になる

四面楚歌森の掟は守らねば

とつとつと語る森も母も笑み

人間臭いなしは森でも笑み

妥協ぐせのカラスが森を出られない

春らんまん与作も浮かれ森を出る

ピノキオに逢いたくなくて森へ行く

父の森から母の泉を汲んでいる

吹かない庭の緋牡丹今盛り

日本海これから少し風いでくる

これからの日々は楽しく生きたいね

これからはゆつくりやれと父が言う

過去はかここれから先が本物だ

これからは儲けと思おう老いの春

これからはもう飲まないと言う男

これからは人生だよね五十路坂

これからは亀はゆつくり歩くだろ

三幸川柳教室

三宅

保州報

従っているから機嫌いい兜

従うより他ないだろう多数決

校則遵守画一的な女子に育て

従順な蝶の明日を描けない

奈落まで黒子に徹し従ってくる

意のままに従う駒で勝負する

結婚を的に入社の娘もまじり

満天の星では的も絞れない

正宏

栄恵

規代

房子

笑子

はお

静風

静佳

節夫

螢

淑子

美佐雄

千里

千鳥

清水

一枝

蝸牛

菁居

一路

保州報

当代

みね

百合子

公子

朱夏

露翁

正一

正雄

親の背がもう標的に小さすぎ
ライバルを標的にした棒グラフ
走っても走っても速さかり
林檎ひとつ抱いてあなたの的になる
昇る陽を的に少年歩き出す
標的にしていただいてありがと
標的にいつも弱者が狙われる
軽薄で壺の口から手が抜けぬ
パントマイム続き酸素が薄くなる
落椿さらり薄い緑切る
薄々は洩れ聞いていた不仲説
かと言って薄謝で済まぬ墨の色
嫌な人来たので薄い茶をいれる
夢二の絵慕う女の薄まゆげ
女だとわたし見くびる薄笑い
汚された自然を洗うものは無い
手を洗うごしごし洗う明日のため
真実を確かめたくて目を洗う
足洗い違う世間が見えてくる
洗っては繕うまめな母でした
言うべきは言うて男の首洗う
生者死者ガンジス河が夕焼ける

川柳後楽吟社

従野 健一報

さち子 武春 親踏 童子 高夫 保州 佳世子 めぐみ 三千子 初子 義男 芙美子 美寿子 千秀 靖子 秀男 美智子 桂香 美子 町子 鉄治 和子

出窓から覗くと深い母の森
真相は割れた鏡が知っている
還曆に負けるものかと古希の自負
若き日の思い出に逢う浜の風
海鳴りがやまず男が捨て切れず
人生を豊かに今日も靴の紐
かたくなに小石握っている頑固
母の日に亡母の言葉が耳に鳴る
生き別れ母と別れた地を尋ね
矢印の道が突然とぎれだす
午後六時マリオネットが閉める店
晩酌に舌つづみさす今日の汗
初サラーイ孫が差し出す贈り物
柏餅お世辞の手が出る古い顔
町内のお医者に命預けたら
戦友もかつてライバルだった仲
遅い血が満ちてくる月夜

南大阪川柳会

金井

文秋報

正秀 義親 佐加恵 青銅 桃風 玉水 哲郎 邦季 吟平 吉則 まさお たけ志 金吾 博友 照路 柳五郎 草風

女工哀史野麦峠の風が哭く
流刑地の哀話を語り継ぐ地蔵
名も顔も売れて窮屈過ぎる日々
妻僕の顔色全部読んでる日々
顔色を見たかベットが出て来ない
どの土も春の顔色見せている
私だけ反対したかて始まらん
雨風に耐えてしゃちほこ腕をはる
顔色を見て応変のごまをすり
時々他家と比べてわずらわし
大物を賛成させる村おこし
哀話秘め水子地蔵の風車
他家の嫁あまり褒めすぎないように
見回して賛成の手を引つ込める
復興の音は哀話をはね返す
他家のことだが性分はほつとけず
よそはよそうちほうちだと国旗出す
三猿を通す他家のお付き合い
日本人好みの哀話浪花節

城北川柳会

吐田 公一報

人間のはかなさテレビ映しだす
通り抜け髪に花弁がのつたまま
はらわたの中まで酔わす優勝旗
体調の都合でと言いつ不義理する
母の日に小さい拳で肩叩く
長男も老眼かける年となる
ひらひらと御室桜に雨もよい
喜びは趣味を生かしたボランティア
トヨ子

寿美 重人 信治 悟郎 柳宏子 東雲 咲 真砂 頂留子 正博 柳伸 トミ子 三男 シメ子 スミ子 公一 久峰 日出子

湧き水にひっそり咲いてる座禪草
美人湯と聞いて酔うほどつかり過ぎ
くすり袋長びく風邪に春のうつ
ある日ふとめつきり増えた息子の白髪
北齋の大波が呼ぶ海の声
出た釘を叩いて痛さ知る手首
合格の子のブランコが空を蹴る
老母背に三千院は若葉萌ゆ
花過ぎて田舎の駅も元の暇
五十年経っていくさの殻を脱ぐ
被災地の桜に心励まされ
口こみて客を呼んでる味の店
雑音は聞こえぬ耳を持つている
孫連れて軽い財布の帰るみち
床柱家を支えた艶になり
愚痴一つこぼさぬ姑で丸く住み
人好きな空の財布が陽気すぎ
三度目の職へ靴紐締め直す

川柳塔鹿野みか月 土橋

政子 陸子 登美子 高栄
あい子 昭子 達子 柳影
扇帆 倫子 白留美 久留美
白峰 満津子 静子 典子
一枝 公一

マツチ箱並べたような東京都
大みみず近頃とんと見当らぬ
めぐる世もみみずの親子かも知れぬ
私も蚯蚓のように土が好き
みみずまで漢方薬にされている
わたくしの花壇みみずも楽しそう
土の中でみみず奉仕を考える
つり鐘の下にみみずが棲みついた
蟻の列にかどわかされてゆくみみず
感激の涙 汗だとして帰ります
旅の散 鞆につめて帰ります
花が散るかなしい涙おいたまま
子の涙のみこむ母の海広い
一言も言えぬ涙が空へ向く
嫁ぐ娘をうれし涙で送ります
風に揺れる衣を月に見せながら
薄着してエビが衣を脱いじやった
震度七ひとの心を取り戻す
望遠鏡のぞいて星と話す
あら不思議煙草を喫うと知恵がでる

川柳塔わかやま吟社 宮口

次男 武子 富久江 房子
みさ子 孔美子 汲香 隆風
きみ子 弘子 小鹿 明美
三千代 くに子 八重子 睦子
実満 幸枝 喜与志 螢

茶柱に今日の出来ごと予想する
灯を消して鬼一匹をもてあます
肩書きが消えて座れる自由席
マスコミのペンにスターが又消され
痛み消す母のやさしい絵の中で
ふところの深さへ頼む火消し役
二人にはとても大事な欠けた皿
腹の底灰皿にみる応接間
合格をして受け皿よありがとつ
くやしさに皿ふりあげてそとおく
回される皿も命を賭けている
生臭い話きいてる柱さす
喜怒哀楽柱がみてる知っている
美人から誘ってもろたことがない
火がついた時から闇へ誘われる
風誘うままに歩いた山頭火
灯を消してホスピス長い夜となる
消えかかる炎を天の邪鬼が吹く
灯を消すと虫の鳴くのが聞こえだす
涙脆くなって頑固さ消えてゆく
消えかけた表札便りを待っている
皿に盛るセンスが光る妻といふ
消えるかなそのキズそんな呑み方で

ローズ川柳会 山崎 君子報

誠子 稚代 美子 紀美女
めぐみ 英子 正博 淳太郎
豊太 品子 武春 好笑
かすみ 金太 寿子 さち子
賢二 紫香 君枝 眞子
美羽 克子

ここまでの自分と知って楽になり
一望千里小さい事はやめにしよ
眼鏡なら三つもあつて薄明り
眼鏡置いてさてこれからのわが運命

うしろから八方美人がついてくる
うしろからついてゆくのが安心だ
娘を送るうしろ姿の消えるまで
うしろ手に誰を視るでもなく歩く
小さいが思い出ばかり詰めた箱
お針箱姑の思い出ためてある
おもちゃ箱大きくなってきたもんだ
最後には私の入る箱ひとつ
箱書きの無いわたくしは馬の骨

曲線美消えて女は強くなり
灰皿に苦渋の跡が盛つてある
心風ぐ日は一番高い樹に誘う
柱時計命をささむように鳴る
人は素直になれと法隆寺の柱
茶柱へにんまり朝の幕開ける
床柱いつまで家系つづくやら

千寿子 鉄治 輝子 和重
萬代 光代 裕美

末っ子も眼鏡に定期ランドセル
捨つもの捨てざるものを選ぶ眼鏡

仏前の静かな祈り眼鏡置く

老眼鏡元紅顔のクラス会

遠眼鏡日本の明日はどんな色

新しい眼鏡と永い雨期抜ける

亡き妻の老眼鏡が役に立つ

嘘ひとつ貫き眼鏡ふいている

雑兵の眼鏡の枠が太すぎる

ときどきは望遠鏡も見ています

ウインクの通ぜぬ男黒眼鏡

念入りに眼鏡をふいて時局読む

犬連れてナイトのつもり老眼鏡

まだ生きるつもり眼鏡二つ持つ

銀行の眼鏡わたしのよりもよい

川柳ささやま

酒井

靖子報

孫が運んだ笑い葉が効きすぎる
初耳もオウム オウムでくたびれる
全快を祈りつづけて折った鶴
よく眠る妻のんきかな疲れかな
眠る孫ホッペをそつと押してみる
年金のくらしどつぷり老夫婦
宅急便母の思いが詰めてある
十歳の膝の温もり忘れぬ
母さんの壺心得て泣き落とす
狂信に凝って年金まではたき
責任のない熱弁の選挙カー
母の日に母は満足して眠る

藍 哲子 トミエ まさお 貴代子 澄子 康之 いわゑ 武庫坊 はつ絵 民平 義子 君子 笑風 薫風

一杯のビールに明日をかけて寝る
熱心に聞いている割によく忘れ
檜山の旅費に年金少しずつ
煩惱がささやき念珠眠くなる
家族みな眠り女に用がある
情熱にほだされ夢を共に練る

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

春の陽にチャンスを重ねらう花言葉
おだやかな顔でチャンスねらつてる
辻褄を合せ手抜きをしています
手抜きすることも教えて嫁にやり
こんなとき医者のおしは効くらしい
そつなのよ手抜きもしますママの知恵
辞令一枚チャンスは向うに握られて
ドン感でいつもチャンスに嫌われる
震度7手抜きがビルを押し潰す
好きなのなんでも食えと脅される

鈴江 かつ子 聖子 好栄 ちよえ 恵美子 はるみ 博利 清泉 白汀

川柳岩出

小倉 アサ報

慣れた座にどつぷりつかり欠伸する
メモ帳に曖昧な彩しみ込ませ
アイドルになると乗れない縄電車
青い実が熟れてアイドル卒業す
退屈になると世間の目が怖い
曖昧に生きて明る人もいる
退屈はしない対話のある背中
生涯の現役たいくつなど知らぬ
白黒をはっきり言えぬ父の地位

智恵子 幸子 精子 和子 保子 英子 アサ 正義 良一

アイドルはガラス細工を抱えてる
ゆつくりと時計が動く雨の午後
退屈のしない程度にある仕事
アイドルは私の好きな森林浴
あいまいな返事が波紋ひろげてる
曖昧な距離で義母との和を保つ
母の座に退屈という文字は無く
退屈も慣れてしまえば日が早い
退屈も疲れることを知りました
マスコミに追われアイドル逃げ回る
アイドルの写真が笑う定期入れ
退屈な孤独へ孫が泣いて来る

悦男 神一郎 昌子 春子 正道 愛子 千鶴子 千鶴子 重徳 瑞穂 忠雄 与呂志

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

影絵から心の形覗かれる
仲直り形だけだった貝の口
整形もせず本当の顔で生き
久し振り髪形変えて逢いにゆく
形良く出来て満足しています
形ばかりこたわり本音影ひそめ
医者のお嘘信じて母は逝きました
判断で哀しい嘘を持ち歩く
お上手な嘘に年金紐ゆるめ
罪の無い嘘なら許すおもいやり
嘘少しませて話は盛り上がる
悲しさを嘘で繕う別れの日
母からの便り一番効く薬
物忘れしても薬は忘れぬ
延命という名で薬漬けにされ

れいじ 佳江 清子 一葉 邦代 登志子 太泡 房子 清志 義良 満江 登美子 文子 米子 雄々

薬もつ膝にこぼして呆け進む
薬売り故郷の富山は雪と言ふ
置き薬富山説りの噂聞く

ありがたい法話居眠りの中にきく
居眠りの父の背中が疲れてる

居眠りが十八番で油断できぬ人
居眠りをさせないように客がくる

居眠りへ軽音楽が心地よい
居眠りも上手になった古狸

すくすくと育ち兄より強くなり
すくすくと育つ芽を摘む親のエゴ

砂糖きびすくすく伸びて天をつく
すくすくと這えば立てよの親心

すくすくとこの杉もたらずアレルゲン
すくすくといかぬ男のわだかまり

はびきの市民川柳会 榎本

山の神笑えばわが家波静か
エリート過去の世間を狭くする

天気図が自家菜園を振り回す
青葉盛る木陰で語る老夫婦

ハウス物野菜の句を見失う
食うものがなかった話 嘘にされ

地味と派手比べられてる趣味の会
月とスッポン隣とつちは同姓で

アイデアを比べられてる社内報
どの花に止まらるか蝶が思案する

舌べろりご免なさいの照れ隠し
転んだ子ほめられ泣けず照れ笑い

鳳笙 早苗

きみえ 知恵子

与根一 静恵

鶴丸 静江

桂子 多賀子

多賀子 友子

友子 叮紅

吐来報

たけし 和風

昇 胡村

シマ子 敏

さとみ 四三郎

利武 美代子

悦子 辰子

鼻声で貴方と呼ばれ照れている
豪奢なロビー顔の皺のび背筋のび
隅つこの男を値ぶみするロビー

孫の夢虫の博士になると言ふ
スポーツもドラマも食った真理教
行列に必ず並ぶ癖がある

好奇心一歩も席を譲らない
ときどきは幕穴掘って好奇心
宇宙人と世間話をしてみよか

好奇心強くてちつとも太れない
見えないお世辞へ返す苦笑い
苦言いませぞろ身に沁むキリギリス

ライバルの栄転祝う苦い酒
エリートにわからぬ苦い酒
苦い酒にっこり呑んでいるやり手

妥協するふたりの酒はほろ苦い
良薬の苦味を知らぬ三代目

京都塔の会 松川

神馬しずかに詣でる人へ何思ふ
かぐや姫居そうな寓居男山

男山優し神馬の目に出合ふ
エジソンの偉業を偲ぶ若い竹
大社 戦をききむシルエツト

ある時は竿杖になり鞭になり
あなまたが星を竿で落せと言ふのなら
竿燈まつりの話がはずむ夏近し

激流へ釣竿なりの読みがある

志洋 敏子

重人 洞庵

かつみ 二南

志洋 敏子

重人 洞庵

かつみ 二南

金太 扶美代

泰子 晋

綾子 聡

りつえ 吐来

与呂志 一壺

杜的報

美穂 稲子

江美 波留吉

静江 友照

磯 シマ子

澄子

百尺竿頭一歩進めて仰ぐ空
旗竿が堂々とゆく労働歌
煩惱のまどいを竿でたしかめる

襦袢乾す決つた竿のある旧家
アリバイとして竿を持って出る
ライバルが猫撫で声でやってくる

水芭蕉撫でて流れる尾瀬の霧
かしこいなあとやさしく撫でた亡父恋うる
忠告の風が耳たぶ撫でにくる

撫で肩の山も時には荒れ狂う
爽やかな風が心を撫でてゆく
撫で切りにして賞味する初鱈

身体中撫でる祈りの千羽鶴
シルクハット撫でれば鳩が出る手品
点字撫で明日へ生き抜く白い杖

母の掌がいつも撫でると限らない
親切が過ぎて思わぬ仇となる
親切な思い出ばかりひとり旅

親切に道ゆずられた白い杖
親切が裏目になった気の遣い
親切が少しうるさいドアチェーン

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

いい別れいい再会をしたいから
別れても好きな人とは理に合わず
ほほえんで別れた朝に花は散る

一泡をふかせて別れてやるつもり
じゃあまたね軽く別れてそのまんま
半額で売っても損はないらしい

杜的 栄柳

真柳 百合子

正坊 紫香

萬的 風の

風の 風雲児

求芽 房子

圭坊 ただし

倫子 英一

庸佑 二南

白溪子 武庫坊

芳子

隆

宏子 朝子

恒明 春子

たもつ

わたくしは昔の損で生きています
さあ朝だ昨日の損は忘れよう

また損をしたなとおもふ父の肩
メーターが家の前まで来てあがる
六日のあやめいくらか損をしたような
組に事実を乗せている刑事

両の手を合わす事実にあきが棲む
よく見ろの事実にくうの音も出ない
事実とは思いたくない子の非行
泡沫の愛か水溜りが深い

何時からか胸に大きな水溜り
添えた手の温みで越える水溜り
手をつなぐ母子を離す水溜り
カルトから別れられない群がある

疑えばきりがながいぞともじり草
疑うと矢印までが怖く見え
疑いは晴れても心の傷残る
疑わず大きい方を貰うとく
疑わぬ母にこころで許し請う

ほたる川柳同好会

井上

直次報

歯車がころり回った土地ブーム
売心たつた一つのカメレオン
ファミコンのブームは孫がリードする
アパートのブームの売り場よけて行く
絵画ブーム画集買ってる小さい幸
年金のわが家にブーム立ち寄りず
日は西へ日本ブームも死語となり
サティアンに牧場の緑削られる

祥文 度 泰 祥一 シマ子 欣之 美幸 頂留子 勝美 森子 夕花 重人 春堂 元紀 弘直 美津留 かつみ ますみ 一風

被災地の野山みどりに生きかえる
一戸建隣の緑借りに建て
開発と言ふ名の下で緑減る

新緑の牧場に草喰むハイセイコー
向き合つてみつめる鹿の目に緑
天秤座ラッキーカーラーは緑色
シャボン玉緑の中に母がいる

冷蔵庫一ぱいないと落ち着かず
距離おいて冷たい人と言われそう
冷コートをアイスコーヒーと気障なやつ
冷却期間おこうと離れてそれつきり

冷蔵庫あければうちの食文化
冷戦も箸がころんで終る仲
一階と二階に枕夫婦冷え
苦しみを千本の手で救いませ

岸和田川柳会

田中

文時報

娘の事になると歯切れの悪い父
歯切れよく侵略でしたとは言わず
体調がいいので歯切れよい返事
もつちやりと歯切れ悪いが実がある
睡眠も非常呼集で夢破れ
非常時に人の絆も壊り戻す
非常食賞味期限がすぐ切れる
がさがさと側迷惑な菓子袋
震災後非常袋を放さない
のし袋の底には義理がつめてある
あてやかに紅をきかせて初舞台
古希過ぎて心に紅を忘れない

純次 善守 正安 竹二 英子 恭子 瀧小 吉太郎 方郎 祥風 喜美子 保子 昭子 せず 敞子

口紅が着飾って行く参観日
標的を絞り女は紅を差す
定位置で務めを果たす紅生薑

口紅の彩に女の見栄がある
太陽は無償で地球暖める
奉仕品安く買ったが持て余し
停年後妻に毎日奉仕です

こち良い汗を流してポランテニア
震災で奉仕ごころを揺り覚ます
健康に感謝しながら奉仕する
奉仕するつもり嫌いなくじを買う

当選で市民奉仕の言葉消え
若者のやる気まぶしいポランテニア
連休の家庭奉仕が待っている
父の日にあんまの奉仕二二三

ポランテニアでできる併せ噛みしめる
健康のためと毎朝道路掃く
ねぎらいのお茶が奉仕のどに沁む

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

お隣に食器借るほど客が来る
重圧に耐えた窓際族の椅子
余命表手違いがあり生かされる
宅配に孫の写真入れておく
よく耐えた妻に感謝が照れくさい
三越の宅配便が来る隣
良心も野心も宅配つめてくる
宅配へ孫が真っ先に取りにゆく
宅配にぎつしり詰めた胸の内

通彦 健太 金太 狸村 文時 千代 路子 敏光 昭二 盛之 鹿太郎 啓二郎 信博 けい子 さよ子 愿 白光子 紫香 歌子 定人 夢之助 弘治 鹿太 六浦 向西 末貞一

手荷物宅配まかせ気まま旅
宅配に一言添える母の筆

川柳大阪

坊農

首の無い地蔵が哀話秘めている
ドジ踏むも弱気見せない太ッ腹
制服を着こなしてきぬま本務
生きるだけ生きてみようと竹を踏む
妻を踏む野良着の嫁に母安堵

重人
天平
比呂志
柳弘

人生の子定狂った震度七
全てが狂う最初の釘の掛け違い
あの日に逢うて歩幅が狂い出す
あの日から建具狂ったまま暮らす
青い空飛べぬあひるに明日の夢
丹精のさつきはじける日本晴れ
出不精な夫を晴れた日に干そう
晴れ渡る空へ落書きしたくなる

勇太郎
亜成
良知
時弘
吉之助
博泉
シマ子
度

通り雨嬉し泣きかも地蔵さん
恐山 地蔵寒いかほっかむり
前髪をあげる仕草は誰ゆすり
その仕草紳士諸兄が騙される
有りそうでも無さそな仕草 美人ママ
悲しいね人の性みる仕草です
山ゆれて峠の地蔵ころげ落ち
前掛けの願いが重い地蔵さん
オウム教世界に知らせた無名村
落ちていても財布一度は踏んでみる
踏まれても負けずに咲いて笑ってる
寝不足の身を励ましてべダル踏む
さすがやなこそは場数踏んだ人
踏ん張って富士山頂に辿りつく
道しるべ説いて地蔵の風に堪え
紅を引く仕草に決意ある女
匿名の心を拝む義援金
新聞を踏むと活字がにらんでる
切り花に想いをたんと詰めた恋
狙の鯉に幾度かされかける
島捨てた鯉がこいしい島の川
踏切に誰の供養か石地蔵
新しついでにだれ地蔵の顔なごむ
踏みつけにされる嘘が巧くなる
水子地蔵いつもやさしい母と居る

川柳ねやがわ

江口

度報

留守番の犬も欠伸をする日長
やがて来る孤老を思う妻の留守
母の留守父の機嫌の悪いこと
妻留守と言えはたいがい帰りはる
いいなあと思つた留守が長すぎる
半月も留守にしてはる何かある
電話で留守確かめてから来る男
妻の留守なにもないがナポレオン
通信簿体操だけが甲でした
瞬間の至芸を見せるウルトラシー
体操の名手も階段踏み外す
再起へとりハリ励む母健気
老いひとりお伽ばなしの雑誌読む
スキヤングル拾い集めて週刊誌
育児雑誌にふりまわされる若い母
慰問袋の雑誌を読んだ暗い青春
りゅうとした服に似合わぬ雑誌持ち
雑誌バラバラうわの空です待ち合せ
婦人雑誌の読み過ぎだろう燃えている
お次の方と呼ばれてはなす週刊誌
大衆誌覇者交代を繰り返す

信醉
かよこ
良花
吠笑
青道
柳昌
しげお
末坊
川童
酔舟
美花
美子
雅果
太元
洛醉
金太
本蔭樺
一步
与呂志
美津留
鉄心
和子
まつお
希久志
笑風

留守番の犬も欠伸をする日長
やがて来る孤老を思う妻の留守
母の留守父の機嫌の悪いこと
妻留守と言えはたいがい帰りはる
いいなあと思つた留守が長すぎる
半月も留守にしてはる何かある
電話で留守確かめてから来る男
妻の留守なにもないがナポレオン
通信簿体操だけが甲でした
瞬間の至芸を見せるウルトラシー
体操の名手も階段踏み外す
再起へとりハリ励む母健気
老いひとりお伽ばなしの雑誌読む
スキヤングル拾い集めて週刊誌
育児雑誌にふりまわされる若い母
慰問袋の雑誌を読んだ暗い青春
りゅうとした服に似合わぬ雑誌持ち
雑誌バラバラうわの空です待ち合せ
婦人雑誌の読み過ぎだろう燃えている
お次の方と呼ばれてはなす週刊誌
大衆誌覇者交代を繰り返す

一風
たもつ
かすみ
源一
磯
三千子
弘直
八十八
欣史子
光子
英千子
一途
あやめ
波留吉
澄子
恵子
小月
菜路
頂留子
文秋

枝豆とビール片手の夕すすみ
祖母の煮た豆をこ近所まで配る
伸びながら相手を選ぶ豆の蔓
少年自立 豆の弾ける音がする
豆ぼろり豆の瞳をしてさがしだす
息災であれとおふくろ豆ごはん
ふっくらと豆にまかせる豆料理
日々好日親爺が豆をまきたがる
無沙汰してますます深くなる亀裂
家のどこかに今も亀裂の音がする
悪人はだあれもない母と子に
胸に巣くう悪 わたしを眠らせぬ
父さんを悪役にして子を叱り
悪友がいて人生に彩がある
以心伝心悪友だからよくわかる
適量を免罪として飲んでおり
老骨にむち打って見ても知れている
鳥獣戯画どう画こう震度七
輪廻転生静かに見えてる埴輪の眼

一笛
紫芽
求香
鹿太
ハツエ
義芳
歌子
真柳
キク子
年代
昌子
喜美子
巽芳子
武庫坊
正一
行隆
吉太郎
杜穂
光穂

尼崎いくしま川柳会 春城

年代報

地震からなぜか暮しが弾まない
大木を揺するわたしでいるために
ゆえなくば炎ゆることなきしろ椿
さびしくて亡夫と並べる白い茶碗
菜の花の黄に包まれて地球脱出
正子

地震より非情に見えるシヨベルカー
陶芸教室 土に試されてる感じ
雑用を父がこなした目出度い日
猫が生れ島の話題が一つ増え
出直しが出来る男についてゆく
瀧小

岬川柳会

八十洞滝庵報

妻と娘に玩具にされている茶の間
娘が嫁ぎ熊のプーさん置いていく
梅雨の雨空を仰いで田植唄
一日のドラマが終り明日に継ぐ
ピストルも玩具のうちとオウム教
花名刺の軽さで生きてきたドラマ
玩具まで電気仕掛を子を選ぶ
女の子怖い玩具で泣きつ面
カメラ拭く夫の玩具高くつく
引張った手を玩具屋へ放さない
雨脚が追い越してゆく老いの坂
浮かれてる花見の客へ俄雨
雨を呼ぶ蛙が憎い旅の朝
雨もよし傘の花咲く通学路
遠い日の悪夢ヒルマの雨期惚ぶ
日本一目指しけん玉八十路
三世代ドラマの中味語りあり

オウム教ドラマを超えるサスペンス
梅雨どきに頭痛気にする妻の顔
楽しさを半減させる雨女
とみ
義正
いと

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

能弁で煙に巻いて自画自賛
雨煙の風が柳に触れてゆく
煙たいが頼りにしてるお父さん
一筋の煙を大きくする噂
禁煙と書くから吸ってみたくなる
打ちあげの花火籐椅子向き替える
重い口今日のゲストは大銀杏
しやべりすぎあれはゲスト司会者か
プラス思考六月のウツ跳ねとばす
六月の重たい空へ聞く計報
六月の風で青田になった里
六月のおんなは雨を厭わない
六月に来れば湯の里蜜飛ぶ
おぼろげな記憶が道を迷わせる
いたわりの父の日がある梅雨晴れ間
天海に母を見送る静かな日
末貞一
向西
まさ
昌子
正治
六浦
勇次郎
一閑
澄子
すみ
十四郎
鹿太
紫香
夢之助
美智子
歌子

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

鈍でもいい人を騙さんとこが好き
結婚式でれてる方が花むこさん
春一番誘う相手がまだ見えぬ
誘われた紅茶主客と知らずゆく
お見合に照れているのは母の方
見合しててれる二人でないらしい
信子
玲泉
一浪
野草
八太郎
惊市

卒寿坂どんなテープが待つものやら
あやまちの元へテープを貼っておく
回転のぶい頭痛で無位無冠
ガムテープ貼りたい老いの土瓶口
鈍い人愛のサインが通じない
玉音のテープにカビが生えていた
テープ切る胸の厚さか鼻の差か
満開の花にゆさぶりかけてみる
鈍感と言われた時はピンと来る
カセットテープ元にもどして月曜日
井の中の蛙でテープいつも切る
お誘いの媚薬とろりと甘かった
春宵の誘惑ぬくい掌にふれる
気まぐれな風に誘われ燃えてくる
とつとり川柳会 武田 帆雀報
さわやかな心に太陽笑み給う
友の声さわやかに聞く山の駅
貸し借りのないさわやかな良い陽気
さわやかに初登庁のノックさん
花粉症風さわやかに吹いている
さわやかだ妻鼻唄でパンを焼く
さわやかな太古の蓮が目を覚ます
さわやかな講演聴いて花を活け
洗脳が解けてさわやかテキを食う
口下手のガイド案内顔でもて
案内内会費が高く思案する
案内内の電話の声が美しい
案内内状なんぼお祝い包もつか
喜与志
和枝
雄々
松盛
博丈
幸子
幸子
玲子
節子
季芳
とみお
勝見
よしえ
弘朗
螢
としゆき
明美
一枝
銀嶺
喬水
きみ子
侑里
帆雀
大漁
多哥由
粗粒
よしお
喜与志

案内状夫婦で来いと書いてない
蟻の列案内人が解らない

大砂丘ラクダの背なが案内する
案内の通り楽しい句会です

煙草喫う人はこちらへさあどうぞ
還曆に新入生の学生だ

女学生の絵はバラ色に埋めつくす
新課長学生気質出て困る

学生生の姉が専業主婦もする
梨娘応募学生バイトする

医大生鬻った脛は直します
文学部次男が農を継ぐと言つ

学生生のコンパで酒の味覚え
太陽が似合う学生達の群れ

いずも川柳会

園山多賀子報

隣まで来た幸運が動かない
迷いから醒めると花が美しい
冷蔵庫の中にビールのある余裕
財布にはまだ万札がある余裕
余裕に溺れてしまった蟻地獄
振り返る余裕も捨ててから孤独
余裕などないが楽しく暮して
家計簿の僅かな余裕花を買つ
早とちりした失敗を自嘲する
早とちり独り駈け出す太郎冠者
結果論亀が兎を追い越した
避難所で早五力月も思案する
一行の余白そこから迷い出す

- 和歌子 山人 舎人 圭一郎 蝨 茂
- 光子 孝男 悦子 行男 輪多朗 静生 睦子 一京
- 美房 しげお 射月芳 幸一 きみえ 文子 一葉 愛子 昭二 多賀子
- 青湖 流石

折り返し地点で迷いが深くなり
騙されて見ようか迷う霧の夜
ふっ切れた迷いから迷う反抗期
聞く耳がないから迷う

此処へ来てまだ迷つてる赤いバラ
好きだから返事に迷う朝の雨
項への視線若さが眩しくて
美人追う視線を妻に皮肉られ

若後家へ視線集まる通夜の席
悲しかり痴呆視線が宙に浮く
隣から隣へ毬が弾み過ぎ

波長が合わぬ新人類がいる隣
堀越しに隣の空気が吸うて見る
お隣の会話が洩れる仮住まい
隣から安い茶碗がとんで来る

筒抜けの隣と距離を置いている
大慈悲の視線に今朝も跪く

川柳塔おとり

万国旗パチンコ店を飾り立て
万感がせまって涙ばかり出る
億万の中のひとりとめぐり逢つ
やさしさに触れて片意地落けてくる
やさしさ浸つて骨がもろくなり
母さんのやさしい日にはマンガ読む
街道の安全祈る石地蔵
老夫婦街道筋の宿をとる
極楽へ行く街道を探してる
一里松消えて街道忘れられ

川柳塔おとり

上田 俊路報

折り返し地点で迷いが深くなり
騙されて見ようか迷う霧の夜
ふっ切れた迷いから迷う反抗期
聞く耳がないから迷う

- 治代 満江 茂美 好子 芙佐子 しま子 篤子 清子 義良 ちえ 久栄 寿美 まこと 房子 裕
- 崇 艶子 俊路 由多香 幸次郎 千秋 余志身 奨 孝子

街道を悲喜こもごもの風が吹く
街道を外れた場所に花がある

ヘッドギア人はいろいろ夢中なり
テレビ佳境 鍋の小芋が焦げている
母さんの呪文が効いてくる奇跡
人間の都合で消されゆく渚

リンゴ一つもらい渚に行つて
佗助が壺の古さを引き立てる
あと一つ夢中で折つた千羽鶴
砂糖壺の中で怠惰になつてゆく
生命線とつて切れてはいるわたし
楽園の渚おまえは知るまいが
凶星ですつば押さえられ刃が立たず
嫁のつば家風の愚痴を聞かされる
骨壺の亡父よあなたを越えた齡
辻一つ曲りそこねた急ぎ足
サリンの結末急がねば困る
今はもう貝もひろえぬ渚なり
コックリさんの箸を夢中で追っている
熟年は師匠に夢中稽古事
ハイレグが渚に似合う海の色
妻と二人で落日を見る渚

分相応骨は素焼の壺でよい
土いじり夢中にさせる考古学
出土した壺が咳込む排気ガス
亀の子よガンバレ波は手をひろげ
祖父夢中写経に仏との出会い

翠洋会 米田 恭昌報

街道を悲喜こもごもの風が吹く
街道を外れた場所に花がある

- 宏章 真一 鬼遊 みつ子 源一 みずき 蛙
- 叔子 良江 希久子 凡子 英一 綾子 東雲 佳秋 光子 千梢 澄子 英子 英子 真砂 正坊 志華子 絹子 宣司 さと美 正雄

老母背に夢中で火の粉除けている
ファミコンの孫一人占めするテレビ
久峰 恭昌

富柳会 池 森子報

吹く風に背中を伸ばす草が好き
広島で命助かり古希迎う
扶美代 恒雄

風向きを変えたる女の軽い嘘
悪用をされると知らぬ委任状
紅紫朗 美代子

往年の小町の凜と紅を引く
宗教の親玉けろり空惚け
冬虹 宗一

ビデオ利用洋画たのしむ老いも在り
利用され後の祭りに臍を噛む
アキ 方子

半世紀いまだ奇跡を祈るだけ
茶柱に今日の奇跡も添えてある
鐘造 絹子

小包に母の言葉も添えている窓辺
鶴千羽奇跡を待つている窓辺
二三子 登子

一億円積んでも青春もどらない
空白の時を五月雨降りしきり
昭水 トシエ

再利用する節約へ内助の功
書紀古事記汲めども尽きぬ利用価値
智久 欣之

利用した人からとどく返り討ち
利用するばかりで後は知らん顔
伊勇 維久子

サリン利用雑魚が世界をさわがせる
心まで利用したのかオウム教
花梢 岳人

古くとも蝙蝠傘にある嫉妬
美しい包みでとどく猜疑心
森子

川柳藤井寺 高田美代子報

五ゲームはなすつもりが気のゆるみ
敬一

澄んだ目がゆるむ心をノックする
捜査の手ゆるめ犯人およがされ
梓すこしゆるめて視野が広がる
安心をすると石にもけつまずく
耐えている噛みしめている生あくび
勝算がしつかりあって耐えている
隅っこにボツンと耐える妻がいる
妻だけが耐えた耐えたとかましい
指の節母は多くを語らない
耐え抜いた果ての号泣かも知れぬ
信念を持って耐えれば満ちてくる
履歴書に耐えた所が二ヶ所ある
人の渦に閉じ込められた時の人
走馬灯喜怒哀楽が渦となる
会えばまた火種が燃える恋の渦
洗濯機の渦に昨日の嘘流す
愛と憎二つの渦がもつれ合う
情報の渦で方向見失う
喝采の渦が怒涛になっていく
年輪の渦にいのちの音がする
まだ渦を抱いて男の列にいる
正輪を吐いて渦中の人となり
天才かも知れん頭の渦を撫で
古希すぎた妻になややかや言うてくれ
チンゲン菜ザーサイ少し瘦せたいな
トミ子

倉吉川柳会 谷口 次男報

体力は衰えたけど味がある
政治家に金の力がものを言い
サカエ 幸子

吸江 美代子

与呂志 扶美代

敦子 昭子

悦子 一屯

射月芳 修六

かつみ 志洋

政治 治子

六花 花梢

正一 和樹

史郎 史郎

しげお 宗一

知恵もなく力もなくて粗大ゴミ
ゆれるほど力をつけているのが芒
若い力信じてバトンタッチする
年上の女で力む世帯です
美人だがちよつとも魅力ない女
力水負けてやれども嘔けず
力瘤だけでは勝てず知恵使つ
備考欄努力不足と朱書入れる
鎌首を上げる力もありません
アメリカと力くらべはせぬように
女だけ力で過疎の村守る
節々に竹は力を貯めている
力ずくさらって灰にするオウム
弁護者が血の気が多くすぐけんか
婆ちゃんの気になるところ似てしまふ
この孫も血筋を引いて大根足
ご近所がこわくて朝寝できもせず
豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

田中 正坊報

引出しが秘密をあはく亡父の忌
飲み切れぬ薬 抽斗で眠ってる
あいまいな国を代表する眉毛
この国のかたちで手繰る未来地図
万国旗わからぬ国が多過ぎる
すこし猫背の人ばかりなるわが祖国
世界地図いくさの好きな国があり
持てるだけ持つて被災地までの距離
持病持ち何所へ行くにも薬提げ
夕焼けへ妻と二人で持つ荷物
登代子 計光

きく子 圭坊

武庫坊 薫

慶子 慶子

知香子 知香子

路児 路児

御前 御前

節子 節子

独歩 独歩

天雀 天雀

雄々 雄々

和枝 和枝

とみお とみお

完司 完司

小生 小生

今日もまた日記を書いているいのち
 祝い事の節目節目にあるいのち
 花のいのちが力いっぱい種はじく
 筍のいのちすすくすく竹になる
 いのちの塔倒れる夢に目を覚ます
 紫陽花の寺にやさしい目の地藏
 父の日を妻が祝ってくれました
 友逝きて心の笛が鳴りやまず
 きらきらと田植の水が嬉しそう
 シチュウぐつぐつ再婚話煮え詰まる
 肩張って孤独に弱いサングラス
 欲望を集めた街の川汚染
 ふるさとへ都会の匂い撒きに行く

堺川柳会

河内

月子報

正坊 紫香 求芽 英子 つえ子 博史 杜的 吉太郎 源一 福一 悟郎 明光 春蘭 美子 紀美女 勇太 喜代子 洞庵 頂留子 文時 途子 菁風 昭子 美代子 りつこ みつこ

人間の原点をみるホームレス
 七曲りして人の道行ってます
 人間の傲りで白然失われ
 人間の弱さに邪教入り込む
 人間が人間裁く法治国
 能面の裏に弾んだ顔を置く
 考える葦つまずきが多すぎる
 わたしから逃げたコインが弾み出す
 雪解けの水幻の滝弾み出す
 占いの凶に弾みがついてくる
 職退いてやっつと人間に戻す
 スマートな人にこんにやくせり！羨められ
 人間をまだやりたくて糖衣錠
 邪教まかり通って人間狂わされ
 チョンボ積み重ねて温い人になる
 人間と任んでベットも気短に

冬虹 金三郎 八千代 泰子 彰 摩耶 文 かりん 東雲 楓 樟 満州 寿美 寿恵子 天笑 月子

川柳塔社常任理事会(7月1日)

▽稲葉真郎・長谷川呂万・井齋一齋・島ひかるの4氏を新同人として承認。
 ▽栗追悼句会の役割分担を決定。
 ▽川柳塔まつりについて一兼題は6題とし、選者は本社2名、地方4名とする。人選は次回までに決定し、9月号に発表する。
 ▽同人が死去した場合は、第一報を受けた者が主幹・理事長・総務部長に通報し、それの任務にもとづいて弔問・弔電・供花記事・追悼文依頼などの措置をとる。

茗人忌川柳大会

とき 8月27日(日) 午前10時半開会
 ところ 白兎会館(鳥取県温泉町556)
 おはなし 西田柳宏子

兼題と選者(各題2句)

「運命」 阿萬萬的選
 「望む」 小池しげお選
 「香水」 松本文子選
 「煙」 小林由多香選
 「団体」 小西雄々選
 「尖る」 林荒介選
 「若者」 中原諷人選

◎席題なし・午前11時半締切

会費 3500円(懇親会を含む)
 昼食は各自でお願いします。

投句 投句料1000円(作品集呈)

投句のみの方は8月15日までに
 着くよう左記へお送り下さい。

うみなり川柳会

〒680 鳥取市相生町3丁目204

森田 熊生 方

■各地句会だより

堺川柳会

藤井 一二三

「ものの始まりなんでも堺」の言葉とおり
中世以来、文芸の盛んな土地である。

現在私たちの「堺川柳会」は、「堺番傘川柳会」とともに、短詩型文芸部門の一つとして互いに協力して活動している。

そもそも「堺川柳会」は、麻生路郎師につかえた八木摩天郎先生が創られたもので（年月未詳）、私たちが学んだ昭和四十二年ごろは、チンチン電車の走る神明町に近い、先生のお宅で句会が持たれていた。しかし、交通の便、夜の句会ということもあって、出席者は十数名に過ぎなかったが、毎月のように川村好郎、清水白柳、菊沢小松園という、川柳塔社の諸先生の出席をいただき、私たち初心者にとってはぜいたくのない教室であった。川柳指導のほかに、歴史や人生について学べたことも感謝している。また摩天郎先生は、恩師路郎が川柳への理想とした「いのち

ある句を創れ」を常に説かれた。また、地元の名門旧家の出身だけに、極めて控えめで腰が低く、自己を強く主張されなかった。

句会指導を頼みに行かれた富田林の阿部柳太氏が、逆に先生に「頼みます」と言われ、感激されたとか（川柳塔平成六年二月号）。

また、先生に句を通して「人間としての優しさ」を学んだ。またある時、「一二三さん、肩に力を入れたらあきまへん。あんたの川柳を作ったらよろしいのやで」との言葉や、選



者として軸吟を発表される時、優しい声で「わたしの拙い句」と言われたのが先生の奥床しさを如実に物語っている。春風駭蕩、滋味あふれる先生に私たちは心酔した。

しかしこの優しい先生が、昭和49年仁徳天皇大仙陵広場に、「ふる里は大仙陵のあるところ」の句碑を建立されたが、当初は「公害を吐けと仁徳のたまわず」の名句を希求された経緯がある。川柳人摩天郎の面目躍如と言うべきである。昭和55年4月、死去された。

河内天笑氏がその跡を継ぎ、今日に至っている。以前、川柳塔で好評だった「大萬川柳」と同じ年間合計得点を競う「夜市川柳」をつくり、好評を博している。

なお、当時の「堺川柳会」を知る者は、天笑・月子夫妻、寺井東雲氏と私の四名となったが、現在の句会には天笑氏指導の教室の皆さん（女性）や各地柳友の出席を得て行っている（25〜35名）。最近では若い女性の新鮮な句が披露され、活気がみなぎっている。

ちなみに五月句会最高位の句（天笑選）

しなやかに女は意地を通します

宮本かりん

そして現在、会の運営一切に全力投球の天笑氏により、三五〇号記念句会へ向けて走りつづけている。

句集紹介

田中透太『風のあと』

小出智子

田中透太さんが第二句集『風のあと』を発売された。一九八八年に『かぼちゃばい』を出されてから七年になる。

透太さんとは十年前も前だったか、南大阪川柳会に出席されていたころ、親しくお話をさせて頂いていたが、その頃から非常に真面目に川柳に取り組んで、熱っぽく川柳を話す人であったが、今もそれは変わらない。

句集の始めには、序文という形でなく、「座右の銘」として、故西尾某名譽主幹の『水鶏庵こむら散歩』の中の「脳と心」よりを頂かれています。おそらく某先生ご生前最後のご執筆ではないかと思われる。

楽しくて妻が居るのを忘れてる

透太さん一家は、家族ぐるみで文化活動がされるなど、よい家庭環境で川柳を続けてこられた。奥さんとは、よき理解者であり、あ

る時は協力し合う仲間でもある。

風の夜は風の話をする夫婦

傾いた棚を夫婦で吊っている

彼と話していると、家庭を大切にされる人だなというのがよく分かる。それが句にも現われて、夫婦の句に彼の持ち味の滲むものが多い。歳月と共に培われた夫婦の絆である。

オイと言う時代は過ぎたお父さん

言うなれば何処にでもある男の姿であるが、定年退職をしてからは、もう妻のことを「オイ」と呼べないと言うのである。夫婦で働きながらよい家庭を築き、子供を立派に巣立たせた理想の姿でもある。

紙コップ話相手を選ばない

くつろげる人の隣へ席をかえ

少しお酒が入って、川柳の話となると並々ならぬ情熱を秘めている透太さん。柳論も熱を帯びてくる。そんな一面を覗かせる句。

笑わない客が一番前に居る

人として温か味をもつ句の多い中で、数少ない辛辣な句である。足の竦んでしまいそうな思いがする。物事を客観視する鋭い眼をもっている。

いい顔で次の電車を待っている

この句にはあくせくとしない余裕がある。このことは、これからの透太川柳に大きく影

響していくのではないかと思われる。

暗闇で風の心を読みちがえ

「風」に殊更深い思いを寄せる彼の会心の作ではないだろうか。千姿万態する風と、どこまでもこだわってゆかれるであろう透太さんの、一層の飛躍が望まれる。

谷垣史好句集

田中正坊

『川柳塔』が発刊されると、私はまず巻頭に近い頁に掲載される史好さんの作品を読んだ。これらの作品群がいつの日か一冊の句集となって手にすることができないものかといふ所に願っていたが、それがついに現実のものとなった。そして私は、ゲラの段階からこの句集を再読、三読して感嘆を禁ずることができなかった。

史好さんとは、本社句会や常任理事会で会合する以外はほとんど個人的な交際はなかった。ただ長く『川柳塔』の編集者と校正者として接触し、そして彼が健康上の理由で編集の仕事辞して私にバトンタッチしたとい

う関係だけである。しかし、彼と私とはいわゆる『同業者』としての連帯意識につながっていたと言つことはできる。

そこでこの句集紹介の執筆者を考えた時、彼とは最も親しい薫風氏は序文、鬼遊氏はあとがき、吐来氏は跋文を書いているので除外しても、他に二、三の人を思い浮かばないでもなかったが、締切日の関係もあつて私が書くこととした。まえおきが長くなった。もう紙数がない。『序』の20句とタブらない私の20句を掲げて紹介に代えることとする。

大本堂発表ある日突然負けました
もう他人ではない朝日眩しすぎ

人妻の恋が匂つてくる正午

参院選ひよこみたいなのも混じり
卑怯にも天皇陛下の名でしごき
死ぬときはひとりぼっちの雪だるま

意地悪な神様がいてまだ独り
総理登壇もつと面をあげ給え

制服を着て気味悪い大学生

遠い瞳になつて吹いてるハーモニカ
帰るべき故郷もなしギター弾く
彼岸花 戦の記憶遠ざかる

玉碎の島をヒキニが闊歩する

会う場所は少しキザだが紀伊国屋
さみしきは夜中の時計一つ打ち

廿二世紀ちよつとのぞいて死にたいな
お同志日光写真知つてたか
赤インク思えば長いつき合いだ
もう強いて生きたいという世でもなし

ニコニコと総理の職が楽しそう

瀬戸まさよ『冬木立』

山本義子

瀬戸まさよさん、句集『冬木立』の発刊、おめでとうございます。昨年十一月、「甲吉川柳記念句会参加弘前の旅」で初めてお目にかかりました。ご迷惑なこと多々あつたことと存じますのに、温厚な笑顔でお世話くださり、教えられること大でございました。

このたび、句集を拝読いたしました。「ウンさもありなん」と合点しました。お優しい中にも筋の通つたご意志と、ほのぼのとしたお人柄そのままの自然体に感服いたしました。柳歴の浅い者がおこがましいと思いますが、私の好きな句を列記させて頂くことをお許し下さい。

相づちを打つただけでよい思いやり

石段を見上げて回れ右します

鼻欠けた野仏さんへ今日は

雲ひとつない青空に深呼吸

今も欲し普の顔のひたむきさ

ツキだけでない実力もお見せる

待たず人だから忘れずに文庫本

木々匂う立ち止まり立ち止まり行く

本堂の暗さ祈りを包み込む

鬼やんも持たせてくれた遠い空

ざらざらの母の手遠くおわします

夕焼けを信じ生きますこれから

人として女としての私の人生に得難い方と

お会いできましたことを喜んでおります。

残暑御見舞

渡 辺 独 歩

〒682 倉吉市西福守町七二七

電話〇八五八二一八一〇四六一

路郎忌

本社 七月旬会

七月七日(金)午後五時半
メンズファッションセンター

路郎忌はめぐり三十一回目となる。七年七月七日と並ぶ年に當る七夕祭りの宵、番傘から杉森節子さんを選者に迎えて一〇五名の出席により七月旬会は開催され、出席記名七十七番目に當った梶川雄次郎さんに記念品が贈呈された。

お話は西田柳宏子さん。本日の兼題にもある体験に因み、自身の体験談を語る。一、二度乗っただけの個人タクシーの運転手さんにとて親切に通院の手助けを無料でして頂いた心あたたまる話、また五十五年前、中学三年の時満州へ渡り少年時代を過したが、当時の満州は匪族が横行し危険であったこと、学生でありながら軍隊の模擬体験をし、起こされたことなどである。お陰で強靱な精神と土性骨が培われたそうである。

月間賞は大阪市の岩内外吉さんに輝く。

(司会―岳人) (記名―月子・森子)
(受付―隆・かすみ・寿美子) (清記―希久子)

席題「薬局」 榎本信治選

薬局へ人のないのを見計らい
少し離れた薬局へ行つたわけ
薬局へ寄つて帰つてねと電話
薬局の舌なめらかに売る媚薬
咳をしながら風邪薬売つてくれ
薬局はとうに眠つている歯痛
薬局で男オムツをすすめられ
薬局に日用品の多いこと
薬大を出ても薬局引継がず
薬局がしつかり話聞いてくれ
薬局で買つて来たのは化粧品
薬局の主人医学に長けた口
薬局と仲良くしとくことにする
薬局で医院のくすり見てもらう
薬局もバーゲンセールはじめたぞ
薬局と仲よしになる更年期
薬局でくすりを買つたことがない
目印になる薬局が角にある
出勤は薬局に寄る二日酔い
主治医と別に薬局と仲が良い
薬局の親父律義な風邪をひき
薬局の夫婦仲良く胃が痛み
薬局のあるヒダンベルしています
薬局の親切根掘り葉掘り聞く
漢方を売る薬局でいかめしい
毒ガスに詳しい薬局の亭主
薬局と喧嘩しているやせ薬

東雲 外吉 上げお 雅文 寿美 シマ子 吸江 恵子 半蔵門 ダン吉 射月芳 笛生 月子 保州 天笑 稚代 岳人 笛生 隆 冬葉 弘直 たず子 天笑 柳宏子 美津留 高士 節子

漢方のことに詳しい赤いひげ
薬局のあかりにほっとして熱
薬局はどこにありますが旅の宿
逢う前に薬局で買つて傷くすり
薬局で家族構成まで話す
薬局の主人アロエを食べてはる
会計と薬局で待つ小半日
薬局の主人に知れた更年期
薬局で蚊の習性を聞いてくる
人
私の薬局がある小引き出し
医者には言えず薬局には打ち明ける
地
天
薬局と仲よく生きていくひとり
惚けに効くくすりへ薬局を回る
軸
兼題「蹴る」 松原寿子選

節子 恵子 鬼遊 岳人 いわゑ 満州 たつお 外吉 英千子 希久子 悟郎 恵美子 信治 天笑 美羽 希久子 金太 豊太 正坊 高士 武庫坊

ポーナスタウン ビールの缶を蹴りとはす
じれつたいわたしを蹴っている夕陽
蹴られても自分の意志を曲げぬ奴
護身術 急所を蹴ったハイヒール

桂香 森子 トメ子

蹴り返す女はずいで母の顔
次々といやなニュースを蹴っている
私好みの壺にロクロを蹴っている
不意討ちのように空き缶また蹴られ
どの毬を蹴るかを迷い弾まない

元紀 源一 和子 美房

群れを出て淋しがりやの毬を蹴る
くちた纏うつかり蹴ると導火線
美女だから蹴るのはやめてなでておく
思い切り蹴りたい石がない街だ

義子 狸村 高士 稚代

朱の毬を蹴ってあしたへ羽搏こう
蹴られてもよいクッションを身につける
忠告を蹴って一日中疼く

満津子 真知子 紫香 二南

石を蹴るだけで済まぬ腹の虫
蹴って立つ席に未練は残さない
監督も負けた悔しさドアを蹴る
自信喪失蹴った空缶まで嘔う

柳宏子 たず子 しげお 英子

空缶を蹴ると大きくなる波紋
中傷を蹴ると乾いた風が吹く
躓いた石蹴り返し鬱づつく
雨つづく猫も男も蹴りやすい

武庫坊 千秀 惠美子 欣史子 美代子

石を蹴る男の目には愛がない
蹴り返すことも覚えて生きている

人

雅びかなタイムスリップする蹴鞠
地 ネクタイをきっちり締めて使者を蹴る

千歩

椅子蹴った男の語尾を信じよう
軸 夢のような話を蹴って汗を積む

しげお

兼題「こんど」 山下 美津留 選
こんどこそ肉を切らせて骨を切る
こんどこそ男になって墓洗う

節子

あすなろのこんどこそはに手を叩く
こんど逢う時には花を活けておく
こんどとていうこんどに妻の目がすわる
こんどこそやさしい人を見つめます

寿子

こんどこそさきつぱり断つた酒煙草
こんどこそ跳んでやるぞという日記
今度目のことには記念切手貼る
こんど会う時は他人になる家裁

弥生 悟郎

誘われたお茶またこんどまたこんど
箸枕 こんどの話乗せられぬ
父さんのこんどを誰も信じない
こんどこそ土産どつきり持つてくる
こんどこそさきつぱり膨れるカルメ焼き

美房 岳人 たつお 月文 雅文

こんどこそ土産どつきり持つてくる
こんどこそさきつぱり膨れるカルメ焼き
この森へ来ればあなたにまた会える
こんどからあんたひとりで行きななれ
こんどだけ許してあげるシャツの紅

丹吉 げん吉 しげお 英子 朝子 露児 雄次郎 勇太

兼題「体験」 田中正坊 選
おそろしい体験だった震度七
被災者になって成長した息子
体験が敵の手の内読んでいる

哲子 鬼遊 月子 英子

こんどから嘘は上手につきなさい
こんどこそ揃って鳴らす時の鈴
今度来るときは入籍して欲しい
こんど来る時は妻も思う旅
気の弱い鬼でこんども火傷する
ライバルの前でこんども叱られる
お土産はこんどこんどと酔った父
こんどねとオモチャ屋のまえ無事通過
こんど逢う時はしらふでいて欲しい

千歩 たもつ 哲子 鬼遊 月子 英子

こんどこそマニキュアの色変えてみる
深呼吸こんどはきつい上り坂
淀駅を降り今度こそこんどこそ
こんどから定価ですよとまけてくれ
米を研ぐこんどの僕は本物だ

人 輕率なこんどを論す慈母の愛

二度の縁こんどは飲まん人にする
許すとはこんども言わぬ喉ぼとけ
軸 こんどだけ勘弁すると捨て台詞

天 二度 許すとは

兼題「体験」 田中正坊 選
おそろしい体験だった震度七
被災者になって成長した息子
体験が敵の手の内読んでいる

天 二度 許すとは

こんどから嘘は上手につきなさい
こんどこそ揃って鳴らす時の鈴
今度来るときは入籍して欲しい
こんど来る時は妻も思う旅
気の弱い鬼でこんども火傷する
ライバルの前でこんども叱られる
お土産はこんどこんどと酔った父
こんどねとオモチャ屋のまえ無事通過
こんど逢う時はしらふでいて欲しい

千歩 たもつ 哲子 鬼遊 月子 英子

こんどこそマニキュアの色変えてみる
深呼吸こんどはきつい上り坂
淀駅を降り今度こそこんどこそ
こんどから定価ですよとまけてくれ
米を研ぐこんどの僕は本物だ

人 輕率なこんどを論す慈母の愛

二度の縁こんどは飲まん人にする
許すとはこんども言わぬ喉ぼとけ
軸 こんどだけ勘弁すると捨て台詞

天 二度 許すとは

兼題「体験」 田中正坊 選
おそろしい体験だった震度七
被災者になって成長した息子
体験が敵の手の内読んでいる

天 二度 許すとは

寿美子 惠美子 外吉 笛生 歌子 しげお 一風 佳香 歌子

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

保州 洋 外吉 三男 完次 愛論 たつお 諷云児 美津留

大往生花に埋もれている私

軸

わたしも女それ以上言えませんが

兼題「賭け」 橋高薫風選

人生の賭けがはじまる角かくし
賭けている足の運びがちと違つ
遠くても点の明かりに賭けて行く
傘持って出るのもたぶん賭けだろう
チヨコレート一枚賭けて有頂天
高卒のガッツに賭けている企業
釣書には賭けごと好きと書いてない
どり走る馬に賭けてたので笑い
勝負師の髭は剃ったり伸ばしたり
円高の強気で賭けるラスベガス
奪三振に賭けて突つたトルネード
粗削り素質に賭けてみたくなり
賭けている首は未来を向いている
賭け事はしないが子には賭けている
僕を見限つて息子に賭けている
激流で摺んだ葉に賭けてみる
政治生命賭けると所信かつこよく
いのち賭けるほどでなかつた正義感
命懸けだから臆する色も無い
患者の椅子でこの先生に賭けている
泥舟に一緒あなたに賭けてます
結婚は賭けやお祖母ちゃんも言う
賭けはまだ終っていないフルムーン
この人に賭けた私の読みがちが

隆

節子 吸江 武庫坊 紫香 英子 隆 高士 重人 紫香 隆 満州 青風 金太 保州 重人 千秀 文秋 雅文 二南 希久子 武庫坊 武庫坊 吐来 寿美子

賭け好きに終着駅は見当らず

わたくしに賭けて下さる裏切れぬ

つまずいて自分にもとる賭けがある

花びらを一つ残して待つてみる

人生は賭けだと出世した人が

伴せは余生に賭けるものがあり

この人に賭けて静かに笑っている

大金を賭けると奥歯から抜ける

住

賭けごとの好きな男がよく休む

あほらしいことに女も賭けをする

これからは自分自身に賭けてみる

母さんが賭けてみようと言つてくれ

いのちまで賭けているのに気がつかず

人

ばらが散る賭けに負けたと言つ如し

地

賭けは終つた二人で散歩でもしよう

天

ふたりには賭けとはいわぬ牧師さん

軸

人生に賭け多きこと手術台

度 希久子 弥生 佳香 射月芳 柳宏子 みつ子 しげお 露児 あやめ 真知子 グン吉 白溪子 いわゑ 智子 外吉 薰風

全日本川柳長野大会

文部大臣奨励賞

群衆が本音を吐いて山動く

川柳大賞

父の名はいちばん太い字で刻む

村上 貞穂 辻本 俊夫

残暑御見舞

川柳よしなが

横山一声

〒709-02 岡山県和気郡吉永町吉永中140
電話(〇八六九)八四一三六五

全日本川柳長野 大会に参加して

亀岡哲子

六月十日、橘高薫風主幹をはじめ田中正坊、天正千梢、西口いわるゑ、奥田みつ子、山本希久子、山本義子、亀岡哲子の一行八名が新大阪駅に集合した。この旅を企画、お世話をし、て下さった西出楓楽さんが、ご都合で欠席とすることで大変残念である。名古屋から西田柳宏子さんと合流、松本駅では地元の方の歓迎を受け、早速松本城へと向い、五層の天守まで急な階段をよじ登る。その後、我が国最古の洋風小学校、旧開智学校に立寄り、浅間ウエストンホテルに入る。前夜祭は和気あいあいのうちに、盛大に行われた。

翌十一日、抜けるような青空に、雪を頂いた北アルプスが朝陽に輝いている。素晴らしい大会日和だ。バスに分乗して松本文化会館に向かう。会場は、山なみに囲まれた広々とした敷地の立派なホールで、全国からの参加

者が続々と到着する。受付、投句を済ませてまずはやれやれ。昼食のお弁当は、青空の下、会館前の芝生に、グループごとの輪をつくり、さながら小学生の遠足である。

午後からいよいよ開会、大会関係者、地元関係者の挨拶、経過報告等に引き続き、第一部(事前投句)「群」西山金悦選ほかの入選句、各百句が披露された。



アトラクションの戸倉町少年太鼓の後、第二部(当日出句)の披露に入り、「政治」田中正坊選など、それぞれ八十二句が入選した。大会賞十四名が決り、文部大臣奨励賞一名、川柳大賞一名は日川協全幹事の投票により、後日発表される。次期開催地、熊本県代表に大会旗を引き継ぎ、万歳三唱のうちに、大会は無事終了した。

さあ、これからは信濃路観光である。藤村メ女さんも参加、計九名がジャンボタクシーに乗り込む。途中、諏訪大社秋宮に詣で、今夜の宿である上諏訪温泉に着く。ホテルの窓からの諏訪湖に沈む夕陽が美しい。夕食は、とびきりの銘酒にはろ酔い、時の経つのも忘れて歓談する。

十二日は曇り空ながら、ますますの天気の中を出発、まずルネ・ラリック美術館でフランスの香水瓶等、美しいガラス工芸品を見学した後、御柱の神事で有名な諏訪大社本宮に参拝する。ウィーナスラインは、薄くまた濃く連なる緑の中を、蓼科湖、白樺湖と進み、湖畔の食堂で昼食を取る。霧ヶ峰高原では、れんげつじの開花には少し早かったが、冷たい湧水に喉を潤したり、野鳥の声を聞いたり、大自然を満喫できた素晴らしい高原の旅であった。

柳界展望



★横浜市青葉区役所では、同区在住の本社同人菱田満秋氏を講師として6月1日から同29日まで五回にわたって青少年図書館大集會室で「川柳初心者教室」を開き、好評であった。

★全日本川柳長野大会に参加した橘高薫風本社主幹は路郎門下の大先輩で、しなの川柳社を主宰する旧知の石曾根民郎氏と大会会場で

久しぶりで再会して歓談、壇上で記念写真に納まった。

★第5回島根川柳まつりは6月17日、松江市千鳥町のホテル白鳥で開催、出席者96名で盛會裡に終幕した。

各題天位賞次のとおり。伴せな布団が屋根に干してある 松本 文字子

日課になった喫茶店のお喋り 鹿島 繭
船をつないで船もころも休ませる 金築 雨学
償いは終っていない雨の音 八木 千代

太陽と海に合点して帰る 森田 熊生
頑固な耳揉んで町内会へ行く 袖本 奏子
昨日より明るい顔で逢いにゆく 土橋 睦子

★鳥取県・気高町制施行40周年記念誌上川柳大会は、173名が参加して行われた。成績上位者は次のとおりで、気高町長賞ほかの各賞を受賞した。

賞を受賞した。

①山本磔②後藤正子③西出楓楽④内田久枝⑤鈴木公弘⑥天根夢草⑦田中道博⑧最上和枝⑨吉川寿美⑩小谷美ツ千

また、本社同人の次の2氏が各題最優秀句に選ばれた。

遙かから私へ延びてくる
かいな 田中 輝子
大根の白さに嘘が裁かれる 吉川 寿美

▼訂正▲

■7月号P47中段(全日
本川柳長野大会 特選句)
「父の名はいちばん大きい
字で刻む」↓「いちばん
太い字で刻む」▽P97中段
弔電・団体の部に大原川柳
社、個人の部に大原葉香・

丁坪サワ子を追加▽P11
8上段25行目(本社句会)
「原色の似合う…」の作者
「度」↓「美代子」▽P1
4 2上段16行目(編集後記)

新同人紹介

島 ひかる
— 紫香・岳人・飄云児・杏花推薦

井 齋 一 齋
— 萬的・狸村・金太推薦

長谷川 呂 万
— 萬的・狸村・金太推薦

稲 葉 眞 郎
— 薫風・直次推薦

「一九八九年」↓「七八九年」▽表③課題吟「若い」
選者名「小林一天」↓「小林一夫」



西森花村さんの思い出

橘 高 薫 風

昭和三十五年、川柳雑誌四百号発行の前後

と思うが、初心時代の私は川柳淀川支部句会へ勉強のため出席した時期がある。支部長は武部香林氏（若菜さんのおしどり作家としてユニークな存在）、若本多久志、西森花村、木村水堂、早川清生諸氏の活躍で初心者には魅力があった。清生氏の視野の広さと新鮮な技法、花村、水堂（養子の句を得意とされた）両氏のユーモアが個性的だった。

かくれんぼの様にタンス屋案内し

奥様がペンキ屋に来る草月流

大臣も雇われマダムも似た苦労

会場は阪急十三駅を降りた淀川郵便局、そ

こは花村、水堂氏の職場でもあった。句報に

絵はがきも色あせている山の寺

絵はがきの通りと友の旅だより

聞き込みと違ふ養子の酒の量

水堂

という句のあるように、酒をいささか以上に

たしなまれた水堂さんにくらべ、花村さんは

酒も煙草も受け付けぬらしかった。地味なお

二人だったが、暢気そうな水堂さんと真面目

なおとほけを感じさせる花村さんとは年格好

も同じぐらいい見え、好対照であり好敵手で

もあった。花村さんは、二人の子供さんの幼

いうちに奥さんを亡くされた。郵便を配達す

る職業柄身軽で、住所さえ分かれば訪問はお

手のものだった。春城武庫坊さんの話による

と、初めて花村さんの訪問を受けたときも、

電車の駅前から電話が掛って来て、あつと言

う間に玄関のベルが鳴る。道を教えもしない

のにその早いこと、さすがプロだと驚いてお

られた。

それが十年ほど前から少々様子が変わってき

た。川柳塔の勉強会で川柳ささやま社との合

同句会を催し、城跡の広場でテカンショ祭り

の輪に入って踊りをたのしんだ頃からである。

翌日の観光の途中で花村さんの姿がかき消

えてしまった。気付いた一行が手分けして探したがとうとう居所を確認出来ずに終った。その後、住所を書いただけで通信欄の真っ白なハガキが届いたり、年賀状が三枚も来たりした。それが二人や三人だけではなかったの、**「いくら郵便局やいうてもなあ」と噂し合**つたりしたものだ。

ところが不思議なことに、そんな頃でも、豊中のもくせい川柳会に見えて作句をし、立派な選をなさっていたのである。川柳に立ち向うときは正気が戻るのかも知れない。あるいは、例のとほけた振りをして年賀状でユーモアを振り撒かれたのかも知れない。六月二十四日の告別式の写真に問いかけたが、遺影から答は得られず、謎のままあの世へバイバイをしてしまわれた。

明治四十三年十月七日生まれ、行年八十六歳、西尾菜名督主幹と花村さんが相次いで加わった連の句座は、ひとしお盛り上がっているに違いない。ご冥福をお祈りする。

合同句集「私達」より

御免ねといつて仲よし先に嫁き

ぜんまいが切れたか女泣き止まず

万年床車庫入りの様すべり込み

間違いなやと宿題母にさし

間違ってしまったと冬が引き返し



嗚呼 村田善保先生

波多野 五楽庵

五月九日、突然、御逝去の報が飛びこんで来た。あんなに元気な先生だったのに、神のみぞ知る人の運命である。

先生は昭和四年生れ、まだ六十六歳のあまりにも早い旅立ちであった。弘前大学医学部の前身、弘前医科大学卒業後、産婦人科教室講師として勤務、後に国立弘前病院産婦人科医長としてその重責をはたされ、昭和四十四年に開業、地域医療に身を挺する。

その間、幾百人の赤ちゃんをこの世に産声をあげさせたことだろう。名医であり、国手であった先生のご活躍は今後ますます期待されるのが大であったはずである。

先生はロータリアンとして社会活動に精進されていた。会員の中に川柳を創る人がいたので、おそらく先生はその方々の感化を受け、川柳に興味をもたれたのではないだろうか。平成元年、川柳塔みちのくに入会。

一坪の庭にも四季の詩がある
産声にバラ色の夢かけて見る

などの作品を発表されている。医師である先生の作品には、医学に関する句が多い。

脈をとる手から心に触れてみる
癌転移 続く言葉を見失う

平成二年本社同人に推薦、第七五六号に初めて同人句を発表された。同人になった善保先生は、次第に栗先生の薫陶を受けて句の解脱が始まってゆく。三句の投句が四句になり五句になってゆく。

喜寿傘寿米寿余韻の如き味

先生は喜寿傘寿米寿と長命を保ち、その余韻を楽しもうと計画されていたのであろう。

医師会の中でもカメラの趣味、絵画鑑賞と医学以外の研鑽につとめられ、レンズを覗く情景には、男のロマンとメランコリーを見ることができぬ。

最近、発表なさる句に一期一会だとか、輪廻転生だとか、ご自分の死を見つめる句が多くなっているのが目立つ。

地吹雪が唸る自虐の鞭として
堂暗く五百羅漢の私語を聴く

そして最後の句には、予感の句が並ぶ。

桜散る一期一会と言うなかれ
散りぎわの桜花の台詞を聴いている
煩惱を闇に閉ざして桜映え

肺炎で急逝された先生。亡くなってから来たのですよ、と日本東洋医学会認定医の証を寂しそつに見せて下さった奥様のお顔が印象的であった。

多分、浄土で栗先生とビールを飲みながら川柳談義に花を咲かせていることだろう。

五月早春 なんと悲しい月だろう 合掌

8 月 各 地 句 会 案 内

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	7月30日(日) 零時半から 夜 市 川 柳 大 会	堺市総合福祉会館 7月号P119参照 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	4日(金)午後1時から 世界・私・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 まつえ	5日(土)午後1時から 観 光 ・ 宿 ・ 自 由	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	6日(日)午前11時から 300号記念川柳大会	JA会館5F JR和歌山駅前 表紙裏参照 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
ほたる 川 柳 同 好 会	8日(火)午後1時から 怠ける・雲・さばさば	豊中市立蜚池公民館 阪急蜚池駅西へ150米 〒560 豊中市蜚池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川 柳 会	10日(木)午後6時から ため息・豆腐・先祖・心配	八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川 柳 会	12日(土)午後1時半から 土産・育つ・透明・自由吟	なるお文化ホール 阪神鳴尾駅から徒歩10分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
南 大 阪 川 柳 会	18日(金)午後6時から 美男・身の上・いらいら・立派	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸 和 田 川 柳 会	19日(土)午後1時半から 人 柄 ・ 筆 ・ 変 化 ・ 頰	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地裡村
川 柳 ねやがわ	20日(日) 正 午 から 滝・ペール・焼く・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	21日(月)午後1時から 乾く・糸口・頂上・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	24日(木) 正 午 から 乾く・加減・気配り・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島凜云児
富 柳 会	24日(木)午後1時から 網(あみ)・軽い・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
京 都 塔 の 会	25日(金)午後1時から 岩・干す・鉛筆	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽
東大阪 市 川 柳 同 好 会	26日(土)午後6時から 残る・ポスト・恥・五十年	東大阪市の社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市の稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 川 柳 会	27日(日)午後1時から そわそわ・門・レントゲン・見舞い	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

応を憤っていた。

★異常な狂気の集団であるオウム真理教については、

★全日本川柳長野大会に参加した。今回は、おそらく最初にして最後の選者とおついでいささか緊張したが、それだけに終った時はホッととした気持だった。薫風主幹・柳宏子理事長のほかは、気の弱い私を励ましてやろうということから、女性の応援団が同行してくれたこともありがたかった。

★松本駅に着いて会議までにかかなり時間があつたので、松本城・旧開智学校などを見学した。以前に訪れたことがあるので、あらためてどうということもなかったが、案内してくれた観光タクシーの運転手が、例のサリン事件現場付近に住み、第一発見者であり被疑者にもされた河野さんの知人であることに対する警察の対応が、

見るのも聞くのもおぞましいので、この欄でも触れなかったが、事件を起こしたのはオウム教であることは間違いないとしても、これを放置し、第二・第三の事件を招いたのは、明らかに警察当局の無能と怠慢によるものであると断ぜざるを得ない。

★大会後、一行九人でジャンボタクシーを借り切り、諏訪湖周辺を観光したが、上諏訪温泉のホテルが素晴らしい。純和風の内部のたたずまい、おっとりした中年従業員のサービスもさることながら、特別上等の銘酒で味わった京風の会席料理にも満足した。その名は「浜の湯ホテル」、日本名旅館百選の一つに数えられているという。(正)

ひとこと

メタファーとは何か

表現の技法としての譬喩(比喩とも書く)について考えてみたいと思つていた時、この本が目についた。「メタファー思考―意味と認識のしくみ」(講談社現代新書)、カバー裏のキャッチ・フレーズにひかれて早速、読み通した。そのフレーズというのは、「月見うどんはメタファー、さらには「焼もメタファー」、もちろん、

目玉焼もメタファーである。比喩の中でも、暗喩(メタファー)の句は作るのも味わうのも難しいと思つてはいるが、要するにメタファーとは、より抽象的で分かりやすく、い対象を、より具体的に分かりやすく、すい対象に《見立て》ることだ。レトリックを専攻する学者の著作だけに、難解な部分も少なくはないが、一読の価値はある。

三条 三吉

○六月二十日、大阪管区気象台が三カ月予報を発表した。それによると、八月は太平洋高気圧に覆われ晴れ暑い日もあるが、寒気の影響を受けやすく、平均気温は低いとのこと。

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（10月号）

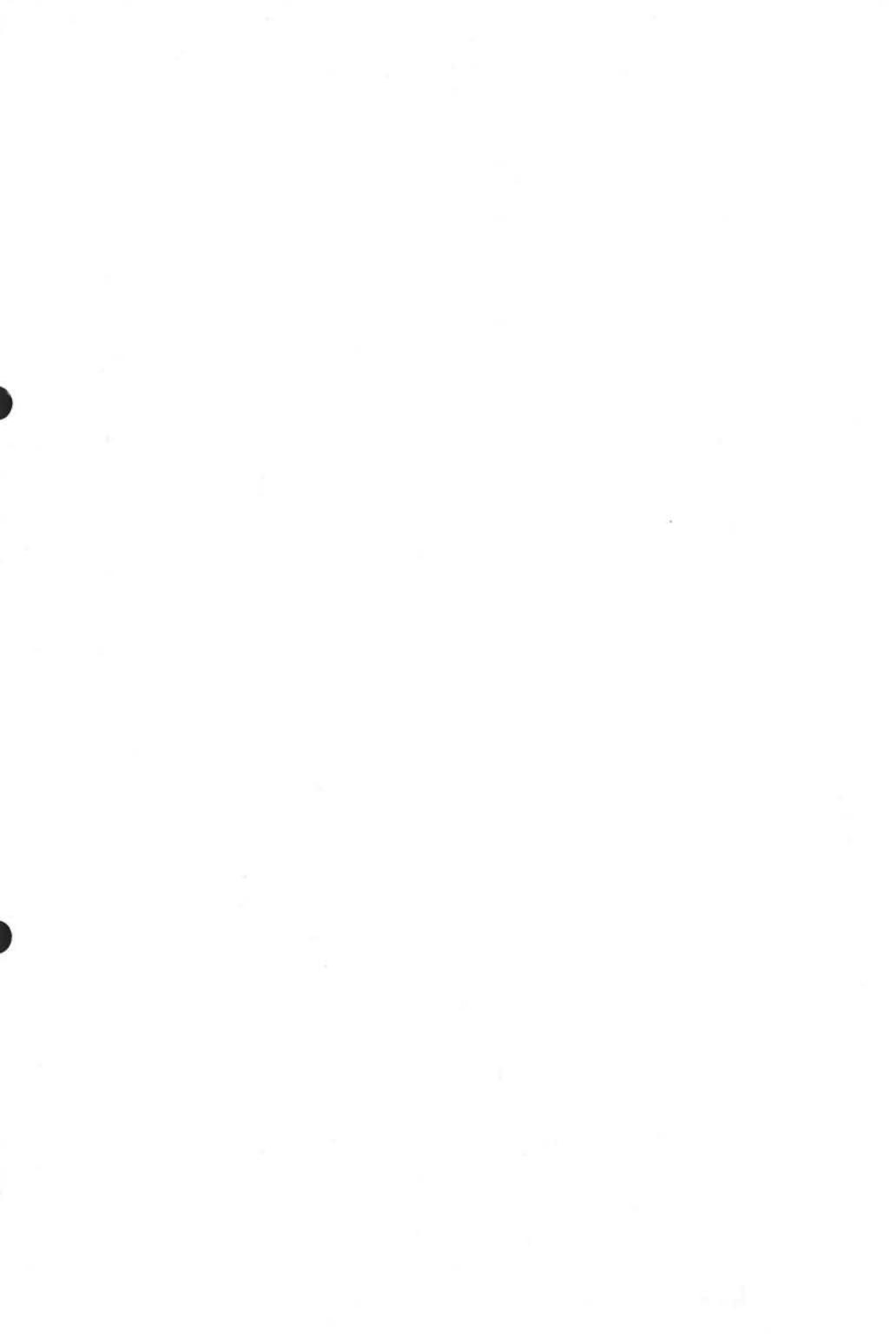
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

10月号発表表 (8月15日締切)

川柳塔 (8句)	橋 高 薫 風 選
水煙抄 (8句)	高 杉 鬼 遊 選
渺湖抄 (3句)	小 出 智 子 選
茴香の花 (3句)	西 出 楓 栞 選
「ユニーク」	小 野 克 枝 選
「ことば」	小 倉 ア サ 選
「損なう」	恒 松 町 紅 選

初歩教室「影」(3句) 吉岡美房担当

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友(誌代半年分前納者)、茴香の花欄は女性に限ります。

11月号
課題吟 「縛」「束縛」「添える」
初歩教室「元氣」

本社8月句会

と き 8月7日(月) 午後5時半
ところ メンズファッションセンター3F
中央区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
おはなし 板 尾 岳 人
兼題 「受ける」 山 本 希 久 子 選
「意外」 岩 佐 ダ ン 吉 選
「部分」 土 田 欣 之 選
「とことん」 宮 口 笛 生 選
「残念」 橋 高 薫 風 選

会 席 兼 1 題 当日発表 各題2句以内
費 500円

本社9月句会 7日(木) 予定
兼題 「出番」「必ず」「批判」「しばらく」「支え」

夜市川柳募集

第3回「返事」 小島 蘭幸選
ハガキに3句 8月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課 題 「不思議」 森中恵美子 選
ハガキに3句 8月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発 表 8月26日(土) 午前11時5分からラジオ第1放送(予定)

西日本文字放送作品募集

課 題 「派手」 森中恵美子 選
ハガキに3句 8月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

定価 六百元(送料76円)
半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百元(同)

平成七年八月一日発行
編集兼 橋 高 薫
発行人 藤 原 童 心 社
印刷所 藤 原 童 心 社
大阪市阿倍野区三好町一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
電話(06)541-6914
振替〇〇九八〇一五二三三八番

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 郷土史

各種 **本** (製作専門)

- 少数の本も取り扱っています。
- ご相談ください。

ミヤケ プランニング
MIYAKE
planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

電話 **06-659-5514**(代)

FAX **06-652-2928**

ジェイ出版

電話 **06-658-8741**(代)

21世紀へ詩歌資料を贈りましたよう

現代詩歌を総合的に収集、保存、展示、研究に資する目的の本文学館はおかげさまで開館満五周年を迎えました。こんごの充実を期すためさらにご協力をお願い申し上げます。

◇ 寄贈・收藏資料は

26万冊を超えました。

資料は、

- ・ 詩集、歌集、句集、柳集、評論、研究書、評伝
- ・ 同人、結社誌など詩歌関係雑誌
- ・ 著名詩、歌、俳、柳人の原稿、書簡、短冊、写真ほか、個人所蔵資料。

(送り方など詳細な問い合わせは文学館へどうぞ)

日本現代詩歌文学館

〒024 北上市本石町2-5-60
☎ 0197-65-1728
FAX 0197-64-3621